

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

西之菌遺跡

県道31号線新設改良工事に伴う発掘調査報告書

1978・2

鹿児島県教育委員会

序 文

鹿児島県教育委員会では、昭和52年度に実施された県道31号線（川辺・笠沙線）の新設改良工事に伴い、当該事業区内の西之蘭遺跡（笠沙町）について発掘調査を実施しました。

ここに、その調査結果を報告書として発行いたします。県教育委員会としては、この報告書が広く文化財愛護のため十分活用されることを願っています。

なお、発掘調査に当たり、笠沙町教育委員会及び鹿児島県道路建設課等関係者から多大の御協力をいただいたことに対し、厚くお礼申し上げます。

昭和53年 2月28日

鹿児島県教育委員会
教育長 国分正明

例 言

1. これは、県道31号線の新設改良工事に伴い、鹿児島県土木部道路建設課が主体者となり、鹿児島県教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査体制は次のとおりである。

責任者	鹿児島県教育委員会文化課課長	嶋元牧雄
企 画	〃	専門員 本蔵久三
	〃	課長補佐荒田孝助
事務担当	〃	係長 中條 享
	〃	主事 伊地知千晴
調査担当	〃	〃 池畑耕一
	〃	〃 長野真一
作業員	塩屋勇吉・塩屋正喜・塩屋喜次郎・宮路春義・迫栄・迫幹夫・長井ヒロ子 塩屋キク・大迫チカ・塩屋久子・宮路キク・塩屋ヒナ・塩屋スミ・森ミヨ 清水タエ子・大迫ノシ・塩屋キヨ子・塩屋ミヨ・宮路レイ子・宮路スミ子 加藤イツ・加藤ヒサ子・宮原フクエ・西田エミ子・大迫キミ・宮原エミ子 西田カズ子・長井キヌ子・上村ハルエ	

3. 本書の執筆は次のとおりである。

第1章・第2章・第3章・第4章	池畑耕一
第3章・第4章	長野真一

石器の実測・製図において別府大学学生吉留秀敏・八尋実の援助を得た。

4. 発掘調査実施について笠沙町教育委員会の協力・援助を得た。

報告書作成に当って、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏・九州歴史資料館学芸員亀井明德氏の指導を得た。

又、図版26の作成にあたって鹿児島南高校教諭河野治雄氏より写真の提供を受けた。記して謝意を表したい。

5. 本書に用いたレベルの数値は海拔絶対高である。

目 次

序

例言

第1章 調査の経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の内容	5
第1節 概要および層序	5
第2節 縄文時代	6
1. 遺構	6
2. 遺物	9
第3節 弥生時代・古墳時代	42
1. 弥生時代の遺物	42
2. 土壇	42
3. 古墳時代の土器	42
第4節 中世	45
1. 建物	45
2. 遺物	46
第4節 近世	50
第4章 まとめにかえて	51

挿 図 目 次

第1図 周辺の出土遺物(1)	2	第12図 縄文式土器(5) (1 b類)	15
第2図 遺跡の周辺	3	第13図 縄文式土器(6) (1 b類)	16
第3図 周辺の出土遺物(2)	4	第14図 縄文式土器(7) (1類)	17
第4図 土層図	5	第15図 縄文式土器(8) (1類)	18
第5図 列石	6	第16図 縄文式土器(9) (1類)	19
第6図 1号集石遺構と出土遺物	7	第17図 縄文式土器(10) (2類~6類)	20
第7図 2号集石遺構	8	第18図 縄文式土器(11) (7類)	21
第8図 縄文式土器(1) (1 a ₁ 類)	9	第19図 縄文式土器(12) (7類)	22
第9図 縄文式土器(2) (1 a類)	11	第20図 縄文式土器(13) (8類)	23
第10図 縄文式土器(3) (1 a ₂ 類)	12	第21図 縄文式土器(14) (8類)	24
第11図 縄文式土器(4) (1 b類)	14	第22図 縄文式土器(15) (9類~12類)	25

第23図 縄文式土器(10) (底部・土製品) ……………26	第33図 石器(10) (石核) ……………40
第24図 石器(1) (石鏃) ……………29	第34図 石器(11) (敲石・くぼみ石・砥石) ……………41
第25図 石器(2) (石鏃) ……………30	第35図 土壇と出土遺物……………43
第26図 石器(3) (石匙・削器・石錐) 31	第36図 古墳時代の出土遺物……………44
第27図 石器(4) (打製石斧) ……………33	第37図 建物……………45
第28図 石器(5) (磨製石斧) ……………34	第38図 中世の遺物(1) (磁器) ……………47
第29図 石器(6) (剝片石器) ……………36	第39図 中世の遺物(2) (土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・土錘) ……………49
第30図 石器(7) (石斧状石器) ……………37	第40図 近世の遺物……………50
第31図 石器(8) (剝片) ……………38	
第32図 石器(9) (大形剝片) ……………39	

折 り 込 み 図

地形図・遺構配置図

表 目 次

第1表 1 a類の出土地一覧表……………10	第5表 石鏃分類表……………28
第2表 1 b類の出土地一覧表……………13	第6表 土錘計測表……………48
第3表 1類(胴部・底部)の出土地一覧表……………19	第7表 縄文式土器出土地点比較表……………53
第4表 7類～10類, 底部の出土地一覧表……………27	

図 版 目 次

図版 1-1 西之藪遺跡遠景(西より)	図版 5-1 2号集石遺構(南より)
図版 1-2 西之藪遺跡近景(南より)	図版 5-2 2号集石遺構(西より)
図版 2-1 調査地区全景(東より)	図版 6-1 列石(西より)
図版 2-2 調査地区全景(東より)	図版 6-2 列石(北より)
図版 3-1 縄文式土器散布状況(東より)	図版 6-3 土壇(北より)
図版 3-2 縄文式土器散布状況(西より)	図版 7-1 建物(北より)
図版 4-1 1号集石遺構(西より)	図版 7-2 建物(東より)
図版 4-2 1号集石遺構(南より)	図版 8-1 墓壇群(西より)

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|--------------|
| 図版8-2 | 1号墓塚（東より） | 図版21-1 | 石鏃 |
| 図版9-1 | 2号墓塚（西より） | 図版21-2 | 石匙 |
| 図版9-2 | 3号墓塚（西より） | 図版22-1 | 打製石斧（表） |
| 図版10-1 | 4号墓塚（東より） | 図版22-2 | 打製石斧（裏） |
| 図版10-2 | 1号墓塚の人骨（南より） | 図版23-1 | 磨製石斧（表） |
| 図版11-1 | 縄文式土器 1 a ₁ 類 | 図版23-2 | 磨製石斧（裏） |
| 図版11-2 | 縄文式土器 1 a ₂ 類 | 図版24-1 | 剥片石器 |
| 図版12-1 | 縄文式土器 1 a ₂ 類 | 図版24-2 | 剥片石器 |
| 図版12-2 | 縄文式土器 1 b類 | 図版25 | 剥片石器とその出土状況 |
| 図版13-1 | 縄文式土器 1 b類（表） | 図版26 | 塊状耳飾り |
| 図版13-2 | 縄文式土器 1 b類（裏） | 図版27 | 古墳時代の土器 |
| 図版14-1 | 縄文式土器 1 b類（表） | 図版28-1 | 磁器 |
| 図版14-2 | 縄文式土器 1 b類（裏） | 図版28-2 | 磁器底部 |
| 図版15-1 | 縄文式土器 1類（表） | 図版29-1 | 磁器底部内面 |
| 図版15-2 | 縄文式土器 1類（裏） | 図版29-2 | 磁器底部 |
| 図版16-1 | 縄文式土器 1類（表） | 図版30-1 | 磁器 |
| 図版16-2 | 縄文式土器 1類（裏） | 図版30-2 | 磁器碗 |
| 図版17-1 | 縄文式土器 1類 | 図版30-3 | 磁器碗 |
| 図版17-2 | 縄文式土器 2類～6類 | 図版31-1 | 陶器（表） |
| 図版18-1 | 縄文式土器 7類 | 図版31-2 | 陶器（裏） |
| 図版18-2 | 縄文式土器 7類 | 図版32-1 | 土師器・須恵器・瓦質土器 |
| 図版19-1 | 縄文式土器 8類 | 図版32-2 | 土錘 |
| 図版19-2 | 縄文式土器 8類 | 図版33-1 | 1号墓塚の土器と釘 |
| 図版20-1 | 縄文式土器 9類～12類 | 図版33-2 | ふいご口と鉄滓 |
| 図版20-2 | 土製品 | | |

第1章 調査の経過

加世田と野間池を結ぶ県道31号線は、海岸に迫った急崖のため道幅が狭く、曲線の多い道路となっている。加世田土木事務所は、この道路の拡幅・直線化を進めている。

一方、笠沙町赤生木地区は、古くより石斧・土器など多くの遺物が採集されていたが、広く知られるところには至らなかった。昭和50年10月、笠沙町教育委員会は、県道拡幅に伴う、唐人塚と呼ばれていた無縁仏の移転に立ち会い、周辺に多量の土器片が散布しているのを知った。届けを受けた県教委文化課は、西之蘭遺跡の発掘調査を計画し、県土木部と連絡を取りあい、昭和52年度に調査することとした。

4月19日、加世田土木事務所に土木事務所・笠沙町教育委員会・文化課が集まり、具体的な調査計画が話し合われた。

日誌抄

- 5月6日(金) 重富の収蔵庫より発掘用具を遺跡プレハブに運搬する。
- 5月9日(月) 発掘調査開始。トレンチ設定。1B～D区・2B・C区の表層掘りさげ。
- 5月10日(火) 2B・C区・3B・C区の表層掘りさげ。
- 5月11日(水) 3B・C区・4B・C区・5B・C区・6B区の表層掘りさげ。
- 5月12日(木) 6A～C区・7A～C区・8A～C区・9A～C区の表層掘りさげ。
- 5月13日(金) 表層排土終了。10A・B区・11A区に土坑10基検出。
9A～C区・10A～C区・11A・B区の表層掘りさげ。
- 5月16日(月) 全体を清掃し、写真撮影。南北方向のアゼ断面実測。土坑墓掘りあげ。
- 5月17日(火) 平板測量。南北方向のアゼ除法。3C区～7C区の2層掘りさげ。土坑墓掘りあげ。人骨残存。6B区～8B区にピット列。
- 5月18日(水) 土坑墓掘りあげ。5基に人骨残存。2層掘りさげ。
- 5月19日(木) 4B区・5B区・6B区を中心に清掃・写真・取りあげ。土坑墓清掃・写真撮影・人骨取りあげ。
- 5月20日(金) 4C区～8C区の掘りさげ。清掃・写真撮影。東西方向のアゼ断面実測、除去。8C区・9C区周辺に多くのピットがある。
- 5月23日(月) ピットの实測。8B区・9B区の掘りさげ。8B区に集石。
- 5月24日(火) ピットの实測。8B区～10B区の2層掘りさげ。9B区に土坑墓1基検出
8B区の集石実測。
- 5月25日(水) 3C区～8C区の2層掘りさげ。
- 5月26日(木) 雨で作業中止。
- 5月27日(金) 10B・C区掘りさげ。4C区の集石実測。4B区・5B区の列石実測。
- 5月28日(土) 掘りさげ。実測終了で調査は終了した。
- 5月30日(月) 発掘用具を重富の収蔵庫へ運搬。現地で今回の発掘調査の結果を説明。

第2章 遺跡の立地と環境

薩摩半島西岸はゆるやかな海岸線が続く吹上砂丘から、加世田付近で一転して複雑な海岸線へと変わる。加世田・野間池間は、入り込みの多い岩礁性の海岸線が続き、野間岳（591 m）を中心とする山地から海岸線へ急崖をつくって落ちる。

笠沙町赤生木は、笠沙町の北東部にあって大浦町に接し、古くは川辺郡赤生木村に属する。江戸時代に始まった大浦干拓は、現在、大浦町越路と赤生木を結ぶ線に達しており、その内側に肥沃な水田地帯をつくっている。当遺跡周辺の低地もこの干拓工事により陸地と化し、現在遺跡は海岸の築堤より1 kmも中にはいりこんでいる。大浦以西は、前にも述べたように海岸線まで急傾斜で落ちる地形をしているが、当遺跡付近は、これらの中で唯一のなだらかな地形をしている。西には深く谷がはいりこみ、その中を清水川が流れている。

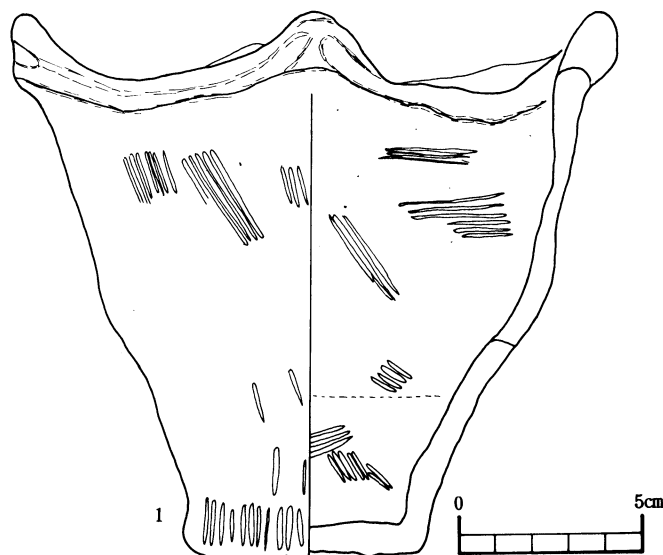
大浦・笠沙地区は、従来考古学的調査が遅れており、ようやくその緒についただけである。しかし最近、地元の研究者らの努力によってしだいに遺跡の数は増加しつつある。

縄文時代の遺跡は入り江の両側に多く知られる。前期の遺跡として、小畑遺跡、上ムネ塚ノ園遺跡・後原遺跡・大畑遺跡・楠木原遺跡など、後期の遺跡として柿ノ園遺跡・上ムネ塚ノ園遺跡・小長遺跡など、晩期の遺跡として原タクラ紫曲田遺跡・上ムネ塚ノ園遺跡などがある。小長遺跡よりは十字形石器の出土が知られる。清水川の河口付近にある清水からは、カキがらのついた市来式土器が出土し周辺よりも石斧などが出土している（第1図・第3図）。

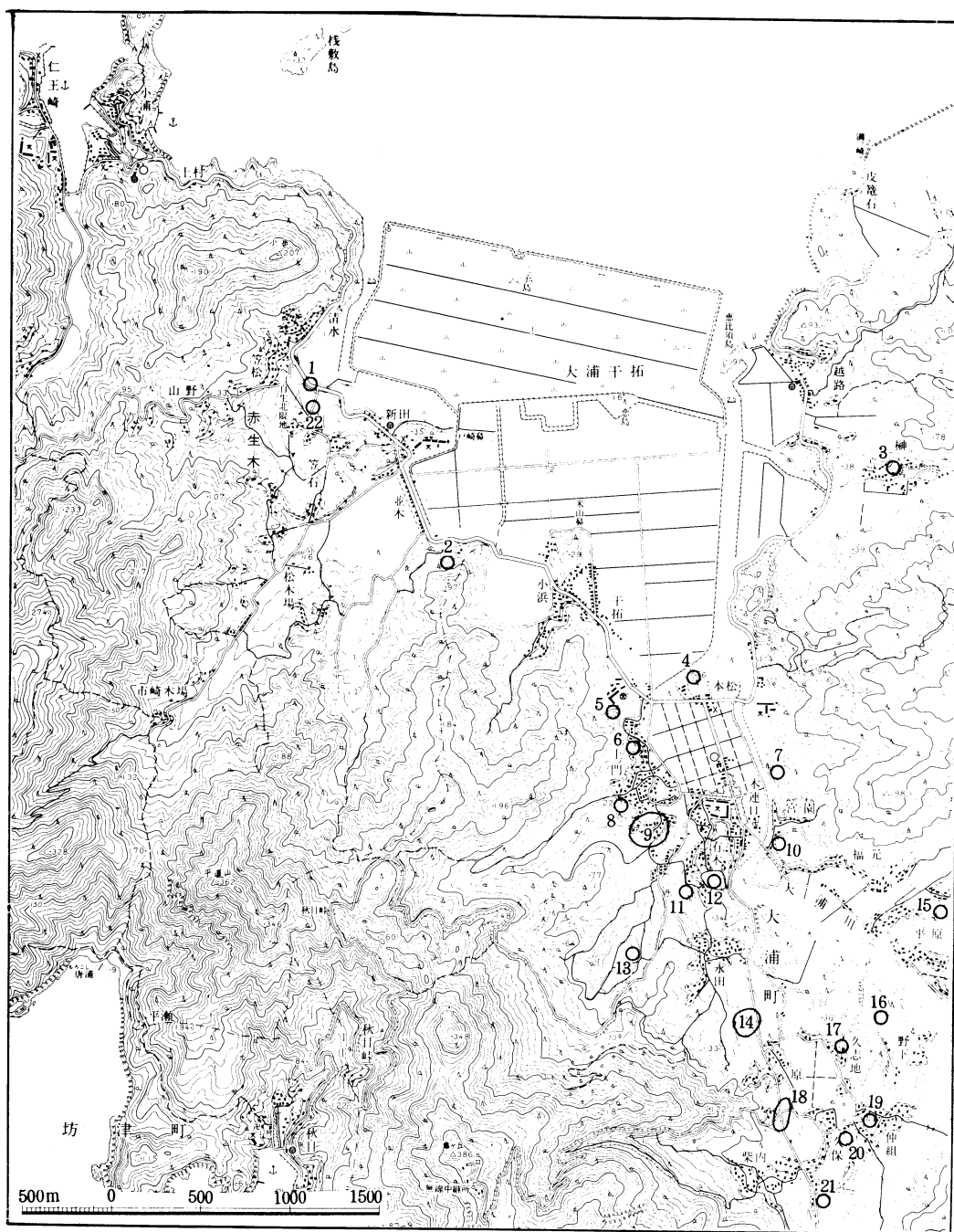
弥生時代～古墳時代の遺跡も台地先端近くに集中している。その全んどは弥生時代終末期～古墳時代の遺跡で、星太郎貝塚もこの時期にあたる。他に上野門遺跡・小浜権現社遺跡・永田遺跡・平原遺跡などがこの時期のものである。西之蘭遺跡周辺の台地一帯も、古墳時代の土器が広く散布している。

西之蘭遺跡の南側の畑地には多量の五輪塔があり、地元の人々は『アングドン』と呼んでいる。ここが『加世田再撰史』にある慶昌庵跡と推定されている。

参考文献：鹿児島県教育委員会『鹿児島県市町村別遺跡地名表』1977年

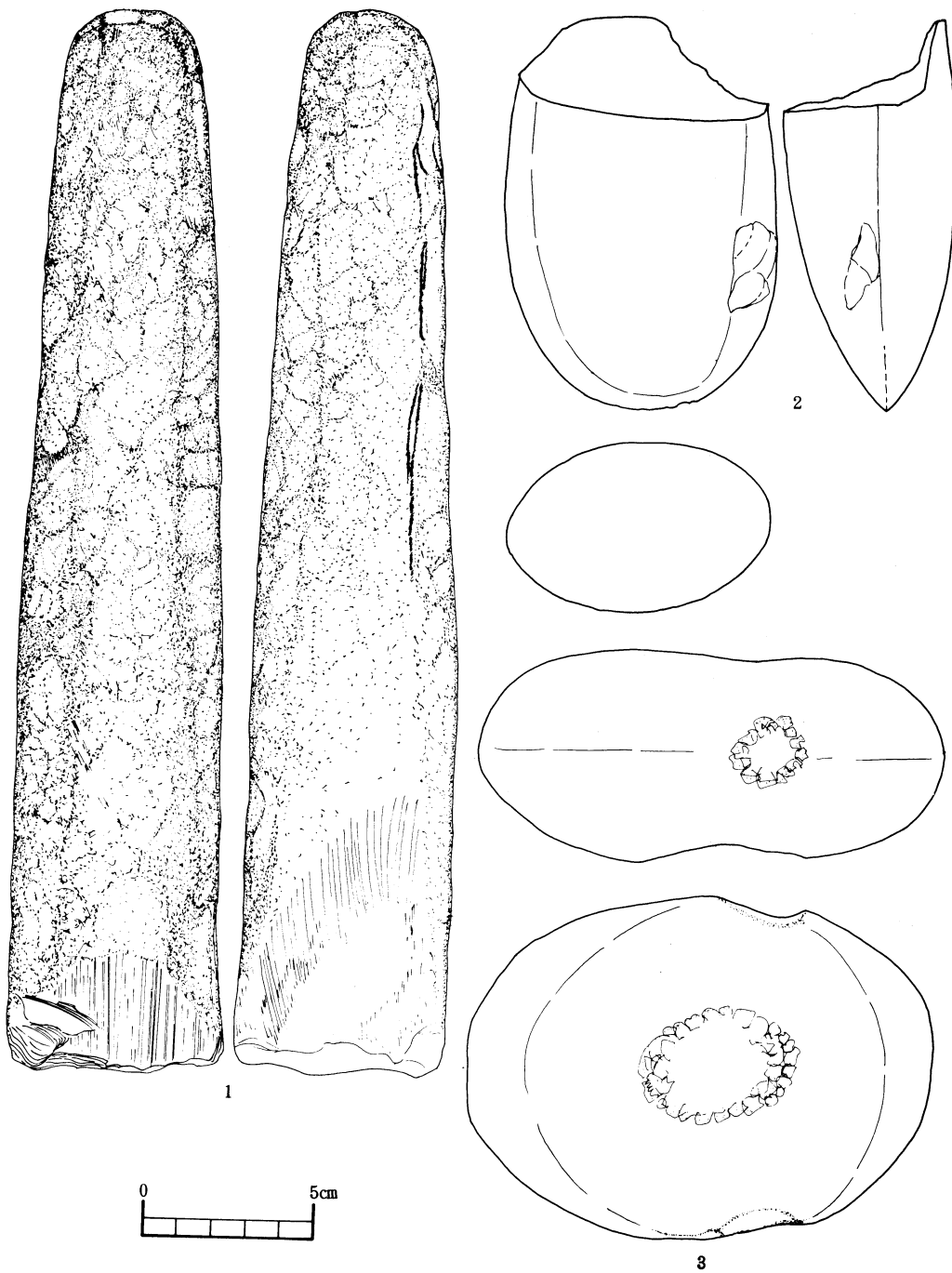


第1図 周辺の出土遺物(1)



- 1 西之園遺跡 2 馬込園遺跡 3 寺園遺跡 4 宮園前遺跡 5 上野門遺跡 6 星太郎貝塚
 7 後原遺跡 8 原口遺跡 9 小浜権現社遺跡 10 上ムネ塚ノ園遺跡 11 永田遺跡 12 福元
 遺跡 13 小長遺跡 14 柿ノ園遺跡 15 平原遺跡 16 大畑遺跡 17 権現堂遺跡 18 原タクラ
 紫曲田遺跡 19 楠木原遺跡 20 小畑遺跡 21 狩集原遺跡 22 慶昌庵推定地

第2図 遺跡の周辺



第3図 周辺の出土遺物(2)

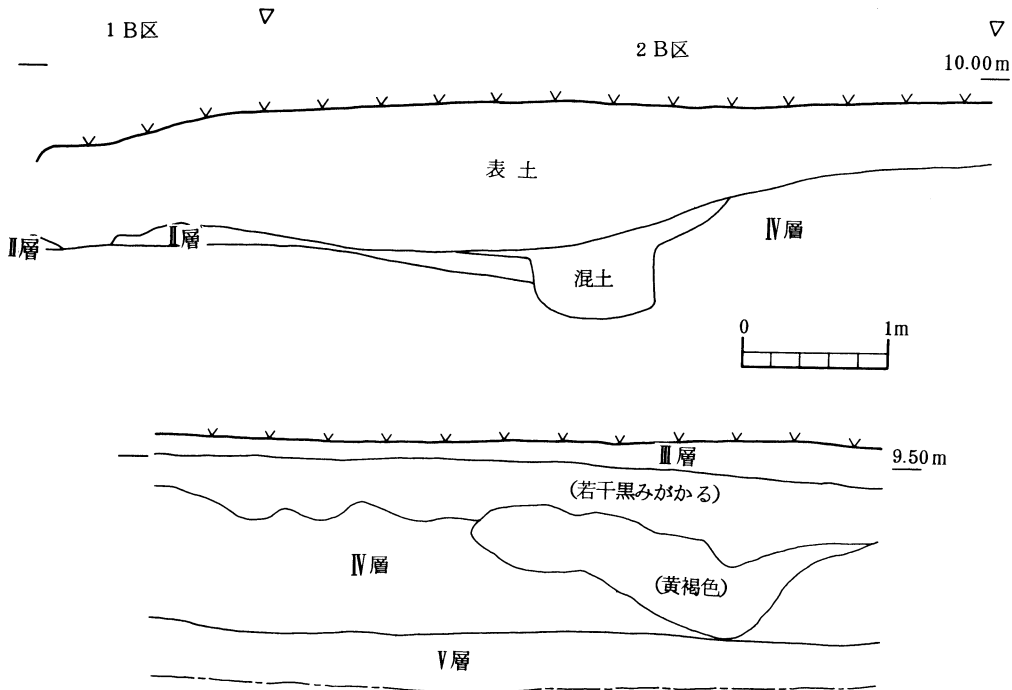
第3章 調査の内容

第1節 概要および層序

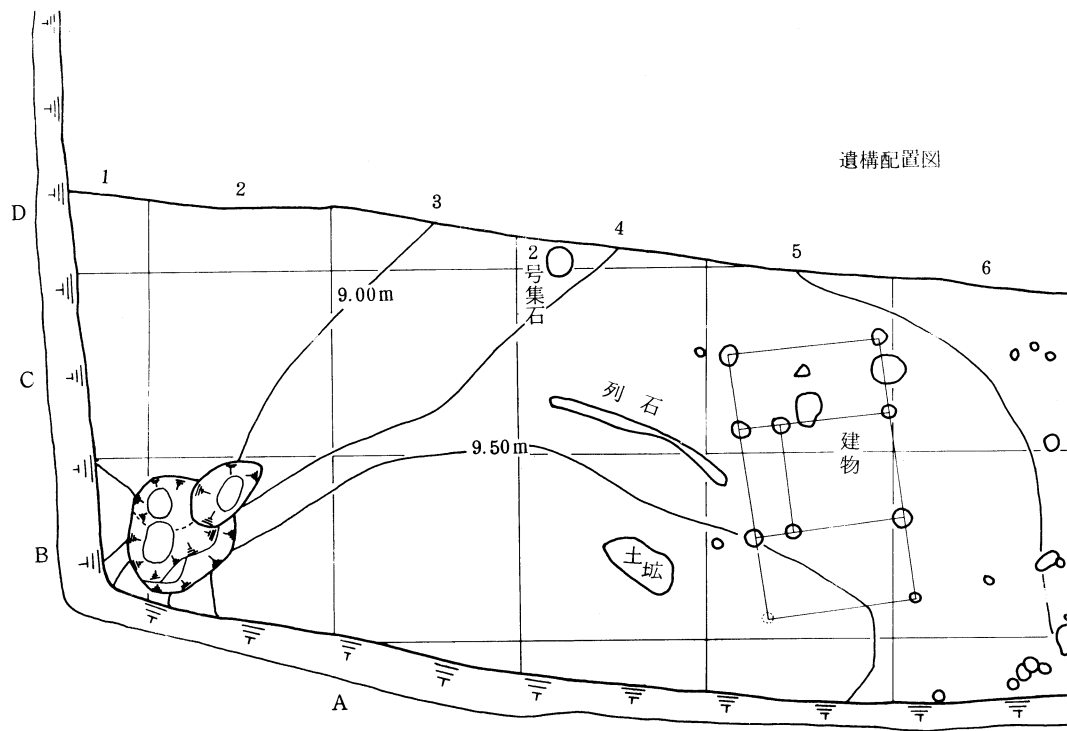
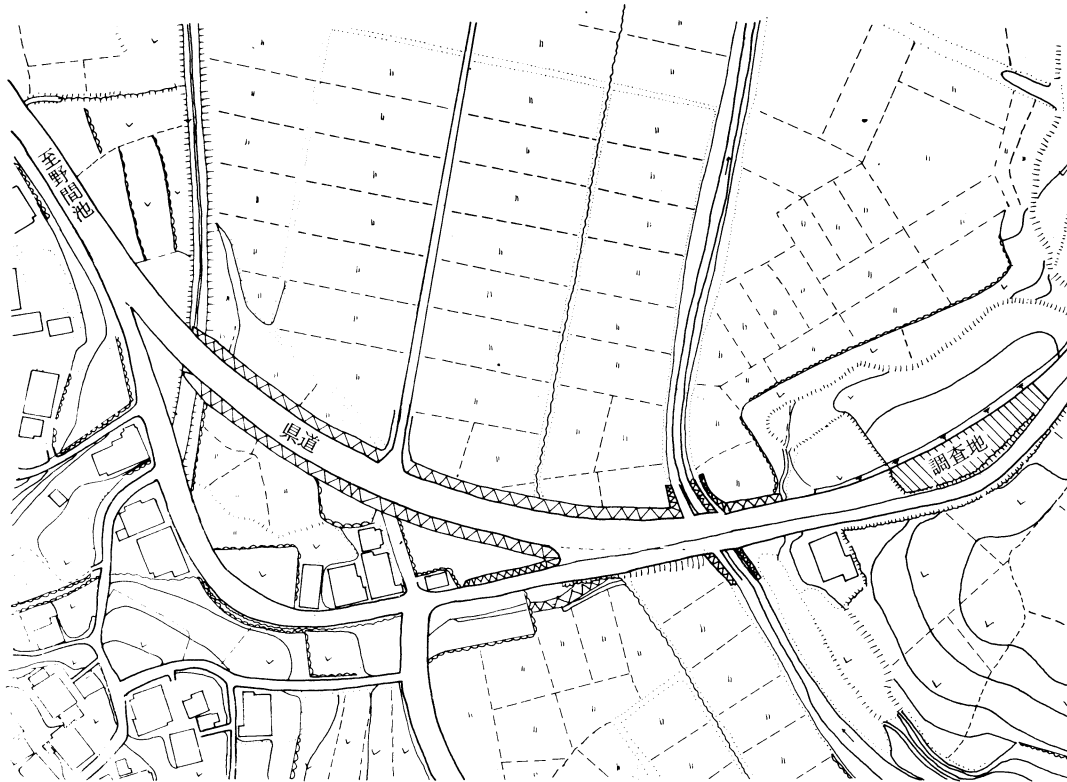
西之藪遺跡は笠沙町赤生木字西之藪にある。北側に下降傾斜する台地の先端付近にあり、大浦干拓以前は海に面していたものと思われる。台地を横断している県道がゆるやかに曲線をえがく所の内側にあたり、表土面で標高約9mを測る。今回は県道拡幅部分約600㎡について調査を行った。調査区域の西端は、切断されており急崖になっている。現在は、北へむかってゆるやかに下降しているが、西側では下部の層が表面にでており、東側では1層が厚く堆積していることより考えれば、かつては西南方向より東北方向へ向かってかなり急な角度で下降したと思われる。

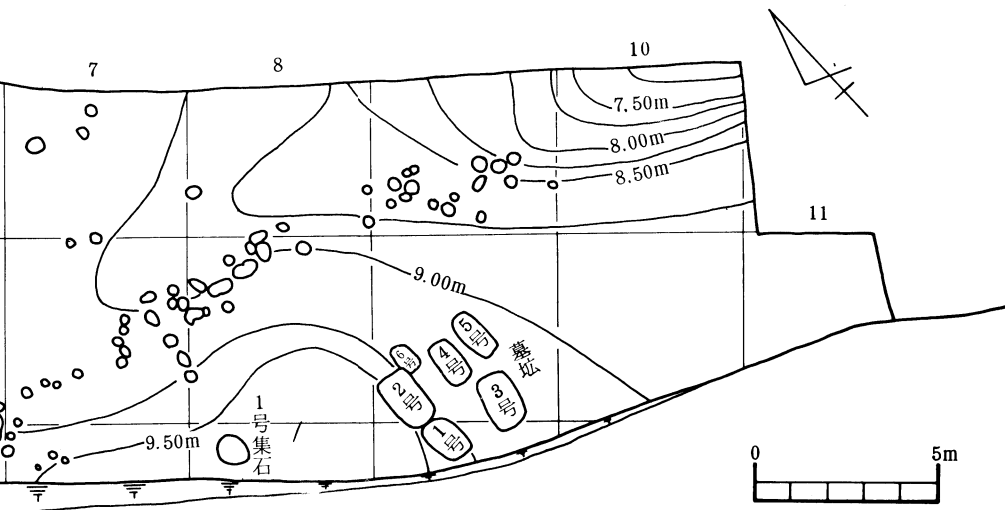
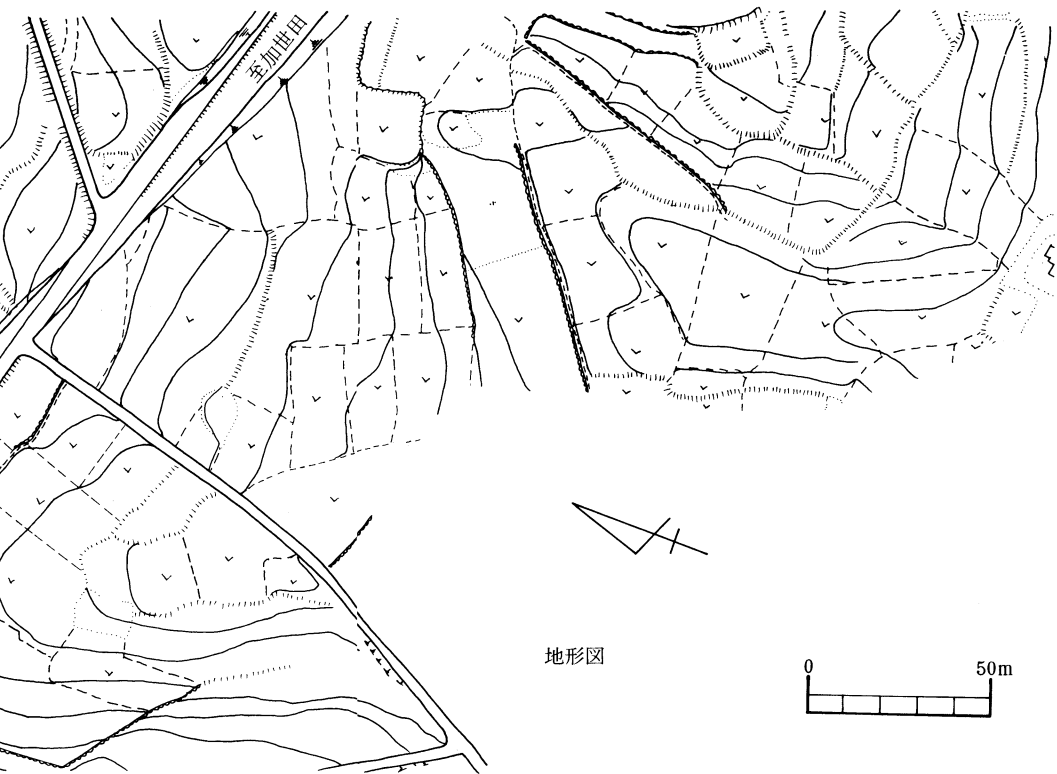
縄文時代の遺構は集石遺構2と列石1があり、遺物は2層の残存している3区から9区にかけてほぼ平均して散布している。古墳時代の遺構は土壇があり、遺物は土壇内と表層中にある。中世の遺構は、建物1棟と柱穴列があり、遺物は表層中にある。近世の遺構は土壇墓群がある。

基本的な層序は次のようになっている。Ⅰ層（耕作土）：厚さ約40cmを測るが、北東隅では深さ2mと深い。Ⅱ層（黄褐色砂質土）：部分的に削除されている部分もある。土師器・中世遺物の包含層である。Ⅲ層（明茶褐色粘質土）：縄文時代の遺物はこの層に包含されているが前期・後期の遺物とも上面近くに集中している。遺構はこの層を掘り込んでいる。Ⅳ層（乳灰色火山灰：シラス）：以下無遺物層。Ⅴ層（茶褐色粘質土）。



第4図 土層図





第2節 縄文時代

1. 遺構

(1)列石 (第5図)

4 C区より4 B区・5 B区へと幅20cm～40cm、長さ 515cmにわたって、1列～2列に狐をえがいて角礫が配石されている。これらは部分的に離れている所もあるが、ほぼ連続しており、ほとんど同じ面上にある。角礫の大きさも10cm大のものから40cm大のものまで大小あるもののほぼそろっている。周囲に人工遺物はない。両はしはⅢ層が耕土下に出ているために、列石がどのように続くのかははっきりしない。

(2)1号集石遺構 (第6図)

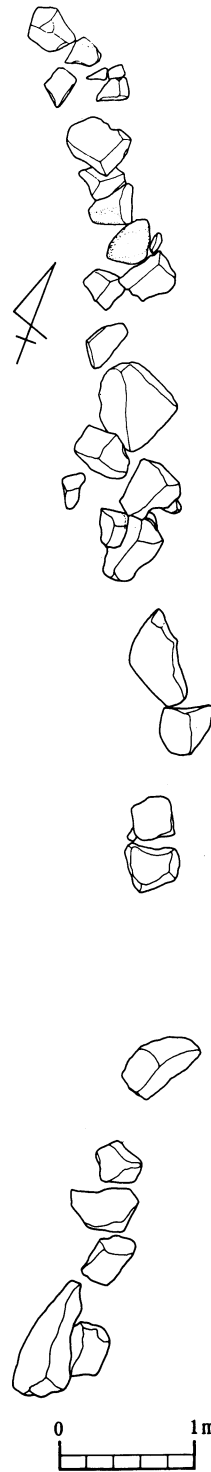
8 A区にある集石遺構である。径80cmの円形をした土塚の中に角礫を中心とする石塊が堆積している。10cm前後の角礫を主体とするが、中には25cmほどの大きなものもあり、円礫も含まれている。石塊は深さ約20cmの中に重なりあって存在する。石材は砂岩を主体とし、焼けた痕跡等の変化はみられない。集石の東側に7点、他に6点の土器片がみられる。7点の土器片は集石の上に集中してのっており同一個体である。

2は集石にのっていた土器である。復元口径29.5cmを測り口縁部が最大に広がる器形である。口縁端部は若干内傾化し平坦面をもつ。外面は幅の広い貝殻条痕がつき、内面は横方向のていねいなで整形で仕上げる。外面には煤が付着している。3・4・5も同様に整形されている。これらは茶褐色を呈し、胎土には石英・長石等の細かい砂粒を多く含んでいる。他に3点の小破片がみられるが、剥脱が目立つ。

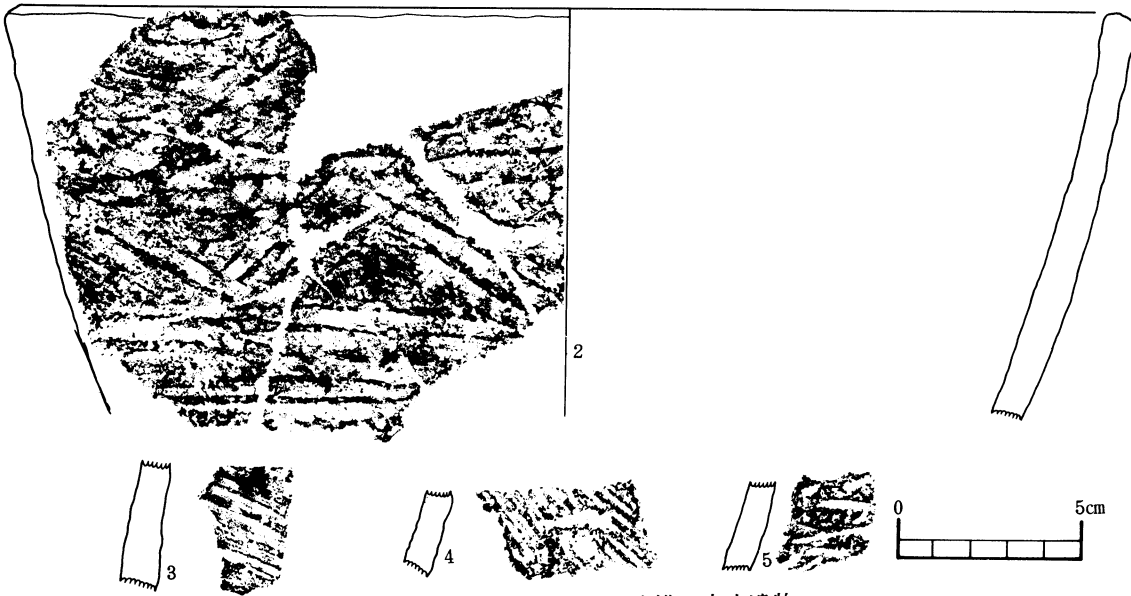
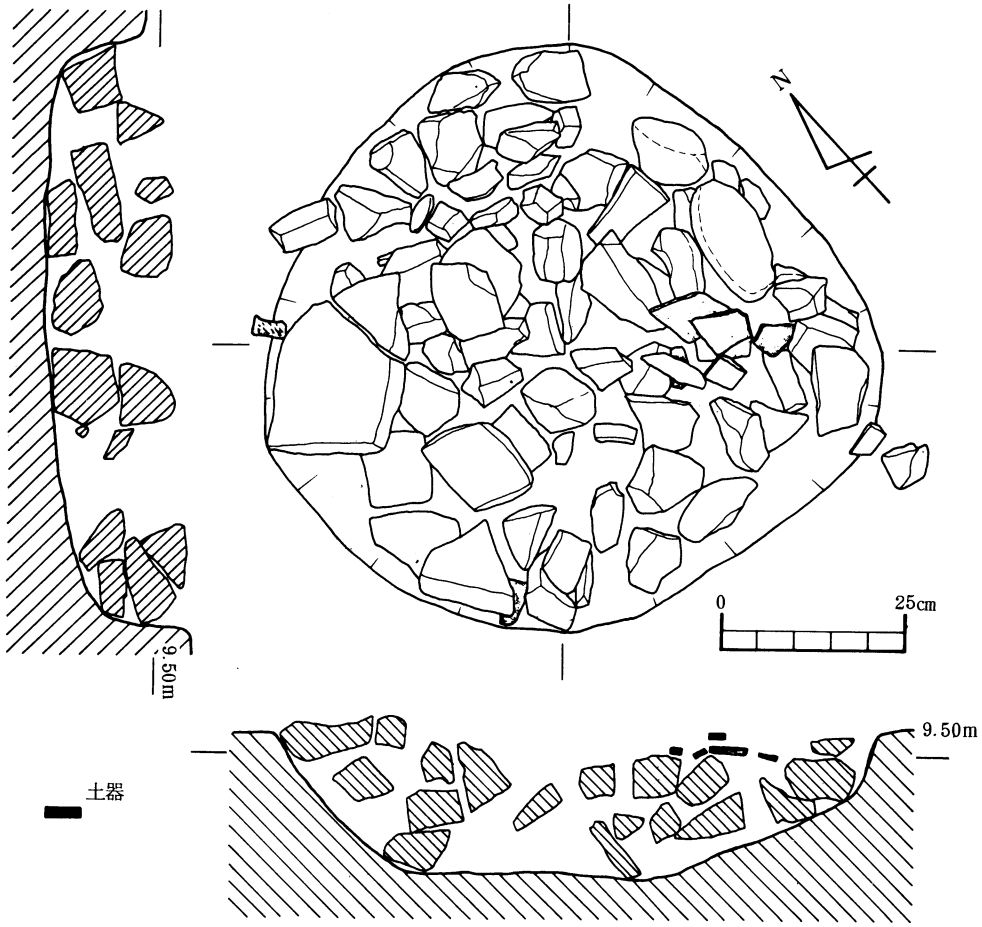
土器は西之藪1 a類に属するものである。

(3)2号集石遺構 (第7図)

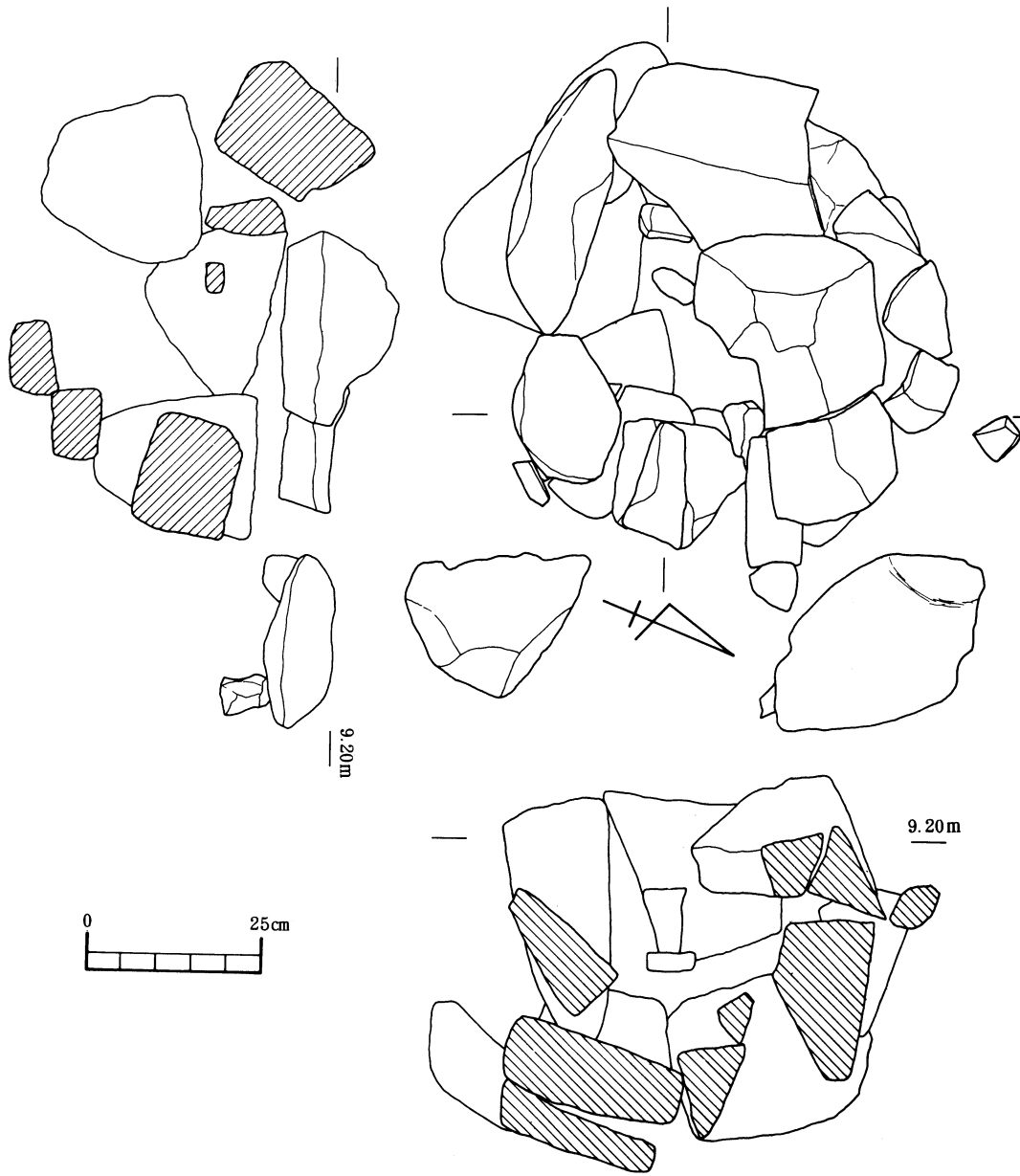
4 C区・4 D区にある集石遺構である。95cm×85cmの範囲に10cm～40cm大の角礫・円礫が集石している。深さ55cm位の深さまで重なりあって存在する。石材は周辺に存在する砂岩が多く、焼けた痕跡など石に変化はみられない。石の下に玄武岩の剥片1点が見られる他に加工された遺物はない。



第5図 列石



第6図 1号集石遺構と出土遺物



第7図 2号集石遺構

2. 遺物

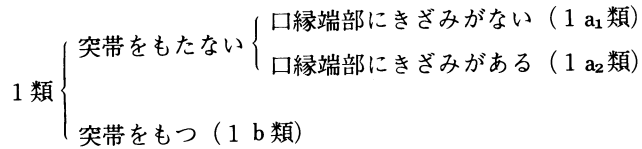
(1) 土器

① 1類

1類は二枚貝の腹縁で内面・外面を整形する土器である。

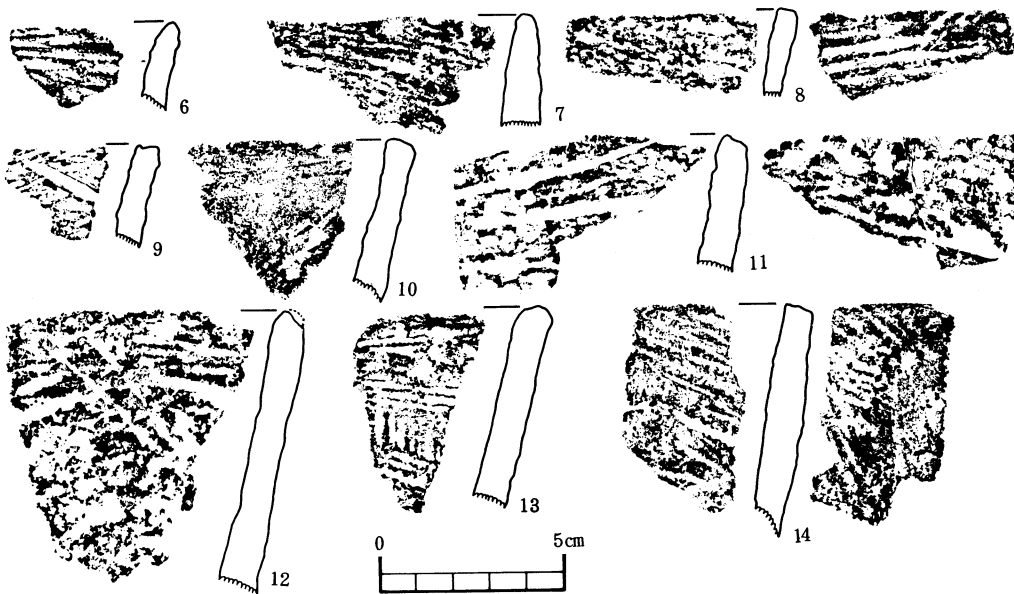
口縁部

1類の口縁部を突帯の有無・きざみの有無から次のように細分した。



1 a₁類 (第8図)

口縁部に向かって広がりながら直立する器形をし、口縁端は平坦な面をもつものが多いが丸みをもつものもある。内面・外面とも二枚貝腹縁で横方向あるいはななめ方向にあらくなでられるが、13の内面はていねいなで整形である。色調は茶褐色・灰褐色・黒褐色を呈し、外面にススの付着しているものもある。胎土は石英・長石などの砂粒を多く含むもので、表面剥脱も目立つ。特に12などの外面はほとんど剥脱している。11は輪積みによって作られたと思われる痕跡を残している。器厚は10cm足らずのものが多いが、6・8・9のように薄いものもみられる。



第8図 縄文式土器(1) (1 a₁類)

1 a₂類 (第9図・第10図)

開きながら直立する器形で口縁部外面にはきざみが付される。きざみはヘラ様施文具によるたて方向の短いきざみが多い 太いきざみ・長いきざみもある。口縁部は平坦な面をもつものが多く特に33・34・38・47~49などのように広い幅をもつものもある。小破片が多いため不明なものも多いが、口縁は若干波状を呈するものが多い。外面は二枚貝腹縁による横方向あるいはななめ方向のあらい整形であるが、25はその上に細いヘラ様施文具のたて方向沈線が付される。内面はほとんど横方向のていねいななで仕上げられるが、貝殻による細かい条痕のついたものもある。色調は茶褐色・黒褐色・灰褐色を呈し、外面にススの付着しているものもある。胎土は石英・長石・雲母などの細砂粒を多く含む砂質胎土であるが、中には1cm大の小石粒も含まれており、部分的に剥脱のあるものもみられる。15は復元口径25cmを測り、若干波状を呈する。18は復元口径28cmを測り、口縁部のきざみは短い。21は復元口径47cmと大きく、これも口縁は波状を呈する。22は復元口径16cmと小さく、口縁は波状を呈し、剥脱が目立つ。24は焼成が良く、口縁部のきざみ、外面の貝殻条痕とも細い。50は波状口縁の頂部で、頂部は内面・外面とも稜をもつほど厚みを増す。この稜にも横方向のきざみが付される。両面ともなで整形できざみは短い。51は補修孔とみられる焼成後の穿孔がある。これは外面よりうがたれる。

図番	類	出土区	層	色調	備考	図番	類	出土区	層	色調	備考
6	1	特別区	1	黒褐色		30	2			暗茶褐色	剥脱多し スス付着
7	〃	5 B	2	暗茶褐色	スス付着	31	〃	8 C	1	茶褐色 外は黒色	
8	〃	4 B	2	黒褐色		32	〃	9 B	1	茶褐色	
9	〃	5 C	1	黒褐色		33	〃	9 B	2	暗茶褐色	
10	〃	8 C	1	明茶褐色	スス付着	34	〃	10 B	2	明茶褐色	
11	〃	5 B	2	灰褐色		35	〃	10 B	2	茶褐色	
12	〃	5 B	2	淡茶褐色	剥脱多し	36	〃	9 B	1	外・黒褐色 内・茶褐色	
13	〃	4 C	2	茶褐色		37	〃	9 B	2	暗茶褐色	
14	〃	4 B	2	淡茶褐色		38	〃	4 C	2	灰褐色	スス付着
15	2	8 C	1	茶褐色	剥脱多し 口縁が波状	39	〃		1	茶褐色	条痕が曲線化
16	〃	6 C	1	茶褐色	剥脱多し	40	〃		1	茶褐色	内面が剥脱
17	〃	8 C	1	明茶褐色		41	〃	9 C	1	暗茶褐色	
18	〃	10 B	2	茶褐色		42	〃	9 B	2	茶褐色	
19	〃	9 B	2	黒褐色		43	〃	10 B	2	暗茶褐色	
20	〃	9 C	1	黒褐色		44	〃	8 B	2	黒褐色	
21	〃	8 B	2	茶褐色	口縁が波状	45	〃	土塚墓1		茶褐色	剥脱多し
22	〃	9 B	2	茶褐色	剥脱多し 口縁が波状	46	〃	10 B	2	茶褐色	剥脱多し
23	〃	5 B	2	灰褐色		47	〃	9 B	2	灰褐色	部分的に剥脱
24	〃	9 B	2	暗灰褐色	部分的に剥脱	48	〃	8 B	2	暗茶褐色	
25	〃	5 B	2	明茶褐色		49	〃	8 B	2	黒褐色	
26	〃	9 B	2	茶褐色	スス付着	50	〃	9 B	1	明茶褐色	
27	〃	10 B	2	黒褐色		51	〃	8 B	2	暗茶褐色	穿孔
28	〃	9 C	1	茶褐色	口縁が波状	52	〃	8 B	2	黒褐色	
29	〃	7 C	2	灰褐色							

第1表 1 a類の出土地一覧表



第9図 縄文式土器(2) (1 a₂類)



第10図 繩文式土器(3) (1 a₂類)

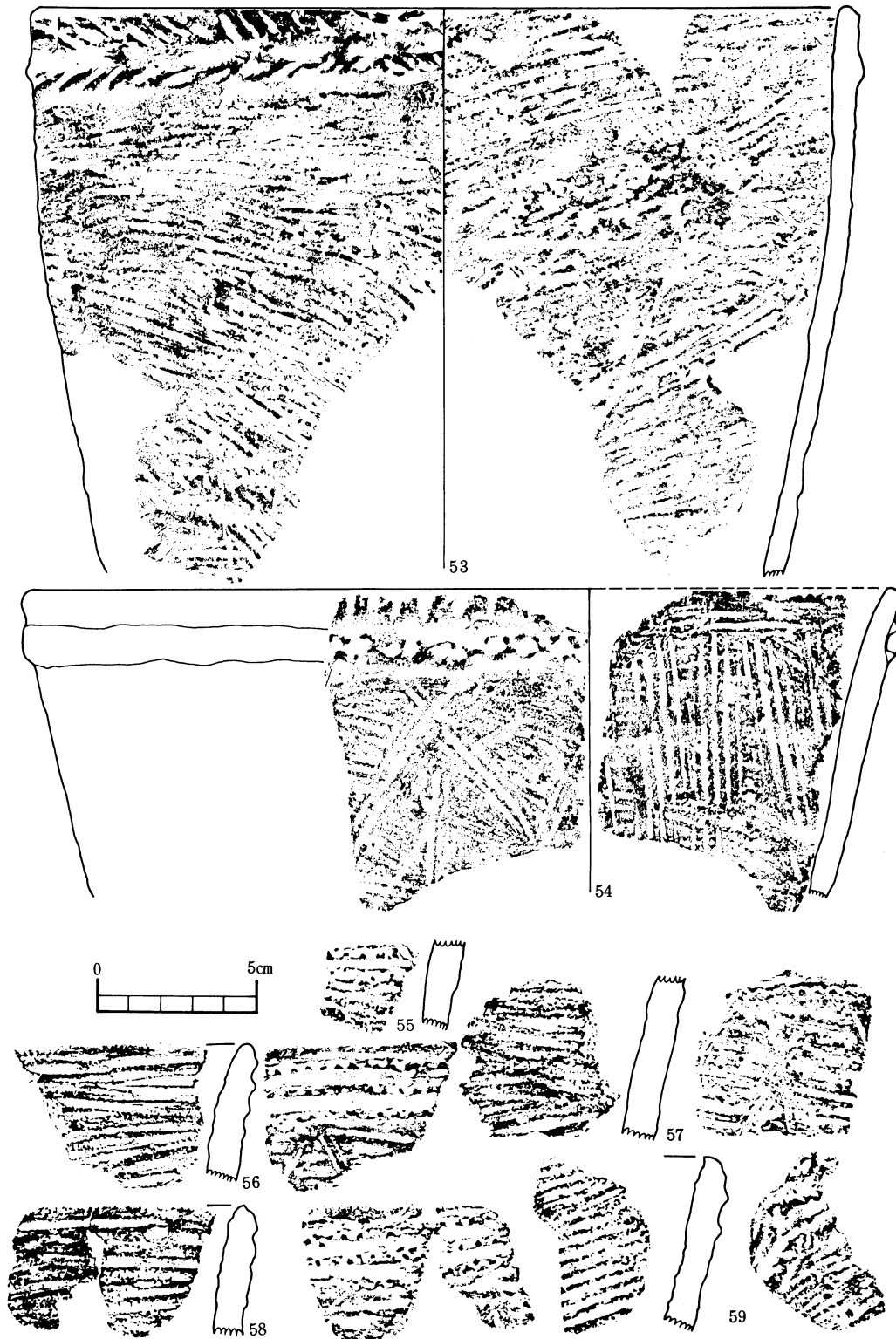
1 b類 (第11図～第13図)

口縁部に向かって開きながら直立する器形をし、口縁部近くに1～3条の突帯を有する。内面、外面とも二枚貝腹縁であらくなでられ、端部は平坦な面をもつものが多い。ここにはほとんどの土器にきざみがつけられる。色調は茶褐色・黒褐色を呈し、ススの付着するものもある。胎土は石英・長石粒などを含む砂質胎土であるが、特に石英粒が多く、黒曜石片を含むものもある。剝脱のみられるものも多い。

53は復元口径25cmで、口縁部近くに突帯が付き、これには左下がりのきざみがつく。口縁端部にも右さがりのきざみがつき、綾杉状を呈す。54は復元口径35cmを測り、口縁端部にはたて方向のきざみがつく。1条のはりつけ突帯には深い刺突文が付される。内面は横方向あるいはたて方向の整った条痕がつき、外面はななめ方向の条痕の上を斜格子文が描かれる。55～58は黒褐色を呈し焼成良好で堅い。外面・内面ともあらい条痕がつき、口縁部近くには3条の浅い突帯があり、この上には突帯と平行に二枚貝腹縁の押圧痕がみられる。59はきざみのある突帯が曲線をえがき、口縁部にはきざみがある。60は薄い土器で、一条の突帯には右さがり、口縁端部にはたて方向の小さいきざみがつく。突帯の上と下には小さい刺突文がつく。内面はたて方向と横方向の条痕、外面は斜格子文がつく。61は2条の小さい突帯に、こまかいきざみが密につき、口縁端のきざみもこまかい。62の内面は斜め方向の条痕の上をたて方向になでている。62・63の突帯の上は刺突文が付される。64は2条の貼り付け突帯があり、この上に貝の殻頂部で引くようにして押圧をつける。口縁端部も同じ手法である。65は端部が丸みをもっており、頂部にこまかいきざみのある、高い三角貼り付け突帯が付される。66・67は一条の突帯に、68は2条の貼り付け突帯にたて方向のきざみがつく。69～76は突帯あるいは口縁端部のきざみを左下がりにあるいは右下がりにつけ、綾杉状を呈している。72のきざみは深い。

図番	出土区	層	色調	備考	図番	出土区	層	色調	備考
53	6 C	1	黒褐色	スス	65	6 C	1	黒褐色	
54	5 C	2	茶褐色	スス	66	10 C	2	外・茶褐色 内・黒褐色	剝脱アリ
55	4 B	2	茶褐色		67	6 B	2	茶褐色	スス
56	6 C	2	黒褐色	口縁にきざみなし	68	5 C	2	茶褐色	
57	5 D	2	黒褐色		69	特別区	1	茶褐色	剝脱アリ
58	6 C	2	黒褐色		70	2 C	1	明茶褐色	
59	6 C	2	茶褐色	口縁にきざみなし	71	4 C	2	暗茶褐色	
60	8 B	2	黒褐色		72	6 C	2	黒褐色	
61	10 B	2	黒褐色		73	6 C	2	黒褐色	
62	4 B	2	暗茶褐色		74	10 B	2	茶褐色	
63	10 B	2	暗茶褐色		75	6 C	1	黒褐色	スス
64	8 C	1	淡茶褐色		76	5 B	2	黒褐色	

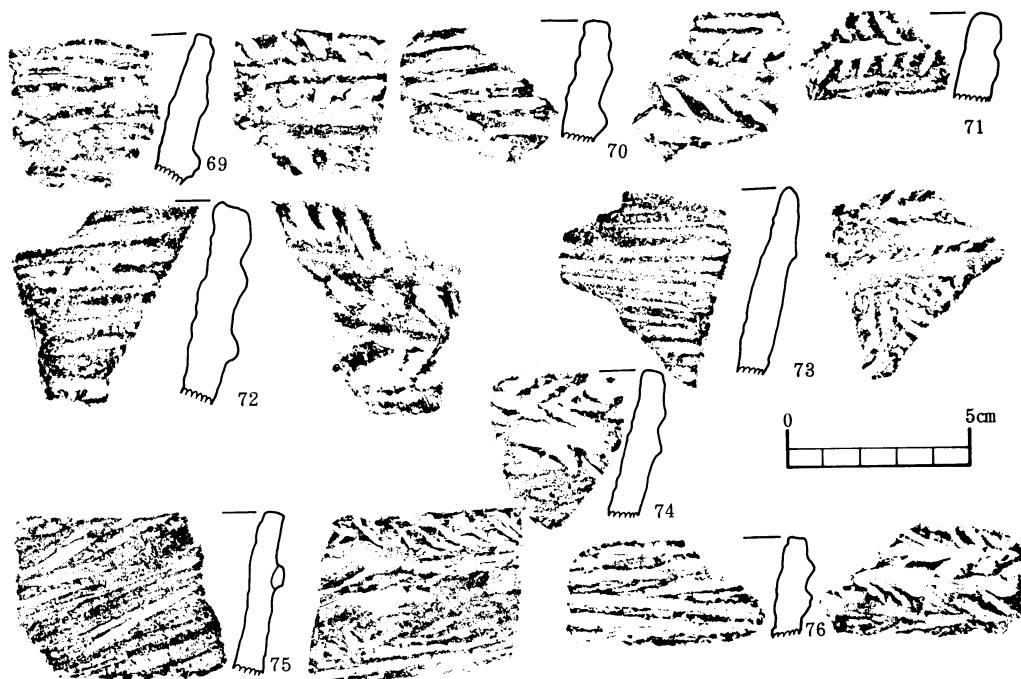
第2表 1 b類の出土地一覧表



第11図 縄文式土器(4) (1 b類)



第12図 縄文式土器(5) (1 b類)



第13図 縄文式土器(6) (1 b類)

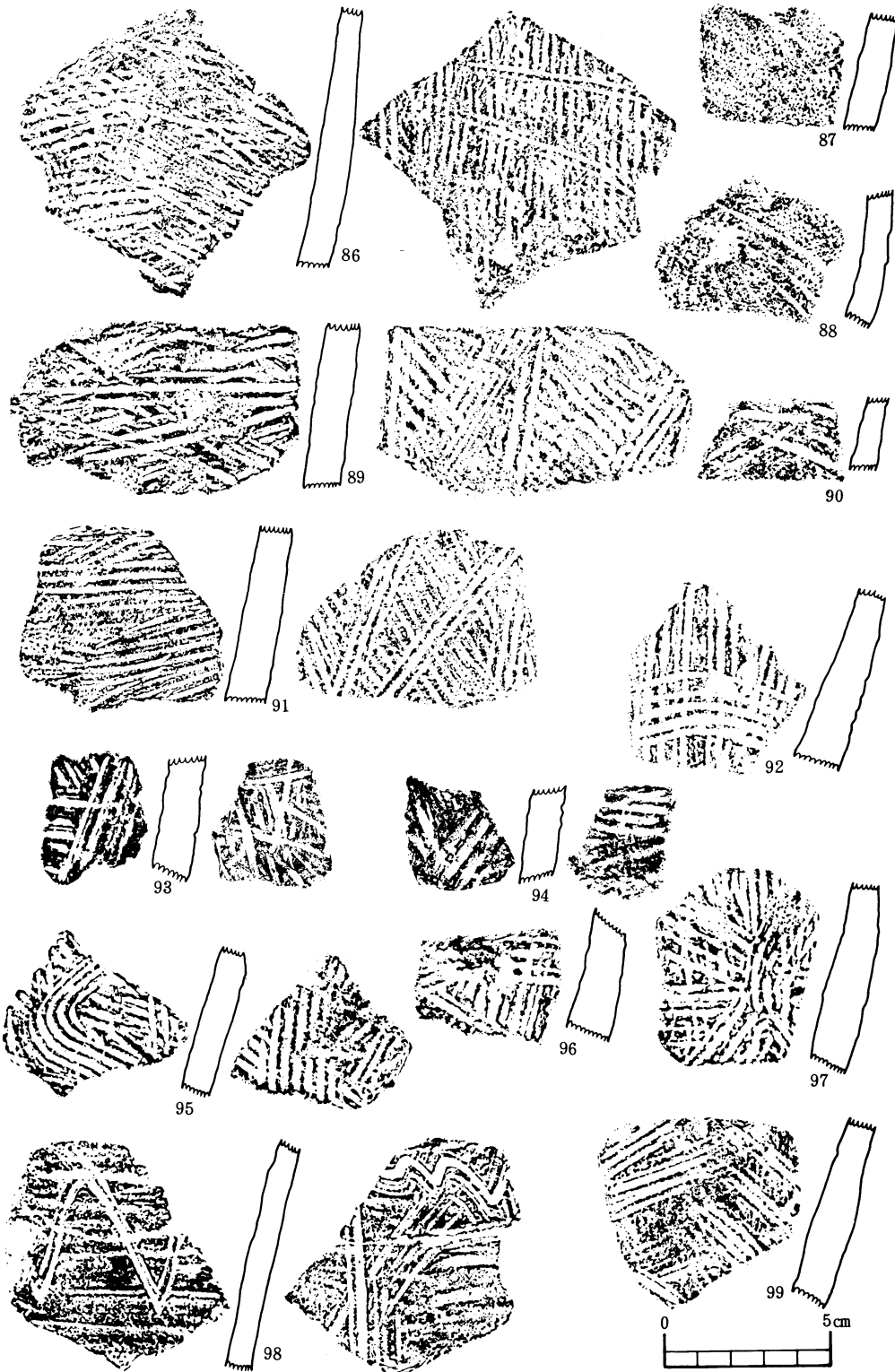
胴部 (第14図・第15図)

これらは口縁部と同じく茶褐色・黒褐色を呈している。胎土は石英粒を多く含んだ砂質のもので中には5mm大の小石粒も含まれる。

77~83・86・89・91の外側はあらい条痕の上を、同じ施文具で、たて方向あるいはななめ方向になでて格子文を描く。内面も77・81が浅い条痕であるほかは、あらい条痕が横方向あるいはななめ方向につく。これらの器厚は1cm前後と厚く、焼成もよくて堅致である。84・85は条痕の上をへらで線刻し格子文を描く。へら沈線は右下がりより左下がりが早い。内面は横方向になでられる。87は両面ともなで整形によるが、外面にはへら沈線がみられる。88は両面ともなで整形によるが、外面にへら沈線で木の葉様の模様を描いている。92・96・97はたて方向のあらい条痕の上に二枚貝腹縁による曲線がかかれる。97はこの間に横方向あるいはななめ方向の条痕がつき複雑な模様になる。内面はこまかい横方向の条痕がついている。95の外側はななめ方向とたて方向の条痕で格子文をえがき、内面はこれに曲線がえがかれる。98の外側は横方向の条痕の上に格子文がえがかれ、その上部に波状文がある。内面は横方向の条痕の上に2条の鋸歯文がえがかれる。焼成は良好である。99の外側は左下がりの条痕と右下がりの条痕で綾杉状の形を呈する。



第14圖 繩文式土器(7) (1類)



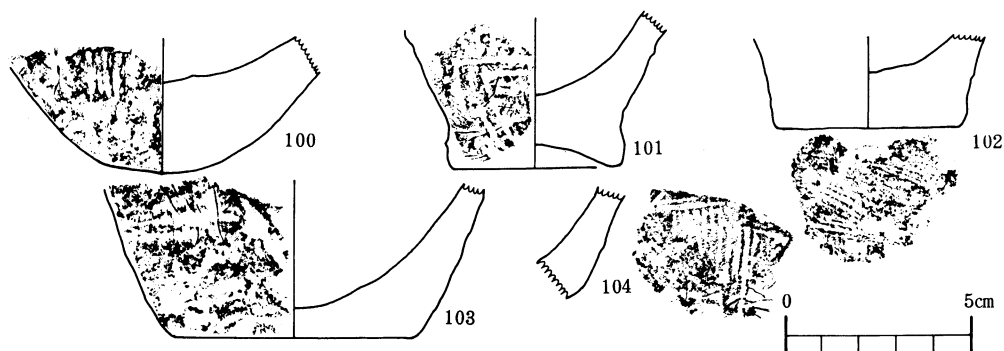
第15図 繩文式土器(8) (1類)

底部 (第16図)

1類のものと思われる底部が5点ある。100は丸底で底の器厚 2.4cmと厚いが、焼成は良好である。外面は底近くまであらい貝殻条痕がつく。灰褐色を呈し、石英粒など砂粒を多く含む。101はあげ底で、底径4.5cmと小さい。底に近く若干外にふくらむ。外面はあらい貝殻条痕がつき内面はなで整形である。茶褐色を呈し、あらい砂粒を多く含む。102・103は平底である。102は底径5cmと小形で、外面はこまかい条痕がつき、底にも同様の条痕がつく。103は底径6.5cmを測り底に近く若干外側にふくらむ。剥脱が多くみられ、外面はあらい貝殻条痕がつく。104は底部近くの破片で外面は貝殻条痕がつく。明茶褐色を呈し、焼成良好で25・50などに類似している。

図番		出土区	層	色 調	備 考	図番		出土区	層	色 調	備 考
77	胴部	5 B	2	黒褐色		91	胴部	5 C	1	黒褐色	
78	〃	6 C	2	〃		92	〃	5 C	1	茶褐色	若干剥脱
79	〃	8 B	1	茶褐色 上部は黒褐色		93	〃	6 C	1	〃	
80	〃	4 C	2	黒褐色		94	〃	4 C	2	外・茶褐色 内・黒褐色	
81	〃	5 B	2	〃		95	〃	6 C	2	茶褐色	
82	〃	6 C	2	〃		96	〃	4 B	2	〃	92と同一?
83	〃	8 B	2	〃		97	〃	5 C	1	〃	若干剥脱
84	〃	5 C	1	〃		98	〃	5 B	2	黒褐色	
85	〃	4 B	2	茶褐色		99	〃	4 B	2	外・茶褐色 内・黒褐色	
86	〃	5 C	1	暗茶褐色		100	底	5 B	2	灰褐色	
87	〃	10 B	2	〃		101	〃	9 B	2	茶褐色	
88	〃	10 B	2	茶褐色		102	〃	9 B	2	〃	
89	〃	5 C	1	黒褐色		103	〃	9 B	1	〃	剥脱多し
90	〃	10 B	2	茶褐色		104	〃	9 B	2	明茶褐色	

第3表 1類 (胴部・底部) の出土地一覧表



第16図 縄文式土器(9) (1類)

② 2類 (第17図 105)

山形押型文土器で8 B区1層より出土している。口縁端部は丸みを持ち、円筒の器形をしている。内面・外面とも横方向になでられ、外面には稜が丸みをもった山形押型文を付している。黄褐色を呈し、石英・黒雲母など砂粒を多く含むが中には5mm大の砂粒も多い。

③ 3類 (第17図 106)

厚みをもった器厚をし、外面はなで整形の上を二枚貝腹縁で稜杉状に整形する土器で10 B区2層より出土している。口縁端部は内面に若干内傾し、器厚13mmを測る。二枚貝の筋線は6本を数える。内面はていねいななで整形である。茶褐色を呈し焼成は良い。こまかい砂粒を多く含む。

④ 4類 (第17図 107)

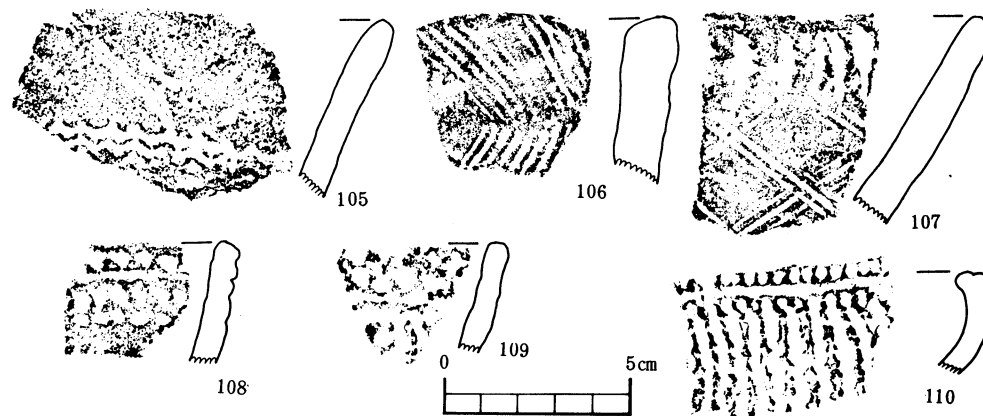
口縁部付近に二枚貝腹縁による押圧文を平行に巡らし、その下部には格子文を付す土器で10 C区1層より出土している。器厚10mmを測り、端部は平坦面をつくるが、角は丸みをもっている。内面・外面ともていねいな横なで整形で焼成は良い。外面は黒褐色、内面は茶褐色をし、長石・石英・黒雲母などのこまかい砂粒を含む胎土中には1cm前後の小石粒も含まれている。

⑤ 5類 (第17図 108・109)

刺突文を巡らす土器で5 C区1層より出土している。2点出土しているが同一個体と思われ、109は表面の剝脱が目立つ。口縁端部近くに1列の刺突文があり、一条の沈線を挟んで、その下に2列の刺突文が巡らされる。器厚7mmと薄く、端部は平坦面を残す。内面はていねいななで整形である。茶褐色をし石英粒などを混入したこまかい砂質胎土である。

⑥ 6類 (第17図 110)

キャリッパー形の口縁をもつ土器で5 C区2層より出土している。外面には二枚貝腹縁によるていねいな平行押圧文が付され、その上に刺突文が付される。端部は内側に拡張され、沈線を挟んで、ていねいな刺突文が付されている。内面の横なではていねいである。茶褐色を呈し外面にはススが付着している。石英などの細砂粒を含み、焼成は良好である。

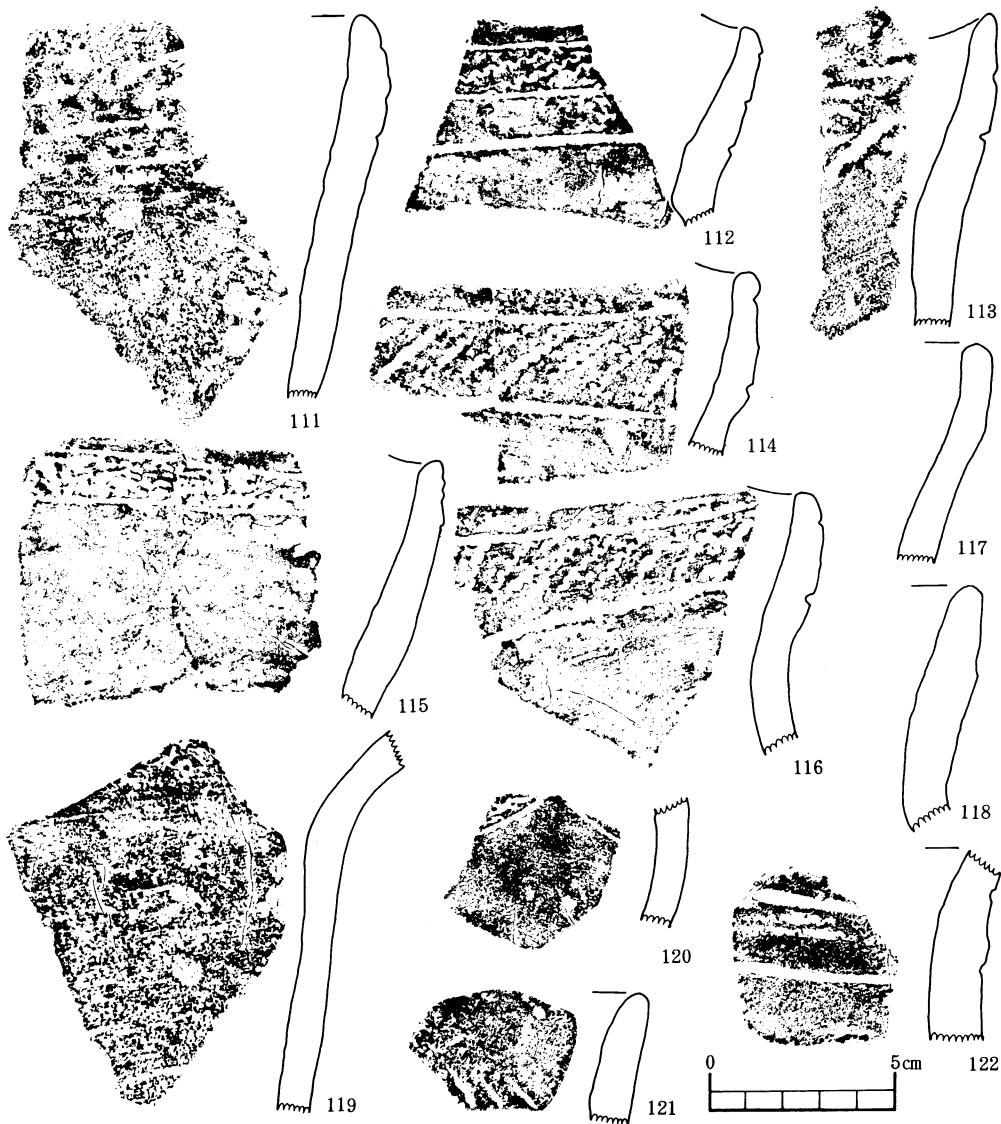


第17図 縄文式土器(10) (2類～6類)

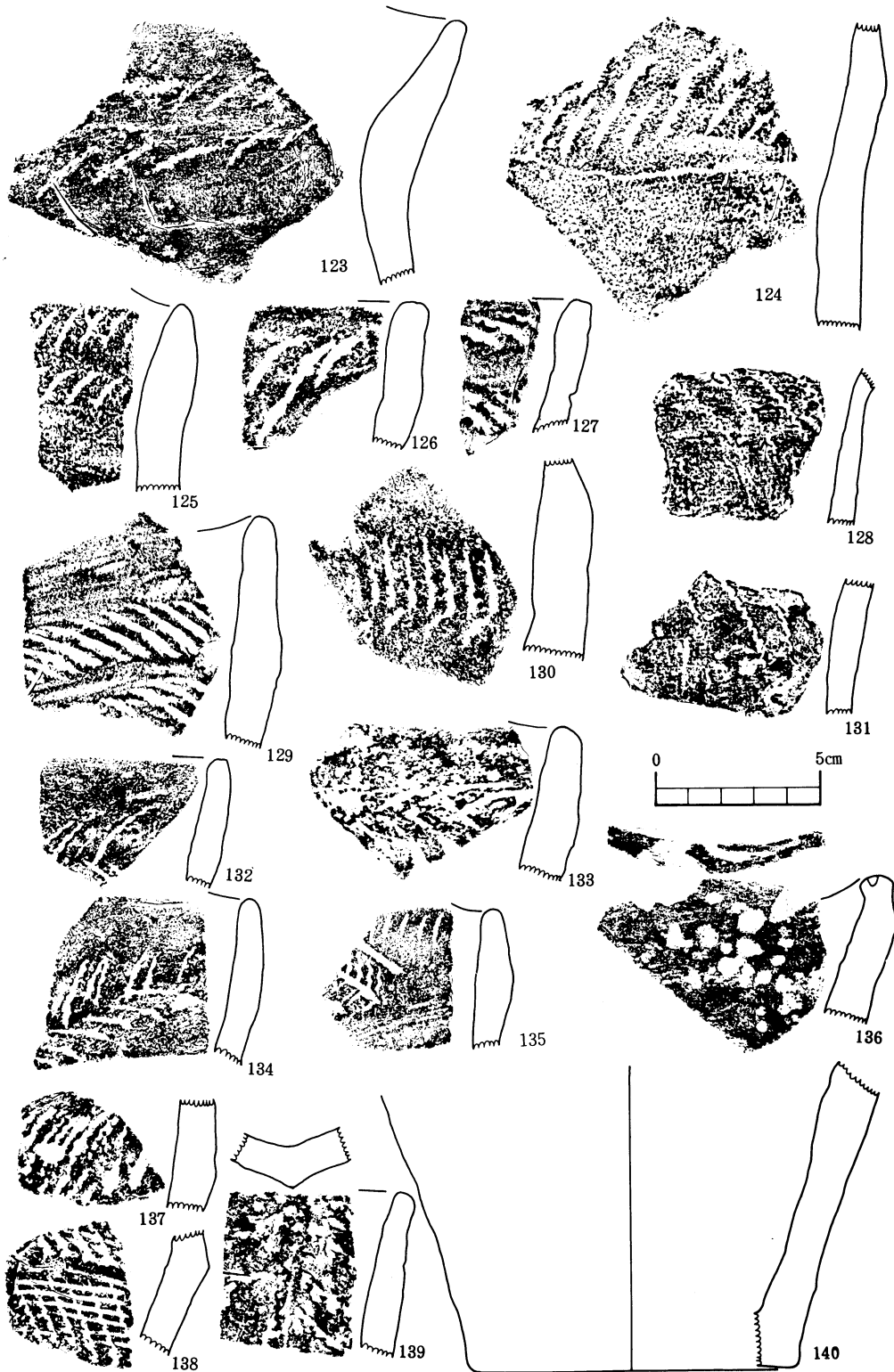
⑦7類 (第18図・第19図)

貝殻腹縁の押圧文を主体とする土器である。頸部がくびれて外反する器形で、波状口縁を呈するものが多い。茶褐色を呈するものが多いが、黄褐色・黒褐色のものもある。石英粒など細砂粒を多く含み剥脱が目立つものもある。文様は、凹線の中に押圧文を付するもの、押圧文のみものなど各種ある。内面、外面とも横方向のなで整形である。

111は若干キャリッパー形の口縁をする。一条の凹線の上に左下がりの押圧文が付される。112~116・120・122は2本の横線の間にななめあるいは横方向の押圧文を付す。115・120は密な押圧文で、120は波状口縁の頂部にあたる。112はさらに一本下部に横線がみられる。117・118は無文である。121は表面の磨滅が激しく右下がりの押圧文が付される。123~126は口縁部から頸部にかけて左下がりの押圧文が2列付される。127は胎土に金雲母を多く含む異質の胎土



第18図 縄文式土器(11) (7類)



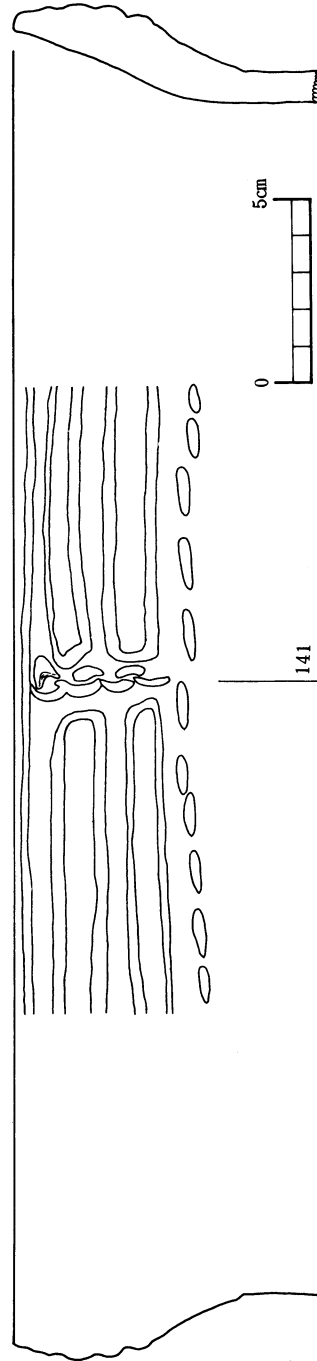
第19図 繩文式土器(12) (7類)

を使い、二列の右下がり押圧文が付される。**128・130・131**は右下がりの押圧文があり、**130**はさらにこの下部に短い押圧文が付される。**129**は若干口縁部が肥大し、右下がりの押圧文が二列付される。**132~134**は左下がりと右下がりの押圧文が付され、綾杉模様を呈している。**135**は口縁部に平行に押圧文がつき、その下に端を押さえる二本の短絡線がななめ方向に引かれる。その下には短い押圧文が付される。**136**は無文土器であるが端部に押圧文が付される。**137**は密に押しである。**138**は整然とした横方向の条痕の上に押圧文がみられる。**139**は角をもつ口縁で、口縁、角の稜線に刺突文、外面にななめ方向の押圧文が付される。底部は平底で、外面、内面ともヘラなどで整形される。

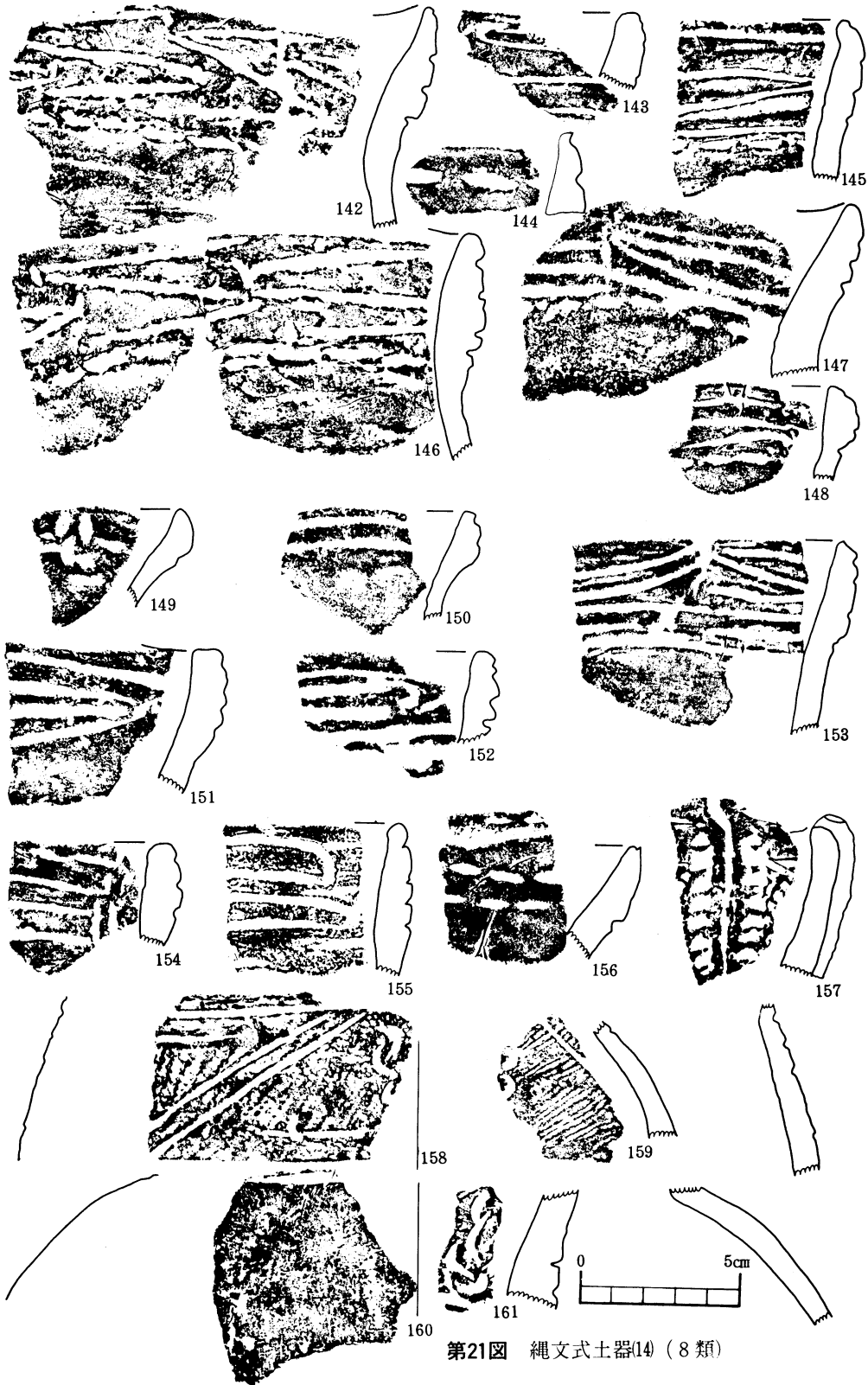
⑧ 8類 (第20図・第21図)

肥大した口縁部に直線の凹線を巡らした土器で、茶褐色・黒褐色を呈し、焼成は良好である。くびれる頸部より肥厚した口縁部にいたり、口縁部は波状を呈する。

口縁部の模様は大きく3種類に分かれる。第1は直線文の下に刺突文を巡らすもの(**141~148**)である。**141**は口縁径36cmを測る大きな土器で波状口縁である。頂部の所には、向かいあうように半載竹管が押され、その両側にはヘラ描きのX字状返り文が2段にみられる。さらに上部には1列のヘラ描き凹線、下部には1列の貝殻頂部による刺突文が施される。**142**は短絡線の組み合わせで三角文をつくる。**145~147**も同様な文様をつくっているが、鋸歯の先端に短いヘラ描き凹線がみられる。**148**は肥厚口縁が幅狭い。第2は直線だけで刺突文のないもの(**150~155**)である。刺突文がないだけで、第1の類と同様な文様をしている。第3は、**149・156**のように刺突文のみで文様をつくる。**149**は小さな肥厚口縁であるが、刺突文を縦横に巡らした文様をつくる。**156**は2列の刺突文を巡らし、口縁端部にも刺突文をつける。**157**は波状口縁の頂部で、コーナーにたて方向の凹線を引き、この凹線は端部でらせん状に曲がる。肩部(**158~161**)は左下がりの縄文を地文とするもの(**158・159**)と無文のもの(**160**)がある。**158**は縄文地の上に横方向と左下がり方向の、2列のヘラ描き沈線が引かれ、間には**161**にみられるような半載竹管文がある。



第20図 縄文式土器 (13) (8類)



第21図 縄文式土器(14) (8類)

⑨9類 (第22図 162~168)

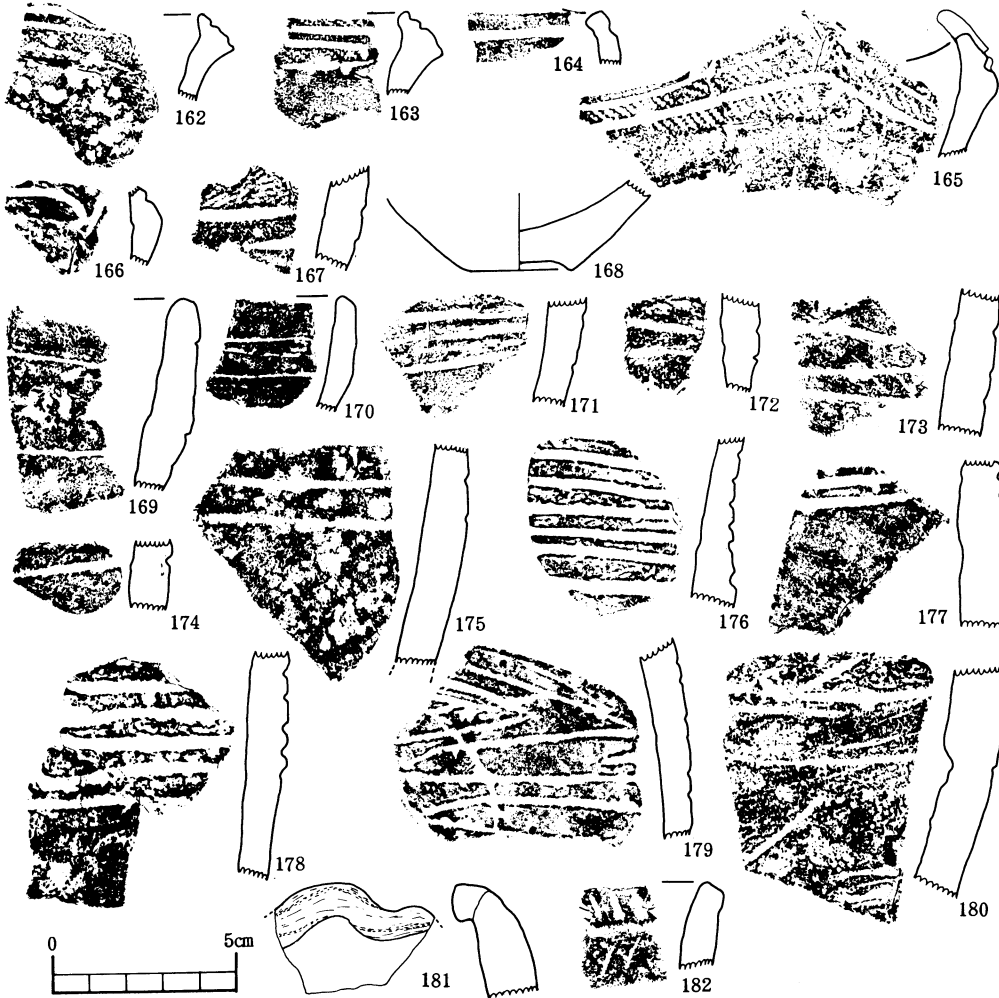
くの字状の口縁をもち、口縁に沈線・磨消縄文のみられる土器である。162は磨滅しており3本の平行沈線がある。163は縄文地に3本の沈線が平行に走り、上と中の沈線に挟まれた縄文はすり消される。中の沈線は右端が下に折れ曲がる。164は沈線が2本ある。165は山形口縁の頂部で縄文地に2本の沈線が引かれ、頂部には半載竹管もある。底部はあげ底である。

⑩10類 (第22図 169~180)

横方向の凹線を主体とする土器である。169・170は波状口縁で、2本の平行沈線の中に169は刺突文を、170は短絡線を施す。171~178は数条の平行な凹線を巡らす。179は凹線を交叉させ山形の文様をつくる。180は平行な2~3本の凹線の上下に左下がりの凹線がある。

⑪11類 (第22図 181)

4 C区2層より出土した。口縁の部分にW字形の貼付文をもつ土器である。茶褐色を呈し、外面・内面ともていねいなで整形で仕あげる。こまかい砂粒を含む胎土を用いている。



第22図 縄文式土器(15) (9類~12類)

⑫12類 (第22図 182)

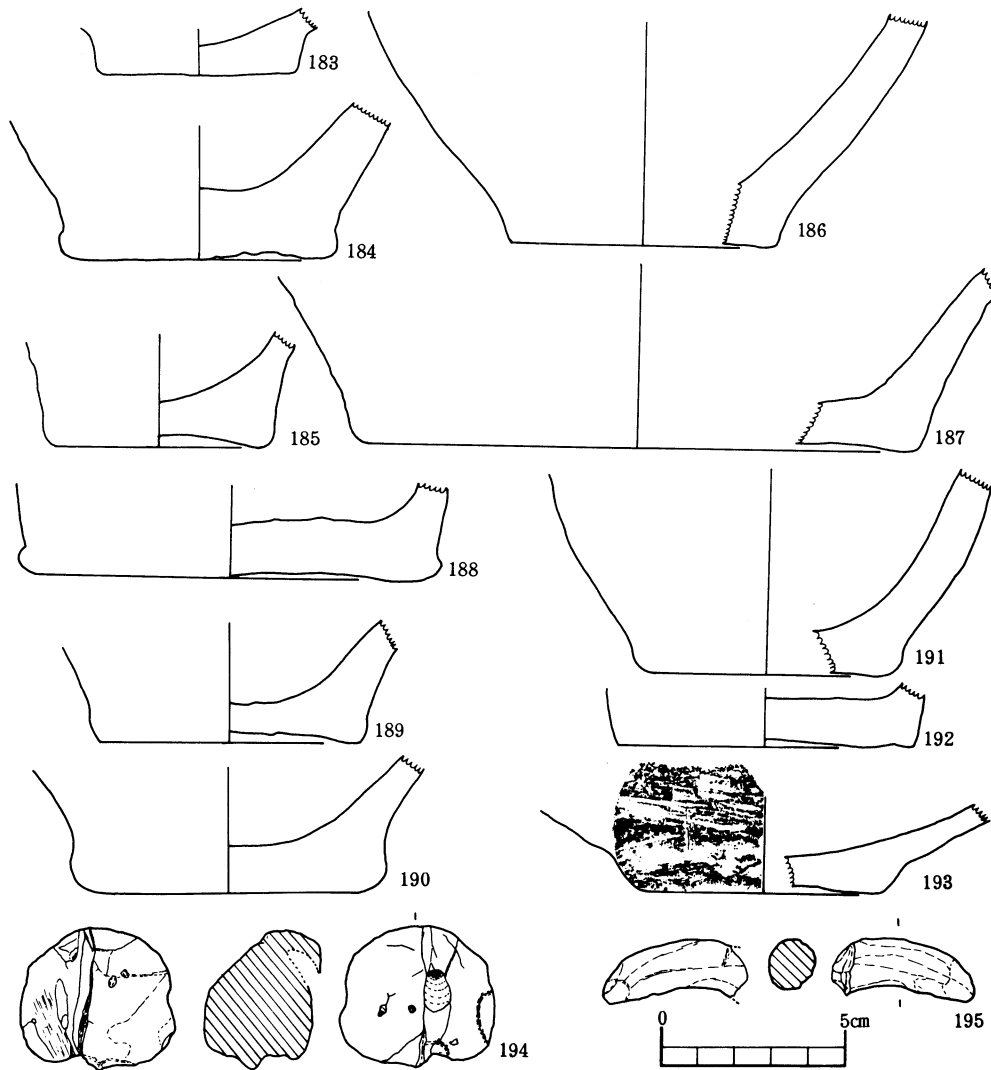
4 B区より出土した、口縁が肥厚し、ここに右下がりの沈線をつける土器である。内面はなで整形・外面はへら描き沈線が左下がり方向に付される。茶褐色を呈し、胎土は砂粒が多い。

⑬底部 (第23図183~193)

後期の底部と思われるのは平底あるいは若干あげ底である。若干外反しながら底部に到るものもある。193 は外に広がる器形をしており、横方向の条痕がみられる。

(2) 土製品 (第23図194・195)

194 は6 C区2層より出土した土塊である。暗茶褐色をし、石英・長石・黒雲母などの石粒が含まれる。ひびわれがみられ、小さい孔が数ヶ所みられる。195 は6 C区2層より出土したもので土偶の腕と思われる。茶褐色を呈し、ていねいななでがされており、焼成は良好である。



第23図 縄文式土器(16) (底部・土製品)

図番	類	出土区	層	色調	備考	図番	類	出土区	層	色調	備考
111	7	4 B	2	黒褐色	剥脱多し	152	8	4 C	2	茶褐色	
112	〃	8 B	2	茶褐色		153	〃	5 C	2	暗茶褐色	
113	〃	7 B	1	茶褐色	剥脱多し	154	〃	6 B	2	茶褐色	
114	〃	6 C	2	茶褐色	表面が磨滅	155	〃	5 C	2	暗茶褐色	
115	〃	4 C	2	茶褐色	スス付着	156	〃	5 B	2	茶褐色	
116	〃	4 B	2	茶褐色		157	〃	5 B	2	黒褐色	
117	〃	4 B	2	暗茶褐色		158	〃	5 C	2	黒褐色	
118	〃	6 C	2	茶褐色	スス付着	159	〃	5 C	2	茶褐色	
119	〃	5 B	2	茶褐色	若干剥脱	160	〃	6 C	2	紫がかった茶褐色	
120	〃	4 B	2	茶褐色	115と同一?	161	〃	5 C	2	黒褐色	
121	〃	6 C	2	茶褐色	磨滅し光沢を呈す	162	9	4 B	2	茶褐色	磨滅が多い
122	〃	4 B	2	黄褐色		163	〃	4 B	2	茶褐色	
123	〃	5 C	2	茶褐色		164	〃	8 B	2	黒褐色	金雲母を含む
124	〃	4 B	2	茶褐色	125・126と同一?	165	〃	4 C	2	灰褐色	
125	〃	4 D	2	茶褐色		166	〃	4 B	2	灰褐色	磨滅
126	〃	4 B	2	茶褐色		167	〃	4 B	2	茶褐色	磨滅が多い
127	〃	8 B	2	茶褐色		168	〃	6 C	2	黄みがかった茶褐色	
128	〃	4 C	2	暗茶褐色	131と同一?	169	10	6 C	2	暗茶褐色	
129	〃	5 C	2	茶褐色		170	〃	6 C	1	茶褐色	
130	〃	8 B	2	茶褐色	若干剥脱	171	〃	5 B	2	暗茶褐色	
131	〃	4 C	2	茶褐色		172	〃	5 C	2	茶褐色	
132	〃	特別区	1	茶褐色	スス付着	173	〃	4 B	2	茶褐色	
133	〃	4 C	2	茶褐色		174	〃	4 B	2	茶褐色	
134	〃	特別区	1	茶褐色	132と同一?	175	〃	10 C	1	外・茶褐色 内・黒色	剥脱多し
135	〃	5 C	2	明茶褐色		176	〃	4 B	2	明茶褐色	177と同一?
136	〃	5 C	2	茶褐色	剥脱多し、スス付着	177	〃	4 B	2	明茶褐色	
137	〃	4 B	2	茶褐色		178	〃	4 B	2	茶褐色	剥脱多し
138	〃	5 B	2	茶褐色	若干剥脱	179	〃	4 C	2	茶褐色	スス付着
139	〃	7 B	1	茶褐色		180	〃	4 C	2	黄褐色	
140	〃	4 C	2	茶褐色	内面にスス付着	183	底部	5 B	2	明茶褐色	
141	8	4 B	2	茶褐色		184	〃	9 B	1	白っぽい茶褐色	底に繊維状正痕、剥脱多し
142	〃	5 B	2	暗茶褐色		185	〃	10 B	2	茶褐色	
143	〃	4 B	2	茶褐色		186	〃	8 B	1	茶褐色 底は黒色	内面に剥脱アリ
144	〃	5 C	2	茶褐色	内面は剥落している	187	〃	8 B	2	茶褐色	剥脱多し
145	〃	5 C	2	暗茶褐色		188	〃	8 C	1	明茶褐色	
146	〃	6 C	2	暗茶褐色		189	〃	8 B	1	茶褐色	剥脱多し
147	〃	4 C	2	茶褐色	剥脱アリ	190	〃	特別区	1	外・茶褐色 内・黒褐色	底に小石などの圧痕
148	〃	6 C	2	茶褐色		191	〃	4 B	2	外・茶褐色 内・黒褐色	底に凹凸アリ
149	〃	5 C	2	明茶褐色		192	〃	4 C	2	茶褐色	
150	〃	4 B	2	茶褐色	磨滅	193	〃	特別区	1	外・茶褐色 内・黒褐色	
151	〃	6 C	2	暗茶褐色							

第4表 7類~10類, 底部の出土地一覧表

(3)石器

①石鏃

39本の石鏃が出土し、石材は、黒曜石20（その内漆黒色7，灰色13）・安山岩11・玄武岩7・粘板岩1となっている。また、凹基式石鏃に属している。

凹基式石鏃は、基部が水平に近いもの（4～14・42）とえぐりが、U字，V字状に深くなるものに分かれている。また、40・41・42のような大きな石鏃も見られる。

I 類 (4～14・37・42)

これらは、剥離調整もかなり荒くなり、剥離の数も少なく、剥片をそのままに残しているものもある。（4・5・13・14）また、中央部がかなり厚く仕上がっており、尖頭器的な使用も考えられる（9・13・42）。

II 類 (15～23・34～36・41)

三角形の本体にえぐりを加えた仕上りを持ち、均整のとれた形をしている。

III 類 (24～31・39)

胴部で一時狭くなり、脚は張り出した形となるもので、剥離も入念になされている。

IV 類 (32・33)

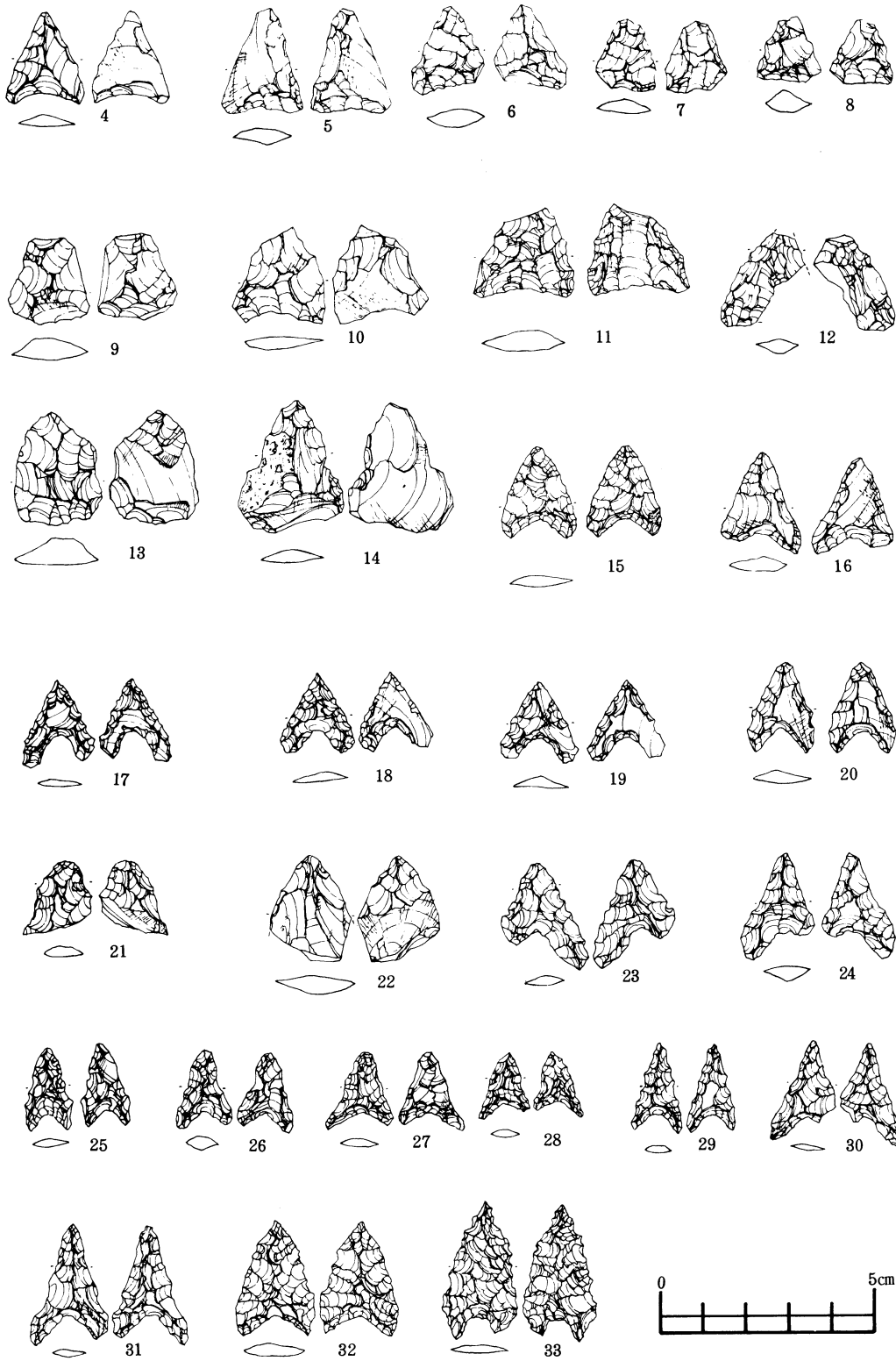
III類とは逆に、胴部が張り出したもので、剥離はよく脚は狭い石鏃となっている。

V 類 (40)

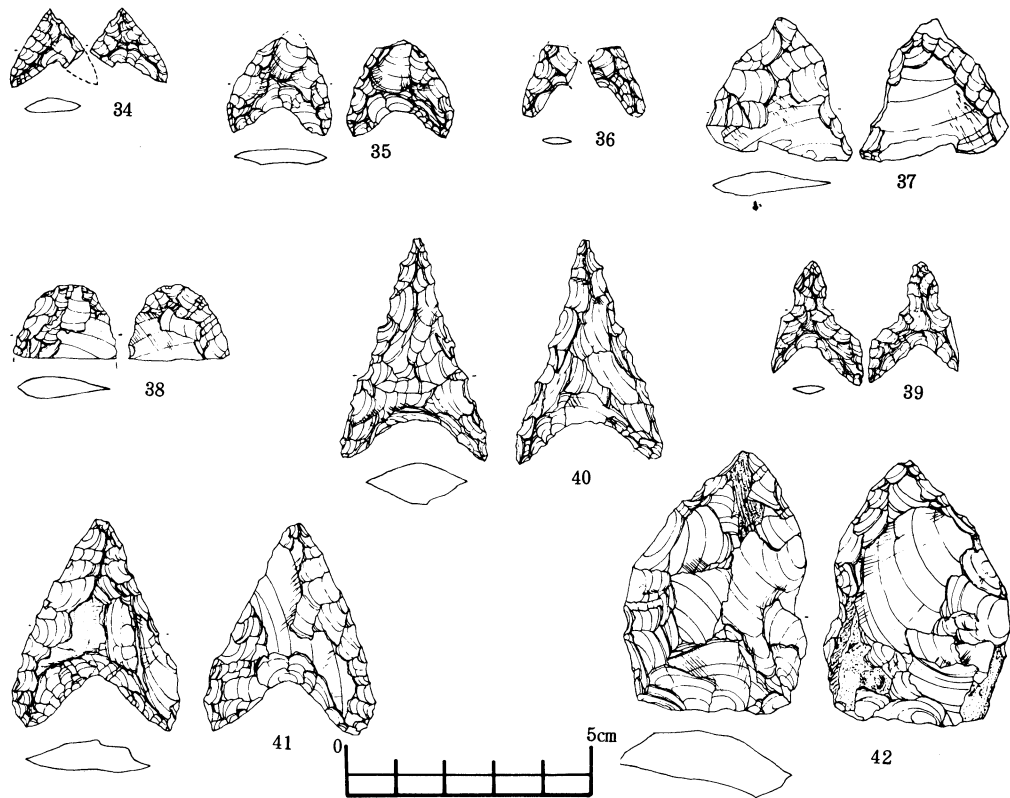
二等辺三角形の石鏃で先端は、するどい。

	分類	石 材		分類	石 材		分類	石 材
4	I	安 山 岩	17	II	黒 曜 石	30	III	玄 武 岩
5	I	玄 武 岩	18	II	玄 武 岩	31	III	玄 武 岩
6	I	黒 曜 石(白)	19	II	玄 武 岩	32	IV	黒 曜 石
7	I	黒 曜 石(白)	20	II	安 山 岩	33	IV	黒 曜 石(白)
8	I	玄 武 岩	21	II	黒 曜 石	34	II	黒 曜 石(白)
9	I	安 山 岩	22	II	安 山 岩	35	II	黒 曜 石(白)
10	I	安 山 岩	23	II	黒 曜 石(白)	36	II	黒 曜 石
11	I	黒 曜 石	24	III	安 山 岩	37	I	玄 武 岩
12	I	黒 曜 石	25	III	黒 曜 石	38	?	黒 曜 石
13	I	黒 曜 石(白)	26	III	黒 曜 石(白)	39	III	安 山 岩
14	I	安 山 岩	27	III	黒 曜 石(白)	40	V	安 山 岩
15	II	黒 曜 石(白)	28	III	黒 曜 石(白)	41	II	粘 板 岩
16	II	安 山 岩	29	III	安 山 岩	42	I	黒 曜 石(白)

第5表 石鏃分類表



第24图 石器(1) (石鐮)



②石匙 第25図 石器(2) (石鏃)

横長と縦長があり、それぞれ3本と1本出土している。

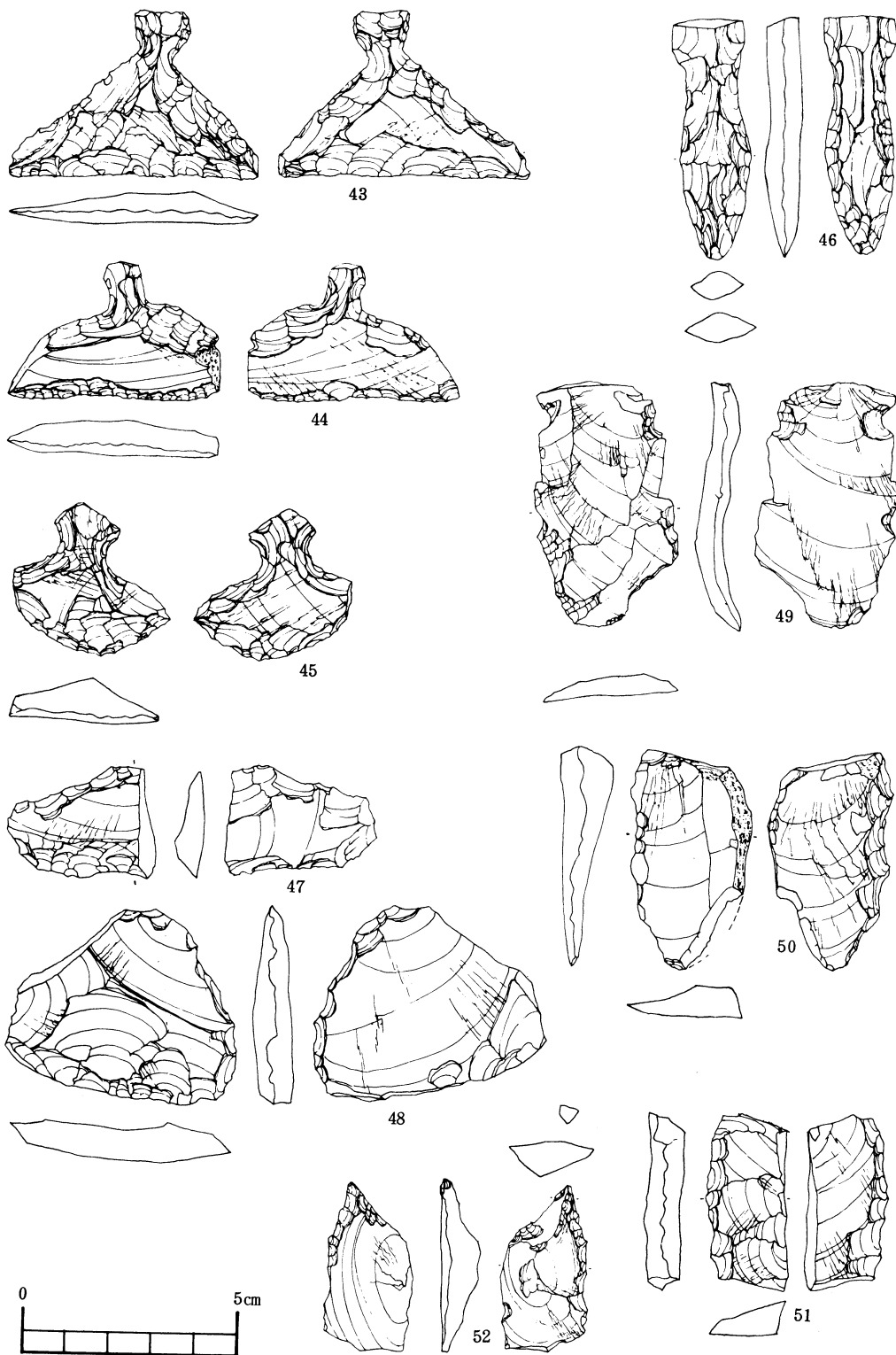
43は、玄武岩を使用し、全面に入念な剥離を加え、刃部は水平に仕上げ、「つまみ」もよくできている。44は、安山岩の横長剥片を素材とし、肩の部分はかなり厚くなっている。また、刃部もやや内湾している。45は、安山岩で全体的に厚く、刃部は丸くなっている。46は、風化の進んだ安山岩で、全体的に中央部にそってふくらんだ形となっている。

③削器状石器 (47~51)

47は、玄武岩製で、石匙の欠けたものとも考えられるが、削器とした。48は、安山岩の横長剥片に調整を加えたもので、刃部は、数回の剥離で終えてあり断面は厚いままになっている。49は、チャート製で、頭部に「かえり」に近い凹が見られる。また、縦長剥片をそのまま使用しているために湾曲した形となっており、石匙ないしは、ヘラ状の使用が考えられる。50は、玄武岩の縦長剥片の左右に調整剥離を加えたもので、一部に石材の自然面を残している。51は玄武岩の素材の片側に刃部を設けた石器で、刃部は交互錯行のため、ギザギザしている。

④石錐 (52)

チャート質の石材を横長剥片として取り出し、刃部全体に入念な剥離を施している。



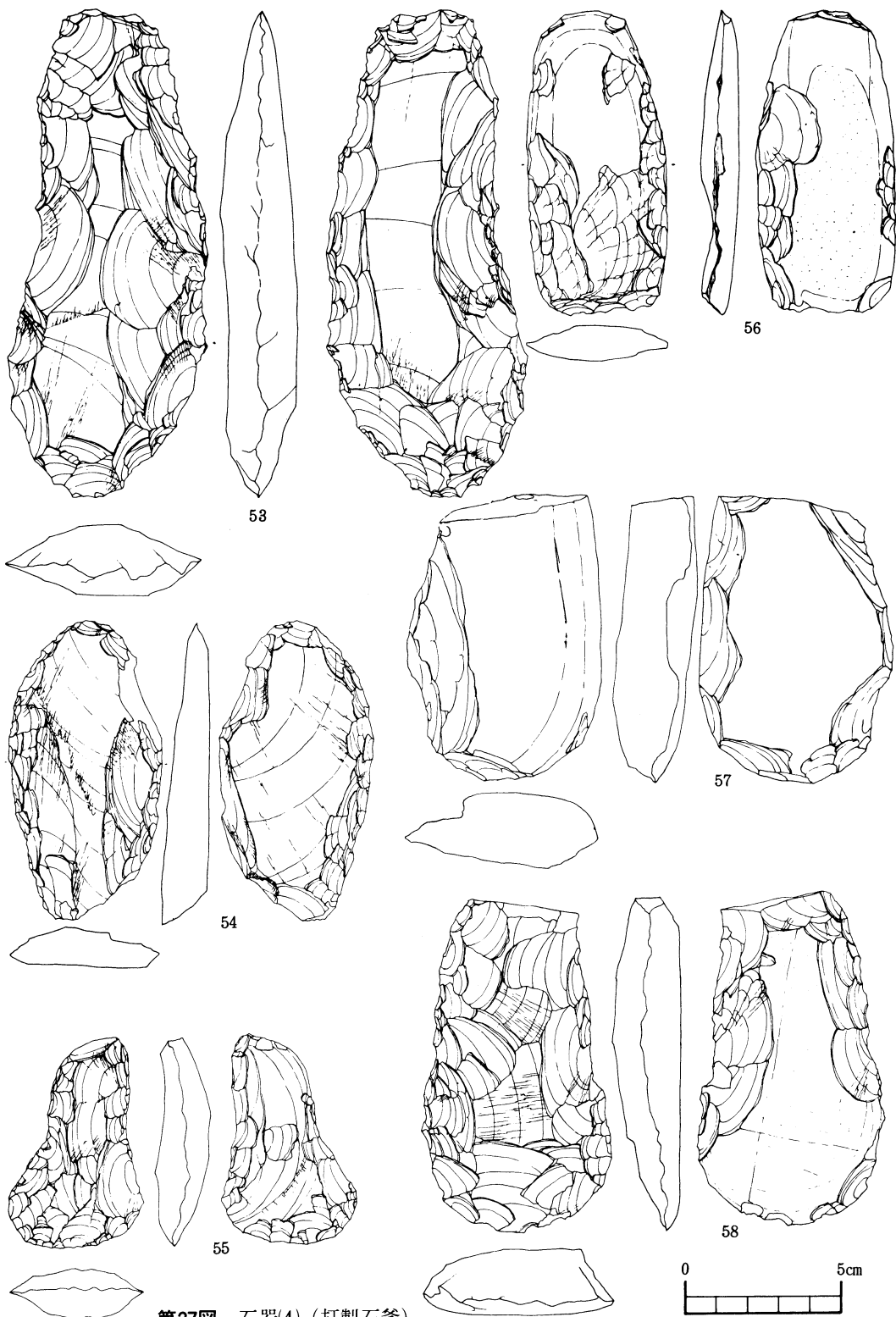
第26圖 石器(3) (石匙・削器・石錐)

⑤石斧 (53~65)

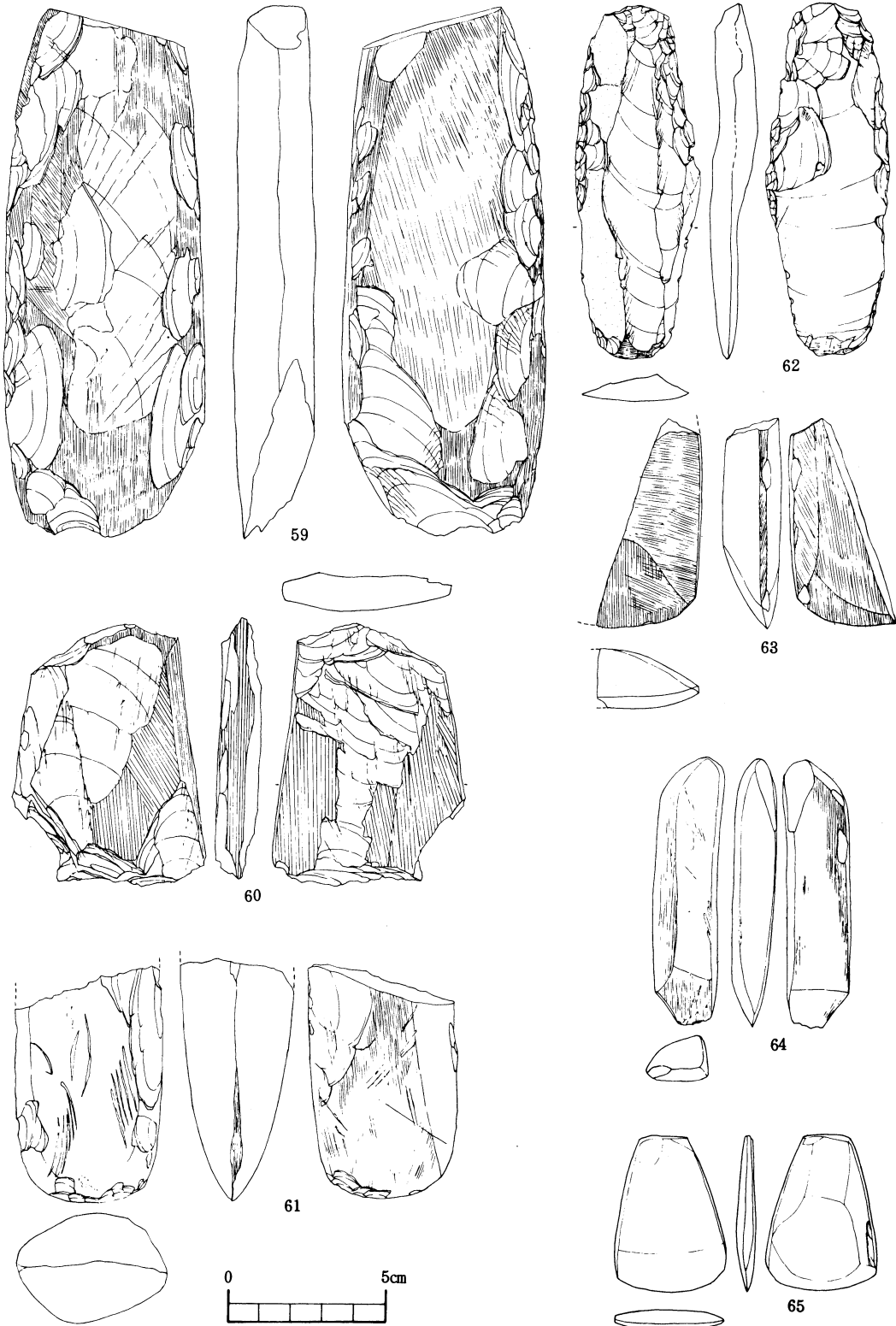
53は、安山岩製の石斧で、両面の扁平な石材を選び、全周に交互に非常に荒い剥離を加え、鋭い使用部分を造りあげている。中央部付近でやや湾曲しており、15.6cmの長軸をもっている。

54は、玄武岩製の縦長剥片を使用したもので、頭部を初期の段階で剥脱している。周囲の剥離も細かく、削器的な使用も考えられる。55は、小形の分銅形石斧で、横長に打ち欠いだ、湾曲した剥片に、調整を加えている。玄武岩製。56は、ホルンフェイス製で、一部に磨きをかけている。刃部は、一時欠落したらしく、再度、三回の荒い調整を加えて刃部を再生している。

58は、安山岩の自然面を利用して造りあげている。59は、頭部と刃部の一部を欠いているが16.7cmと最も大きい石斧で、粘板岩の磨製石斧である。61は、泥岩質の石材を用いた磨製の石斧で、はまぐり刃状の身の最も厚いものである。62は、西之蘭遺跡出土の石器の中で、最も特異なもので石斧の概念にあてはまるか疑問である。表面に自然面を残す石材より縦長剥片を剥ぎ取り剥片の上半部に刃潰し加工を行なっている。刃部と考えられる先端部は、表面・裏面ともに磨かれたように磨耗している。なお、縦長剥片の剥出の形態から見ると、かなり安定した石器技法を保持していたのではないかと考えられる。この石器の使用目的については、石ベラ状の石器としても考えることができる。64は、泥岩質の石材を用いた石ノミ状の石斧で、刃部はかなり鋭利になっている。65は、小形の扁平石斧で、粘板岩質の石材の全面に入念な磨きをかけている。



第27図 石器(4) (打製石斧)



第28图 石器(5) (磨製石斧)

⑥剥片

遺跡の特長の一に、安山岩を素材とする石器がかなりの数存在していたことがあげられる。さらに、これらの石器（製品）の前段階とでも言うべき、石核・剥片・剥片石器が200点近く出土している。

縦長剥片の利用（66～72）

縦長剥片を利用したもので、66・68は、両面に刃部を設け、削器的な用途が考えられる。71・72は、剥片の先端部に刃部を設けている。

69は、片面と先端部に弯曲した刃部を造り調整も細い。

横長剥片の利用（73～78）

剥片技法では、この横長剥片の方が多く、74・76等はそのモデルとなっている。使用された剥片では削器的用途が強く、78でそれを見ることができる。

石斧状石器（79～86）

79・80・84・85・86は、厚手の剥片に荒い剥離を加え刃部を造り出し、石斧状の石器に仕上げている。84は、全周にリタッチを施し、円盤状の石器となっている。85もそれに近い。81～83は、削器的様相をもっている。

剥片（87～95・104・105）

87・88・104・105は縦長剥片で、89～95は横長剥片である。これらの剥片の観察では、安定した一定の技術をもっていたことがうかがえる。

大型剥片（96～98）

剥片の一部に自然面を残す大形剥片で、97は一部使用している。

石核（99～103）

99・100は、黒曜石の石核で、100は、平坦に近いプラットホームをもち、a面では縦長剥片、b面では縦長・横長剥片を取り出している。101は、安山岩でプラットホームは平坦になっている。102・103は小形の石核で、打面調整は特に見られない。

⑦高枝石（107～110）

107は、安山岩製で、全周を帯状に使用している。110は、砂岩製の棒状の石器で、先端部に使用痕が見られる。

⑧くぼみ石（111～115）

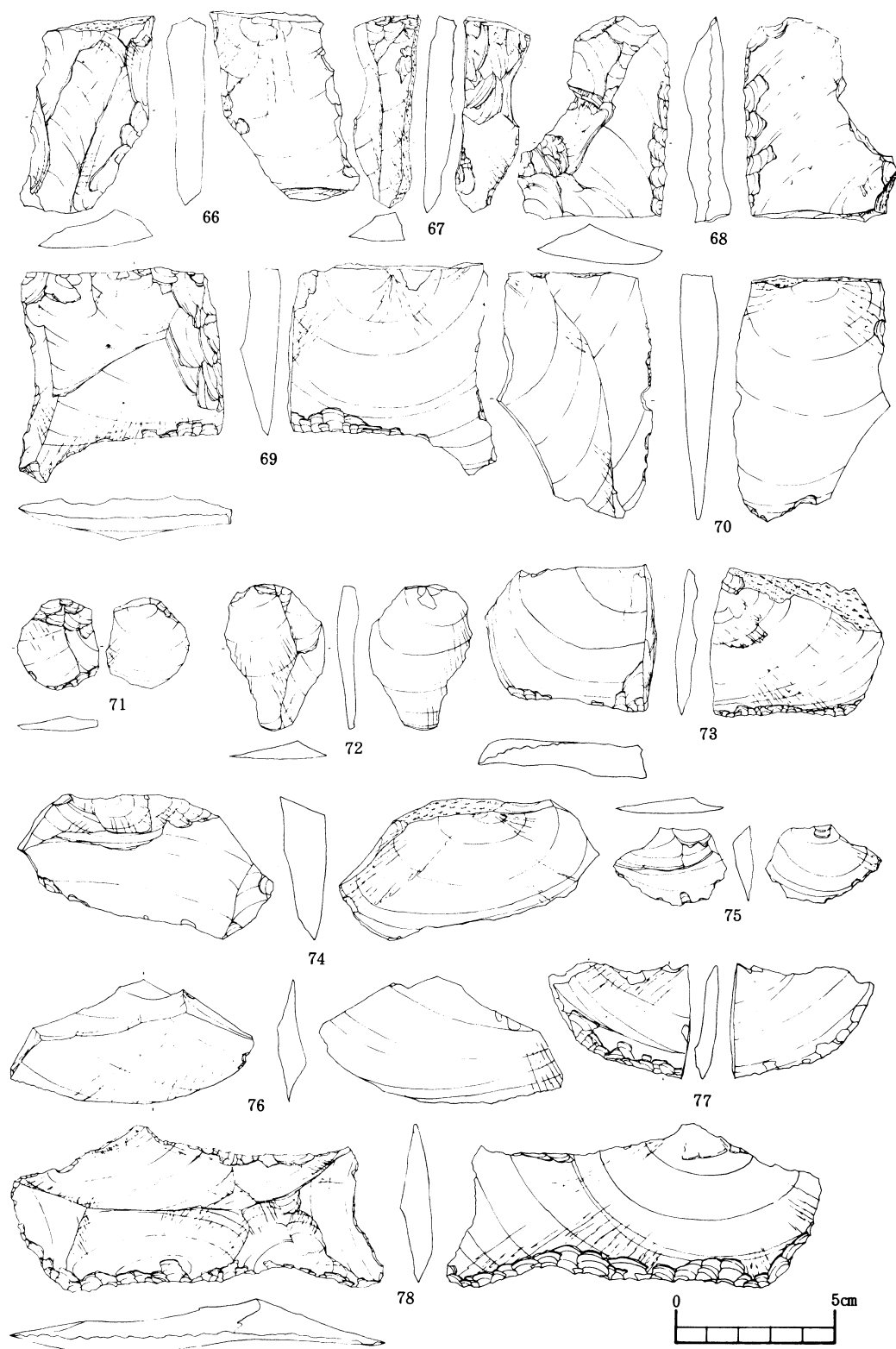
111は、周囲の4ヶ所に敲石としての使用がみられ、さらに表・裏の中央部に凹石としての使用がみられる。

⑨砥石（116）

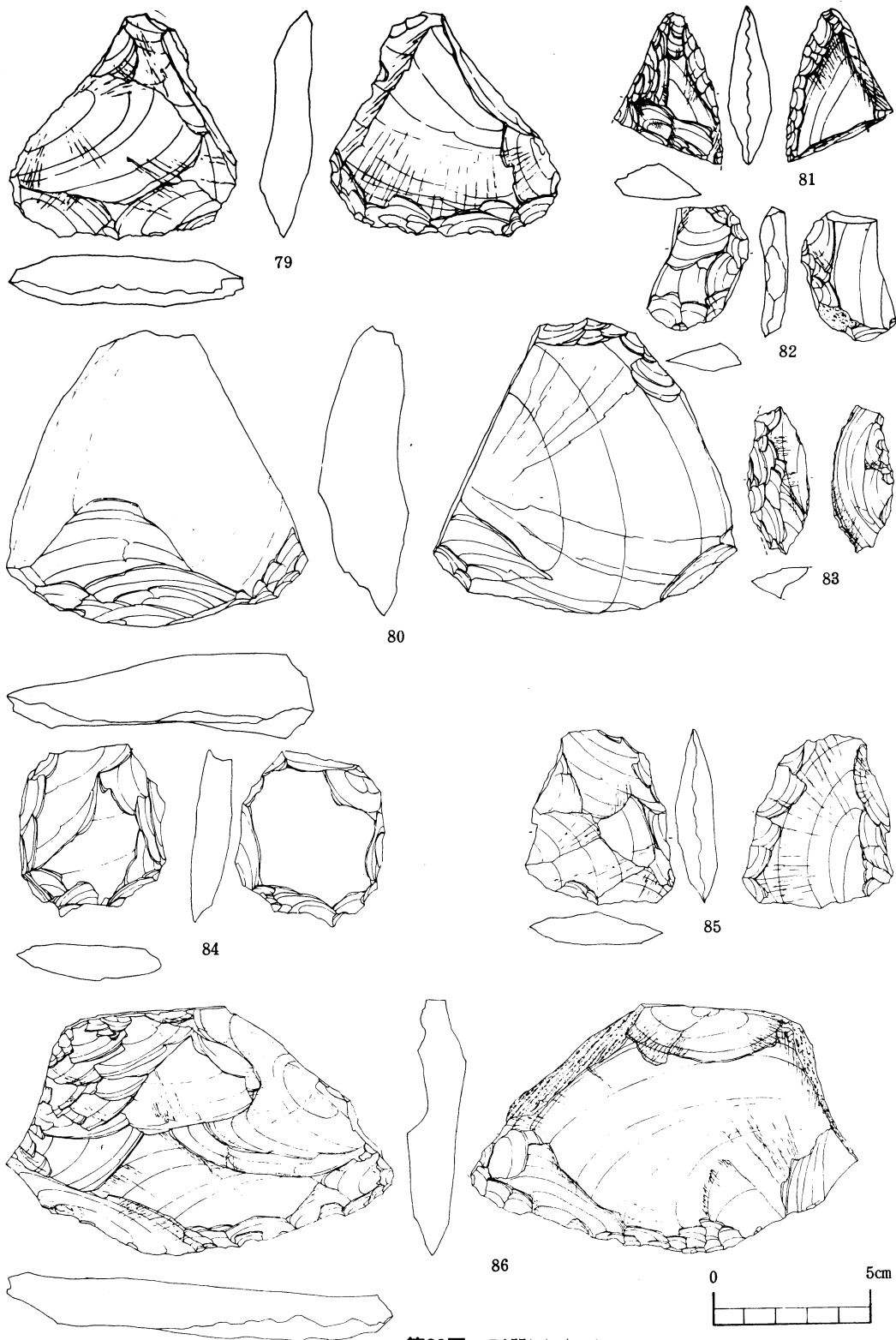
116は、唯一の砥石で一部は欠いているがサツ痕が見られる。

⑨石製品（第33図 106）

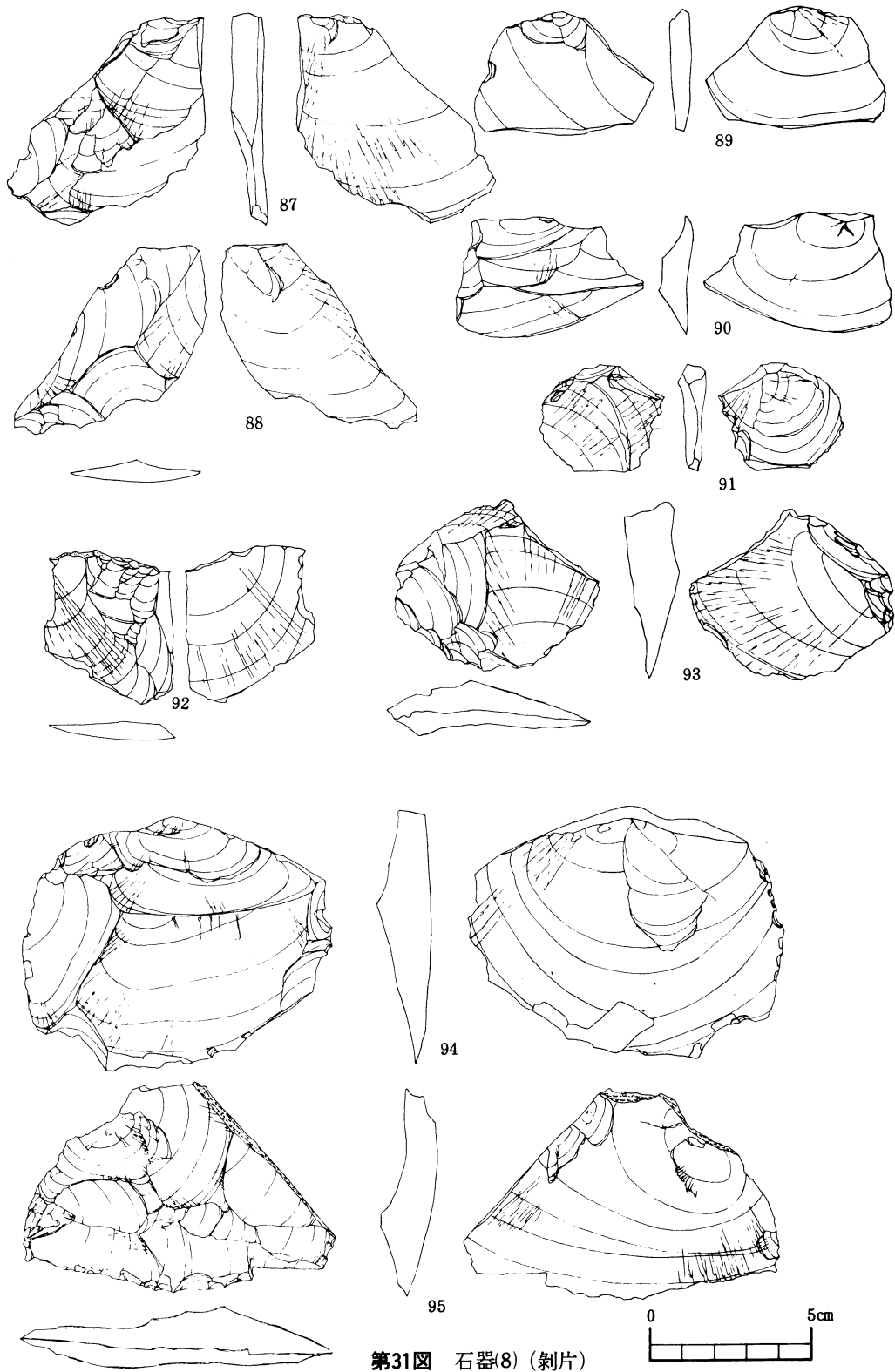
C-8区、3層より出土し、長径1cm、厚さ1cmの軟玉製の半欠製である。欠落後、再利用したもので、両面より穿孔している。樋口氏の分類のC類に属するものである。



第29圖 石器(6) (剝片石器)



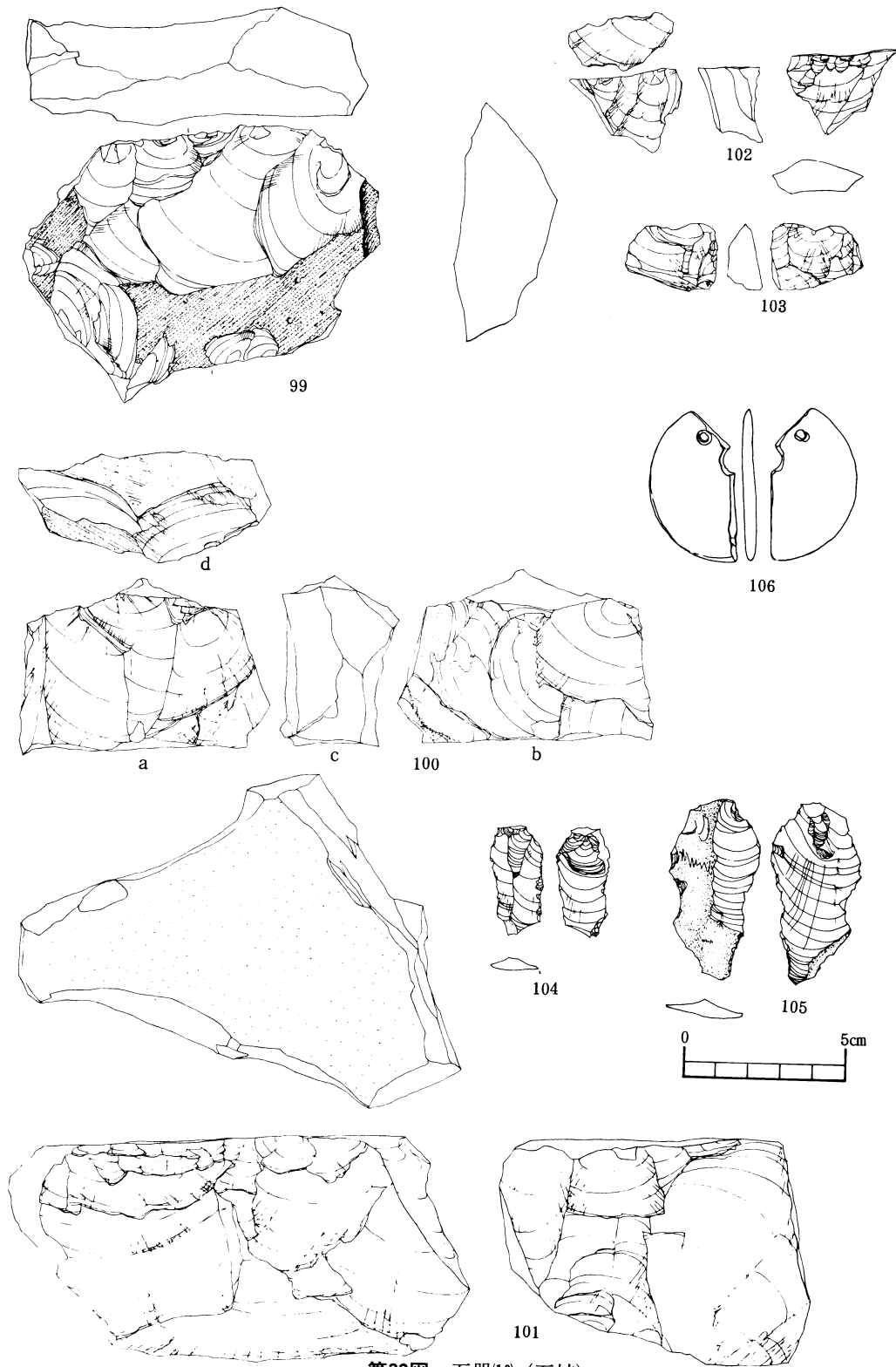
第30图 石器(7) (石斧状石器)



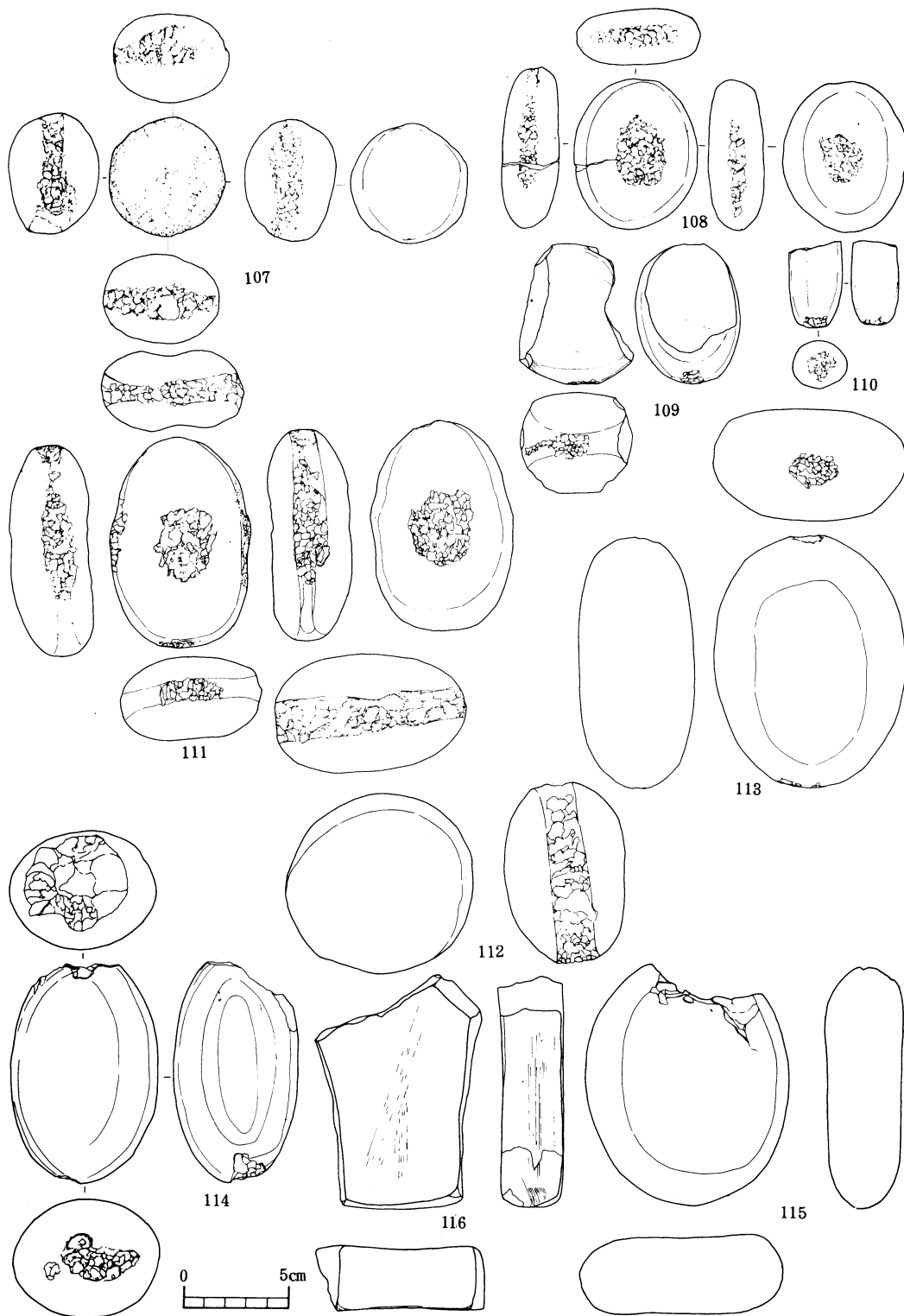
第31图 石器(8) (剥片)



第32図 石器(9) (大形剝片)



第33图 石器(10) (石核)



第34図 石器(11) (敲石・くぼみ石・砥石)

第3節 弥生時代・古墳時代

1 弥生時代の遺物 (第35図 203)

10C区1層より甕形土器の口縁部が1点出土している。逆L字形の口縁で、鋭角に折れ曲がる。端部は若干くぼんでいる。茶褐色を呈し、表面はやや磨滅している。

2. 土坑 (第35図)

4B区にある。2.1m×1mの長だ円形の平面をし、深さ15cmと浅い。埋土は淡黒褐色で、中には甕形土器などの破片が含まれる。

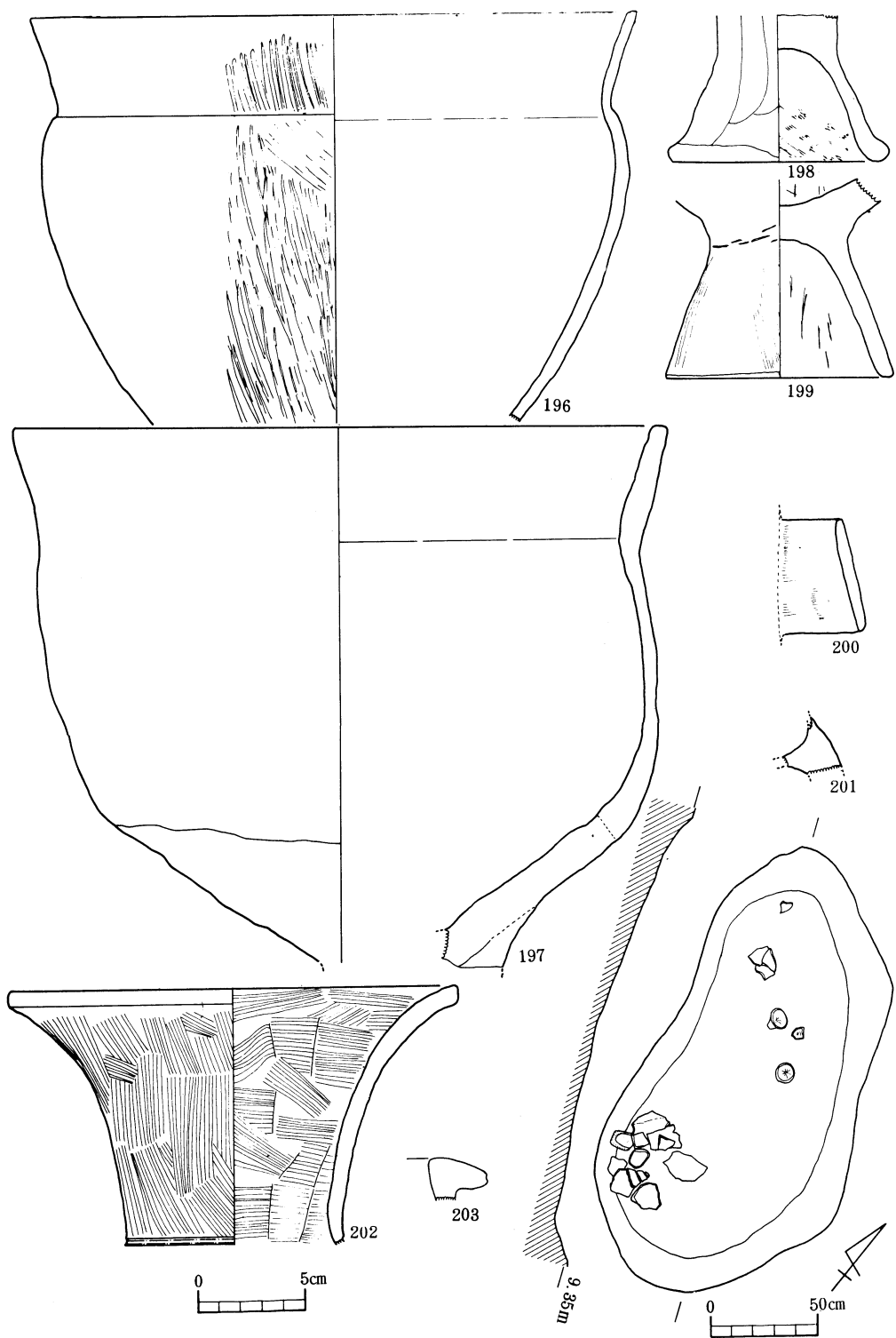
甕形土器(196~199)は、くの字状の口縁をし、脚台がつく。196は口縁部に最大径があり、頸部はくびれて段をもつ。外面・内面ともヘラなでにより、焼成良好で堅い。197はいびつにゆがんだ土器で、輪づみの部分ではくぼみがみられる。外面にはススがつき外面・内面ともヘラなでの整形である。脚台は高く198は端部が丸く外に曲がる。壺形土器(202)の口縁部は、ゆるやかに外反し、端部に平坦面をもつ。頸部には凹線がみられる。外面はたて方向、内面は横方向のハケなで仕上げ、軟質である。200は把手と思われる破片で両端とも平坦面をもっておわる。ハケによるていねいな横なで整形で仕上げ、一側面に剝脱痕がみられる。

201は茶褐色を呈する焼成の良い土器で棒状の脚と思われる。

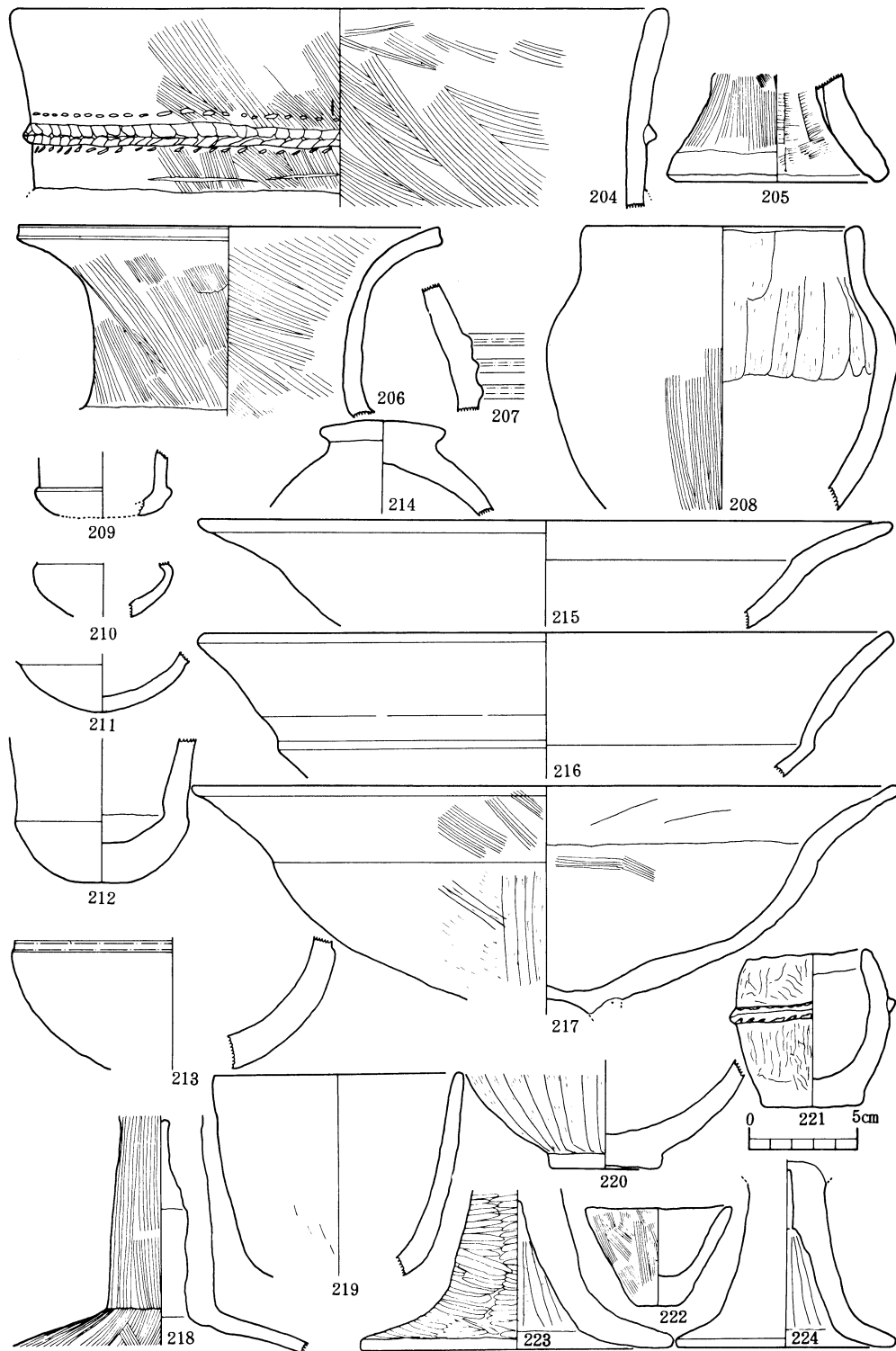
3. 古墳時代の土器 (第36図)

表土より多量の土器破片が出土している。

甕形土器(204・205)はやや外反する直立口縁で、脚台は低い。外面・内面ともあらいハケなで仕上げ、貼り付け突帯には上下よりヘラ押が施される。壺形土器(206~208)は、口縁部が外反し、端部はややくぼみがみられる。肩部との境には段を有する。外面・内面ともハケなで仕上げる。肩部には3条の低い突帯がつく。208は小形の直口壺で、外面はたて方向のハケなで、内面はヘラなで仕上げる。埴形土器(209~213)は小形のものと同大形のものがあり、丸底あるいは小さい平底をしている。底部に比べて、口縁部のほうが長い。214は、平たいつまみのある蓋形土器で、ていねいなで整形である。高埴形土器(215~218・223・224)は、埴部の底部と口縁部が段をもってわかれ、口縁部はつよく外反する。ヘラなで仕上げる。脚部は筒をもつものと、筒をもたずゆるやかに端部に至るものがある。218は外面をハケなで仕上げ、筒部と裾部は強く屈曲している。223の外面もハケでていねいになる。224の内部は細い孔が筒上部に向かっている。鉢形土器(219・220)は直立するコップ形をしたものと底部が肥厚してつくられるものがある。221は指押しのついた貼付三角突帯のついた小形の鉢形土器で、口縁端部は凹凸が目立つ。突帯は1本のひもをつよく押しつけている。外面はひびわれがみられる。222は直立する小形鉢形土器で、外面はハケなで整形される。手づくね土器である。



第35図 土塚と出土遺物

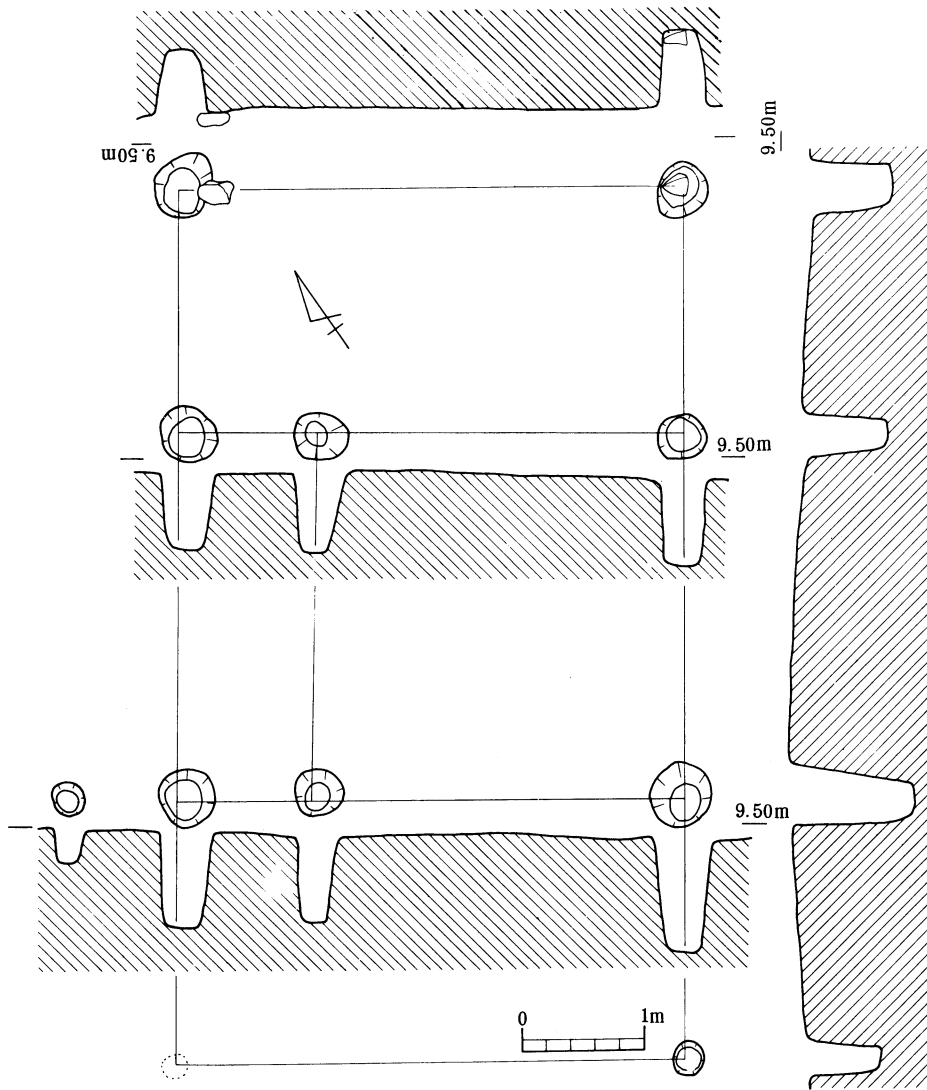


第36図 古墳時代の出土遺物

第4節 中世

1. 建物 (第37図)

6 A区から9 C区の周辺にかけ直径20cm~40cmの円形ピットが多数検出された。これらは建物としてまとまらず散在しているが、ほぼ1列に並んでいる。深い穴も多く、東のほうに向かって下降している。5 B区・5 C区・6 B区には1間×3間の建物遺構が検出された。南西隅の柱穴を検出しえなかったが、東西方向 4.2m、南北方向 7.2m (2.1m+3m+2.1m) を測る建物である。中央の柱穴列では、西寄り 1.1m の所に柱穴がある。北東隅の柱穴には最下部に礎石と思われる扁平な礫がある。これらの柱穴は直径約40cm、深さ70cmを測る。



第37図 建物

2. 遺物

(1) 土器

① 磁器

225 は碗で貫入が多く淡い青色を呈している。

226 は口縁部が「く」の字状に外反する碗で釉のかゝりは薄い。

228 は口縁部の直径が12.5cm程の小皿である。この皿は胴部で内湾し口縁部近くで外へ開く口縁をもっている。釉薬は光沢のないザラザラした感じの淡い青色である。二次的な火に遇い釉薬の溶解が認められる。

230 は口縁部が14.5cmの碗でヘラ切りされた雷文が施されている。胎土はよく釉薬のかかりも充分なされており、淡い緑色の光沢をもっている。また内面には茶渋状の汚れが残り充分使用したことがうかがわれる。

231 は光沢のよい淡い緑色で、これも228 同様二次的に火を受けたものらしい。器面には退化した連弁文がわずかに見られる。

232 は灰白色の碗でいわゆる青白磁に相当すると思われる。器面は内外面ともに気泡が見られる。

233 は白磁碗で玉ぶち状の口縁をもっている。釉薬は上部に多くかかり厚くなっている。

234・235は小皿であり、235 はギラギラした光沢のある器面をもつ黄灰色で貫入も多くなっている。

237 は暗緑色の碗の底部で釉薬は畳付部と底裏面部にもみられる。

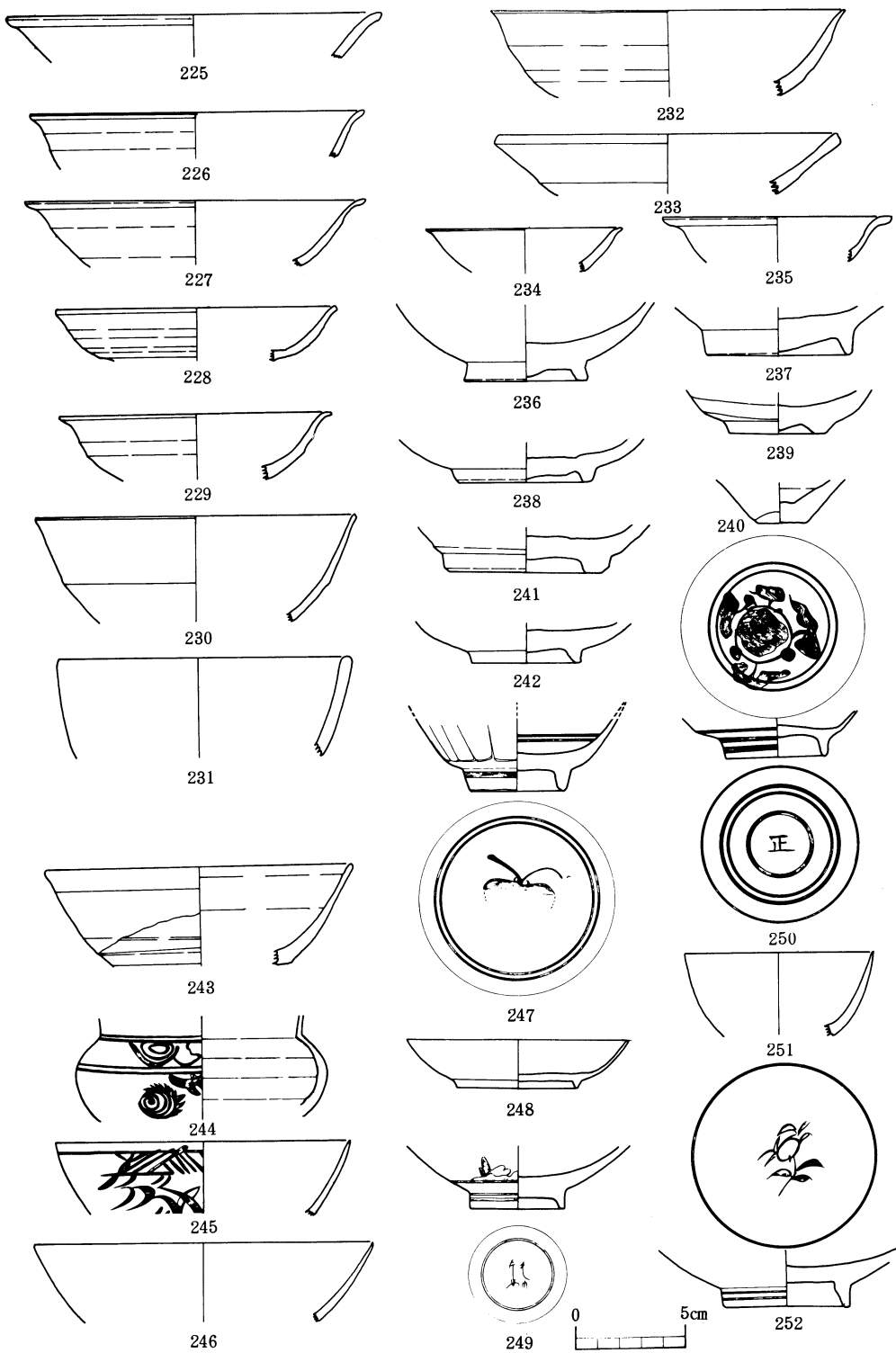
238 は皿の底部で、淡い緑色の釉薬が畳付部および底裏面部にもみられる。内面底部には施されていない。また畳付部分はやや丸みをもつように仕上げられている。

241 は薄い青色の光沢のある美しい仕上がりとなっている。碗の底部で外面底部の一部をのぞいて他の全面に釉薬が施されている。さらに内底に「號」＝「号」という字がえがかれている。

243 は「白薩摩」の碗で、クリーム色の地に多く貫入がみられる。

245・246・248・249・251・252は伊万里系の染付「青花」と思われ、245 は暗緑色の青花で草葉をえがいている。249 はうすい青色の青花でえがき底部内面に施字している。

247・250は明代の景德鎮の青花であり、特に250 は畳付部以外の全面に釉薬を施し、内底部内面には「正」の字をかいている。



第38図 中世の遺物1) (磁器)

②土師器（第39図 253～255）

甕形土器（253）は、口径25.0cmを測り、口縁部が強く外曲し、頸部に接合面が残る。乳白色を呈するが、外面には煤が付着し黒色化している。外面・内面ともヘラで横方向になでられる。埴形土器（254・255）は良質の胎土を使用し、丸みのあるヘラ切の平底である。乳灰色を呈す。

③須恵器（第39図 256～260・263）

坏形土器（256・258・259・263）は、高台の付くものと付かないものがある。256は口縁径19cmと大形である。263は瓦質に近く焼けている。257は小壺の口縁部と思われる。甕形土器260は口縁径19.5cmを測り、口縁が強く外曲する。内面はなで整形であるが、外面には格子の叩き目がみられる。

④瓦質土器（第39図261・262・264・265）

鉢・摺鉢・甕が出土している。鉢（261・264）は直立する口縁部で、なで整形で仕上げる。暗灰色を呈す。摺鉢（262）は、直立する口縁で端部に平坦面をもつ。下から上への櫛目がみられる。甕（265）は、砂粒を多く含む胎土を使う。口縁端部が肥厚し、口縁径34cmを測る。菊花の押型がみられ、胴部に突帯がある。

⑤陶器（第39図 272～277）

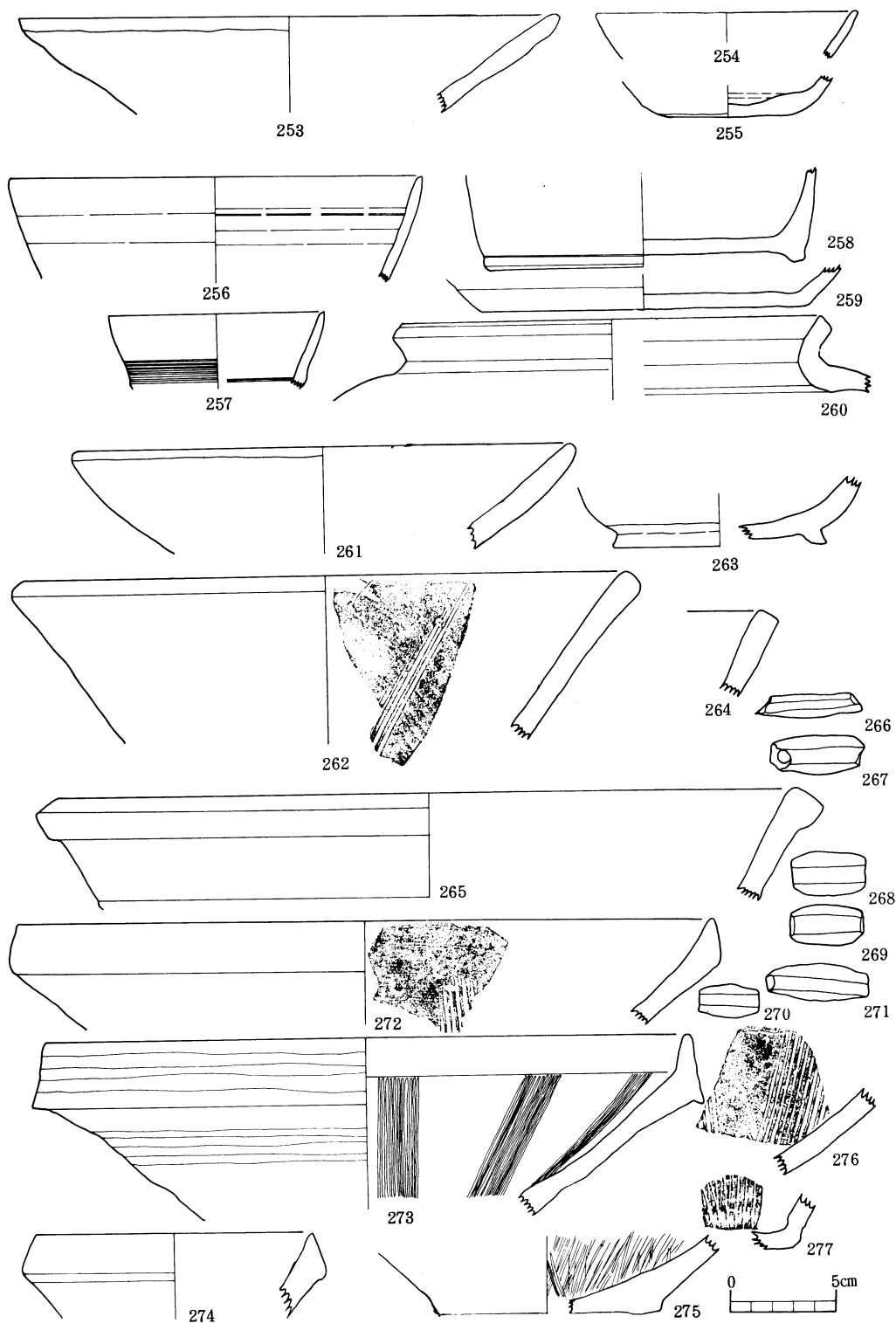
摺鉢（272・273・275～277）と壺（274）がある。272は赤っぽい茶褐色を呈し粗砂粒を多く含む。くの字の口縁をし、外の稜は丸みをもっている。内面は段をもたず、なで整形の上から下から上へ大きな櫛目がみられる。273の口縁は上下に大きく拡張され、外面・内面ともなで整形によるが、外面には凹凸がみられる。内面には11条の細かい櫛目がみられる。部分的に赤みがかつた茶褐色を呈しているが多く灰褐色を呈している。272と同じく口縁部外面には胡麻がみられる。274は細口壺の口縁と思われるが、摺鉢の受け口あるいは片口小壺の可能性もある。赤みがかつた茶褐色を呈し、胡麻がみられる。粗砂粒を多く含む、275・277は内面の櫛目がたて方向・斜め方向に密にされる。底部には糸引きがみられる。275は赤っぽい茶褐色を呈するが、277には緑色の釉が付着している。276は9条の広い櫛目がみられる。赤っぽい茶褐色を呈し、粗砂粒を多く含んでいる。

(2)土製品（第39図266～271）

土製品として管状の土錘6点が出土している。すべて土師質に焼け、266が4 B区・267・269・271が2 C区、270が9 B区の1層より出土している。

図番	色調	長さ	最大幅	孔径	重さ	備考	図番	色調	長さ	最大幅	孔径	重さ	備考
266	赤紫色	4.9 ^{cm}	1.0 ^{cm}	0.4 ^{cm}	4 ^g		269	紫褐色	3.9 ^{cm}	2.2 ^{cm}	0.8 ^{cm}	10 ^g	半欠
267	灰褐色	4.4	1.9	0.7	12		270	淡茶褐色	2.8	1.5	0.5	6	
268	淡茶褐色	3.5	2.1	0.7	15		271	淡茶褐色	4.8	1.8	0.6	12	

第6表 土錘計測表



第39図 中世の遺物(2) (土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・土錘)

第5節 近世

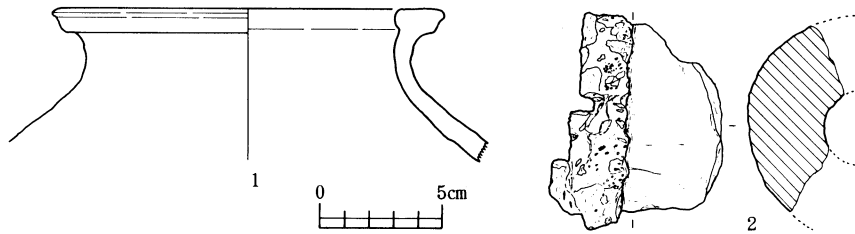
当遺跡発見の契機となった墓はすでに近くの消防格納庫隣接地に移転されており、その痕跡をとどめていなかった。しかし、墓碑のひとつには『享保』という字がみられ、江戸時代の墓と想定されている。

この墓碑の周辺にあたる9 A区・9 B区には6基の墓塚（折り込み図）がみられる。これらは長軸を南北方向にもっており、ほぼ同一方向を示している。2号墓と6号墓が接しているほかには切り合いの関係がない。平面形は、長方形あるいは長だ円形を呈し、6号墓が0.8m×0.5mと小規模のほかは1.3m～1.6m×0.6m～0.9mを測る。深さは約1.2mと割合に深い。

すべての墓塚に頭蓋骨・下肢骨など人骨が残存していた。特に1号墓塚の人骨は保存状況が良い。人骨は側臥膝屈曲葬で、上肢も屈曲している。歯は虫歯が6本みられる。他の人骨も膝屈曲葬である。1号墓塚には人骨の周囲に角釘の出土がみられ、それが長方形に延びることを考えれば木棺使用の可能性が強い。1号墓塚には薩摩焼の破片が出土した。

1は壺の口縁部で口縁径16cmを測る。口縁端部は内外に厚く張り出す。赤紫色をしているが内面・外面とも胡麻のまざった黒っぽい飴色の釉がかかっている。

2はふいご口である。外径9.2cm、孔径3.1cmを測り、先端には鉄が溶け付着している。灰褐色を呈し、孔は丸くうがたれている。ふいご口は9 B区1層より出土しているが、この周辺からは6点の鉄滓も出土している。



第40図 近世の遺物

第4章 まとめにかえて

西之蘭遺跡は縄文時代前期から今日にいたるまで、海に面した地として種々の痕跡を残している。以下時代ごとに、簡単に概略を述べ、若干の問題点を提起しておきたい。

縄文時代

①集石遺構

8 A区に検出された1号集石遺構は、年代を確実におさえられるという点で注目される。近年各地で検出されているこの種の遺構はオセアニア・ミクロネシアなど南洋にみられる石焼料理用の地炉と似ていることより、石焼炉の用途が考えられている。

この遺構は日本だけでなくミクロネシア周辺の古代遺跡にもみられ、例えばトール島のチュキエヌ貝塚では3個の炉が検出されている。これら3個の炉の共通点は①石が火で焼けており、もろくなっていること②木炭がかたままって検出されたこと③食ベカスと思われるものはほとんど認められなかったことをあげている。

九州でも福岡県原遺跡・同深原遺跡¹⁾・熊本県沈目遺跡・同久保遺跡・同古保山C遺跡、鹿児島県花ノ木遺跡・同加栗山遺跡・同山神遺跡・同桑ノ丸遺跡・同片野洞穴・同北手牧遺跡などで検出されており今後類似の資料は増加するものと思われる。

深原遺跡では32基という多くの石組炉が検出され、これらは縄文早期、押型文期の所産とされる。掘り込みがないもの・浅いすり鉢状のもの・周囲の石が直に立ち径が50cm内外のもの²⁾の3形態がみられ、炉内に焼土・炭化物類は認められないが、炉石も表面のみが赤くなり熱を受けた状態を示している。深原遺跡の調査者は石蒸炉を考えている。

原遺跡では5基の石組炉が検出されており径40cm内外のもの³⁾と、径80cm前後のもの⁴⁾とがある。石は大部分が火を受けているが、焼土・炭化物は認められない。

沈目遺跡では押型文土器、久保遺跡では円筒形土器を伴って出土している。

花ノ木遺跡では第5地点に2、第6地点に10、第7地点に5の集石遺構⁵⁾がみられ、前期に属することが考えられる⁶⁾。

当遺跡のものは、明確な掘り込みは確認できないものの礫の出土状況は窪みの様相を呈しており掘り込みが存在したものと思われる。炉内に炭化物は認められなかったが、石の表面は若干赤みをおびている。土器片が礫の中に含まれず上面にのみ存在しているのは、この土器が礫の置かれたのちに上へのせられたことを物語っている。つまり、窪みをつくる、礫を集める。集石の上に土器を置くといった一連の動作を示している。また、土器片に付着している煤の存在はこの土器が蒸炊き用として使われたことを示しており、この集石遺構が生活遺構の用途をもつことを示唆している。

4 C区・4 D区に検出された2号集石遺構は、1号集石遺構とは構成している礫の質、規模等かなりの相違がみられる。これにも焼土・炭化物等はみられない。時期も不明である。これらのことより、生活遺構と考えることは困難と思える。

②土器

縄文式土器は大きく前期に属するもの（1類～6類）と後期・晩期に属するもの（7類～12類）とに分かれる。これを層位的に分けることは困難であった。

1類はかつて阿多式土器と呼ばれ、現在轟式土器と呼ばれる貝殻条痕を巡らす土器である。

口縁部にきざみのあるもの⁽⁷⁾、ないもの、突帯のあるもの、ないものといった違いはあるものの、石英など砂粒を多く含む胎土や表面の剥脱がみられることなど類似性は強い。轟式土器は轟貝塚でA～Dの4式に分けられ、上焼田遺跡で7類に分けられている。当遺跡の土器は、色々の要素のものを含んで厳密に分けがたいが、轟B式・C式、上焼田1類～4類・6類を含んでいる。また、これらの中には深浦式・塞ノ神B式も含まれている。轟式土器は従来、早期から前期の編年を与えられていたが、最近高木正文氏⁽¹¹⁾は轟式土器を円筒土器（石坂式・吉田式・前平式・塞ノ神式・跡江式・柏田式などを含む）⁽¹²⁾と曾畑式土器との中間におき、前期中葉とする新しい編年をされている。今回の資料はこれらの問題に対し有効なものではないが、円筒形をし、口縁端部にきざみを施したり⁽¹³⁾、縦方向と斜め方向の条痕で格子文をつくるなど貝殻文土器、特に前平式土器・塞ノ神式土器との類似性が強いといえる。

2類は円筒の器形をする押型文土器で前期のものと思われる。

3類は型式名のない土器で溝辺町桑ノ丸遺跡で3類と称されている土器である。

4類は轟貝塚でC式第3類とされているもので塞ノ神B式にも似ている。⁽¹⁴⁾

5類は刺突文と沈線のあるもので、これは轟D式・日本山式⁽¹⁵⁾・日勝山式⁽¹⁶⁾に近い系統と思える。上焼田7類にも似ている。

6類は春日式土器である。

7類～9類は口縁部⁽¹⁷⁾が肥厚あるいはくの字形の断面をなし、山形口縁をなすものが多い。

貝殻連続文を主として使う7類の土器は、市来式土器⁽¹⁸⁾・草野式土器⁽¹⁹⁾に近い様相をもつ。しかし市来式土器は口縁部を部厚くつくるが、7類の場合はさして部厚くないことから、市来式系の土器といえる。

8類は肥厚する口縁部に短絡線あるいは刺突文をめぐらし、胴部には幅広い沈線間に縄文を施すもので北久根山式土器に近い様相をもつ。同時に11類・12類も北久根山式土器の特長をもっている。しかしながら刺突文を多く使う点は北久根山式土器本来のものとのちがいをみせる。⁽²⁰⁾

9類は西平式土器である。

北久根山式土器と西平式土器⁽²¹⁾との関係について乙益重隆氏は北久根山式には西平式土器の先駆的要素がみられるとしているのに対し、坂田邦洋氏は形態の点から直接結びつかないとされる。また、西九州の海岸地帯では北久根山式土器に市来式系土器の共伴することが知られている。ここにまた市来式系の土器に北久根山式土器が伴っていることが証明された。このことはこの両者がきわめて近い関係にあることを示している。そして西平式土器も、これらの土器と大して遠くない位置にあることを示唆している。本遺跡における後期の土器は、市来式土器・北久根山式土器・西平式土器の影響を強く受けながら、独自の文様をも作っている。このこと

は当遺跡が九州の西海岸に位置していることと無関係でない。

10類は後期・晩期の各種の型式を含んでいると思われ、この中には礫石原式（黒川式）土器²²もみられる。

このように本遺跡の縄文式土器は縄式土器を中心に、市来式系土器・北久根山式系土器・西平式土器など各時代にわたる各種の土器を含んでいる。それらの中にはその中間形態も含まれ地域性、あるいは発展過程の中で重要な意味をもっている。今後、土器の再分類など含めてこの資料は再検討されねばならない。

次に狭い範囲ではあるが、5m四方のグリッドで土器の集中度を比較してみた。下表でわかる様に縄文式土器はほぼ4B区・4C区・5B区・5C区・6C区周辺に集中しており、特に後期の土器はこのあたりに集中する。1類は3つに細分化したが、この中で1a₂類のみが8B区・8C区・9B区・9C区・10B区周辺に集中する。これは1a₁類・1b類が4B区・5B区・5C区・6C区周辺に集中するのと対照的である。このことは、1a₂類の裏面がなで整形であるのに対し、1a₁類・1b類の裏面があらう条痕を残すという関係に似ている。今後、縄式土器の細分化をおこなう上で検討されねばならない。

出土 類 区	2		4		5			6		7		8		9		10		特別 区	土 塚 墓	不 明	計
	C	B	C	D	B	C	D	B	C	B	C	B	C	B	C	B	C				
1 a ₁		2	1		3	1						1						1			9
1 a ₂			1		2			1		1	6	3	11	3	6				1	3	38
1 b	1	2	1		1	2	1	1	8			1	1			3	1	1			24
1 胴		3	2		3	6			4			2				3					23
1 底					1									4							5
2												1									1
3																1					1
4																	1				1
5						2															2
6						1															1
7			8	5	1	2	4			3	2		3					2			30
8			3	2		3	8			1	4										21
9			4	1							1		1								7
10			5	2		1	1				2						1				12
11				1																	1
12			1																		1
底部			1	1		1							3	1	1		1		2		11
計	1	29	17	1	17	25	1	2	23	2	1	17	6	16	3	14	3	6	1	3	188

第7表 縄文式土器出土地点比較表

③土製品

2種類の土製品が出土している。194は糞石のようでもあるが、細石粒を含むことよりなんらかの土製品であろうと思われる。しかし、土器に多く含まれる石英粒などが含まれないなど問題を残している。

195は土偶の腕と思われる。土偶の出土は東日本に比較して西日本ではきわめて少ない。特に中期までは中部地方以東に限定され、西日本では後期末になって増加する。江坂輝弥氏によると『後期末から晩期初頭、熊本県北半部から大分県・宮崎県西北部の地域にわたって多数の土偶が製作され、合計100点を越す土偶が発見されている。』とされる。このように九州で発見が多くなる時期においても鹿児島での発見例は数少なく、²³⁾現在はっきり確認できるのは上加世田遺跡の2点のみである。他に志布志町²⁴⁾牧野遺跡でも出土している。²⁵⁾

本遺跡の土偶は腕という身体の一部であって全形をうかがうにはあまりに小さい。さらに共伴遺物もはっきりしない。そこで、西日本の後期における土偶の中から類似したものをさがしてみると、腕が下方にさがり、棒状を呈したものは宮崎県陣内遺跡、大分県中津南高校敷地内などにみられ、当遺跡のものに類似している。出土状況ははっきりしないが、²⁶⁾破損された状況で出ているのは他の多くの土偶と同じである。²⁷⁾

④石器

石鏃、石匙、石斧と、道具としての石器は全て出土しているといえる。石鏃では、3点の特大の出土があり注目される。これまで県内の同時代の遺跡で4cmを起す大形の石鏃では、わずかに出水市上場遺跡の採集資料の中に1点知られていただけであり、3点まとまった発掘資料としては初めてのケースであった。

石斧では、打製石斧、磨製石斧が半々出土しているが、これは、各時代の遺物が混在しているものと考えられる。技術的には、打製石斧に一つの特長をみることができ、玄武岩を素材とし、その素材に交互に荒いタッチを加え、ギザギザの鋭い刃部を設けるという技法をとらえることができる。

さらに、剥片石器においては、西之蘭遺跡特有のものを観察することができた。

剥片技術には、「縦剥ぎ」「横剥ぎ」の技術をみることができ、その採集した剥片は200点におよんでいる。まず、縦長剥片においては、62・66・68・88等にその技術を見ることができ、なかでも、62は、長さ11cmを越す剥片で、打撃も十分になされて、弯曲も少ない。表面には、最低3回以上の剥出を見ることができ、連続して剥ぎ取ったことを見れる。

横長剥片においては、74、76にその代表例を取りあげることができ、剥片の一般的な形は、頭部が厚く、打溜が明瞭に残り、先端に近づくにつれて薄くなるという形体となっている。74・75・76のように、主要剥離面は一回の打撃により扁平に近い剥片を取り出している。また、表面には、剥出調整の調整痕が数回なされたことが観察され、明確な横剥技術を見ることができ、

⑤石製品

昭和50年度に県教委により発掘調査の行なわれた「金峰町上焼田遺跡」より、蛇紋岩製の玦状耳飾りが2点出土したのに続いて、今回、軟玉製の半欠品が1点出土した。上焼田遺跡の報告のなかで当時の出土地名を紹介したが、その後、さらに出土例が判明したので再度記すことにした。²⁸⁾

枕崎市草垣島	1	枕崎測候所所有	「採集」	
西之表市現和田ノ脇	1	西之表市博物館	「ク」	
出水市荘貝塚	2	池水寛治所有	「発掘」	轟式土器
出水市江川野	1	池水寛治所有	「採集」	
大口市永山遺跡	1			
坊ノ津町	1	坊ノ津町郷土館	「採集」	
上焼田遺跡	2	鹿県文化課	「発掘」	轟式土器
志布志町内倉	1	前田昭所有	「採集」	
笠沙町西之藪遺跡	1	鹿県文化課	「発掘」	轟式土器

弥生時代・古墳時代

弥生時代は中期中葉の須玖式土器が1点出土しているのみである。

古墳時代の遺物は多量出土しており、周辺にも広く散布していることより大きな集落が営まれていたと思われる。しかしながら、調査地内には土塚以外に遺構はない。

4B区にある土塚は浅いくぼみになっており、あるいは自然の窪地の可能性もある。したがって土塚の用途等について言及することは差し控えたい。

南九州における古墳時代の土器の編年はまだ十分ではないが、最近調査報告の出た辻堂原遺跡では大きく2類に分けている。²⁹⁾こゝでこの資料を使えば辻堂原1類と思われるのは、土塚内の資料・埴形土器・高環形土器などがあり、2類のものとして甕形土器・壺形土器・高環形土器などがある。これらの年代幅は少なくとも100年以上が考えられ、この台地一帯では長期にわたって生活が営まれたものと思われる。

中世

①概要

中世のものと考えられる遺構に建物1棟とピット群がある。これらの共伴遺物として多量の磁器類・陶器類・土師器・須恵器などがあり、これらは15～16世紀頃のものと思われる。当遺跡の南側に『アンダドン』と呼ばれている畑があり、こゝの多数の五輪塔は吉野期以降のものと思われる。江戸時代にかゝれた『加世田再撰史』によると赤生木村に慶昌庵というものがあつたとされており、この一帯がそうでないかと考えられる。³⁰⁾『アンダドン』というのは『阿弥陀堂』ではなかろうか。

このようにすぐ近くに寺跡とみられる遺跡があり、この建物およびピット群も一連の遺構と考えられる。それは、多量の磁器類に対し生活用具である土師器・須恵器等の出土量が少ないことも裏付けている。

これら一群の磁器類は多くが明代のものである。

②備前焼

岡山県備前市周辺に産する備前焼は古くより全国各地へ販路を広げている。九州でも福岡県井手ノ原遺跡⁽³¹⁾・熊本県宇土城址⁽³²⁾・大分県十三重層塔⁽³³⁾などで出土が知られている。

従来出土の知られていなかった本県においても、近年報告例・出土例が増加しつつある。甕が始良町南宮島遺跡⁽³⁴⁾で、摺鉢が加世田市村原遺跡⁽³⁵⁾・鹿児島市加栗山遺跡⁽³⁶⁾で、片口小壺が枕崎市で出土している。これらの出土地のうち村原遺跡⁽³⁵⁾・加栗山遺跡⁽³⁶⁾は山城で、南宮島遺跡⁽³⁷⁾は多くの土壇が検出されている。時期的には室町時代のものである。

当遺跡の備前焼と考えられるものは272・273・274・276である。これらは備前焼特有の赤っぽい茶褐色を呈し、胎土中に粗砂を数多く含み、表面には胡麻がみられる。272は間壁編年によるⅢ期(15世紀)のもので、姑耶山窯跡出土のものに類似している⁽³⁸⁾。273はⅣ期(16世紀)のもので不老山東口窯跡のものに類似している⁽³⁹⁾。276は櫛目の間隔⁽⁴⁰⁾から272に近いといえる。

このように、当遺跡における備前焼の出土は、備前焼の伝播が短期間で終わっていないことを証明しただけでなく、鹿児島県へ備前焼が持ち込まれた最初の時期をも示唆している。

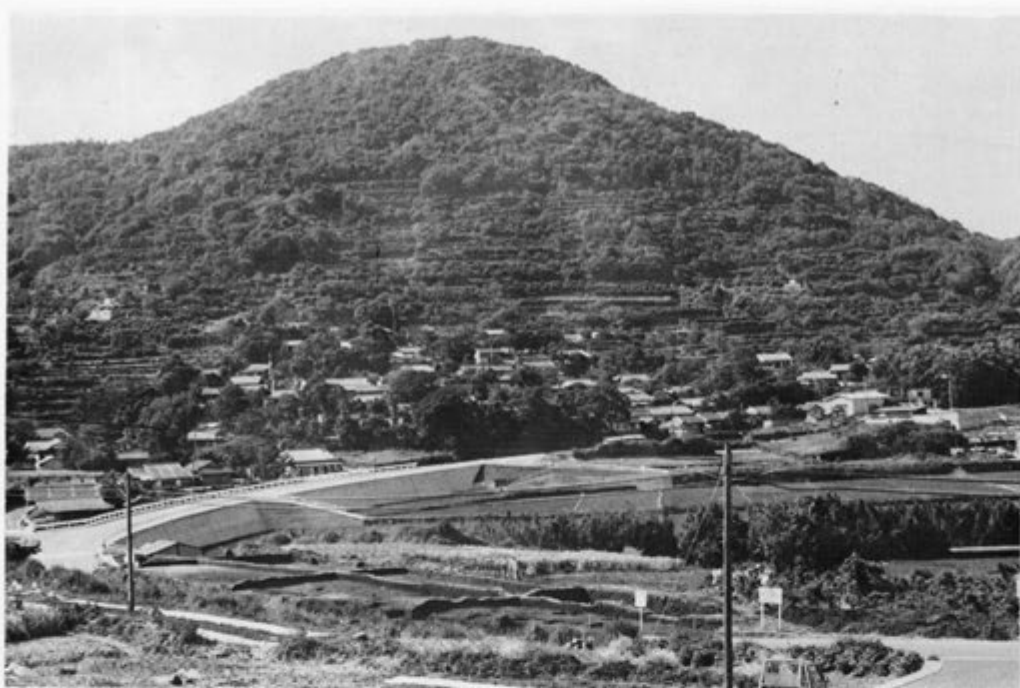
(註)

- (1) 印東道子「トラック諸島の石焼料理」『えとのす』第7号 1976年
- (2) 木下修「第43-1地点(深原遺跡)の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報-S48年度』1976年
- (3) 木下修・藤瀬禎博「第33-1地点(原遺跡)の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報-S50年度』1976年
- (4) 江本直・隈昭志『沈目』(『熊本県文化財調査報告』第13集)1974年
- (5) 緒方勉・高木正文他「久保遺跡」『熊本県文化財調査報告』第18集 1975年
- (6) 諏訪昭千代・青崎和憲『花ノ木遺跡』(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』)(1) 1975年
- (7) 三森定男「先史時代の西部日本(上)」『人類学・先史学講座』第1巻 1938年
- (8) 松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告」『考古学雑誌』第47巻第3号 1961年
- (9) 出口浩・池畑耕一「上焼田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(5) 1977年
- (10) 小林久雄・住谷正節「薩摩国枕崎町花渡川遺跡」『考古学』11の3 1940年
- (11) 河口貞徳「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第6号 1972年
- (12) 乙益重隆「九州西北部」『日本の考古学』Ⅱ 1965年
- (13) 高木正文「熊本県の円筒形土器」『考古学論叢』4 1977年

- (14) 新東晃一・青崎和憲・中村耕治・牛之浜修「桑ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(7) 1977年
- (15) 樋口清之・乙益重隆「加治木町日木山洞窟遺跡」『史前学雑誌』10—2 1938年
- (16) 木村幹夫「伊佐郡日勝山土器について」『考古学』7の9 1936年
- (17) 河口貞徳・河野治雄「鹿児島市春日町遺跡発掘調査報告」『鹿児島県考古学会紀要』第4号 1955年
- (18) 河口貞徳「南九州後期の縄文式土器」『考古学雑誌』42の2 1957年
- (19) 河口貞徳「草野貝塚発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』第1号 1952年
- (20) 乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化—九州」『新版考古学講座』3 1969年
坂田邦洋「北久根山式土器の設定」『考古学論叢』3 1975年
- (21) 小林久雄「九州の縄文土器」『人類学・先史学講座』第11巻 1939年
- (22) 吉田正隆『礫石原遺跡』（『百人委員会埋蔵文化財報告』第7集）1977年
- (23) 江坂輝弥「土偶・土版・土面」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館 1974年
- (24) 河口・池水・上村・出口・諏訪・本蔵『上加世田遺跡発掘調査概報』 1971年
- (25) 鹿児島県教育委員会『鹿児島県遺跡地名表』 1964年
- (26) 鈴木重治・賀川光夫『陣内遺跡』（『日向遺跡総合調査報告』）第2輯 1962年
- (27) 賀川光夫「九州地方の造形文化」『古代史発掘』3 1974年
- (28) (9)と同じ
- (29) 弥栄久志・池畑耕一『辻堂原遺跡』吹上町教育委員会 1977年
- (30) 1864年（元治元年）刊
- (31) 井上裕弘・藪久嗣郎・小池史哲「井手ノ原遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集 1976年
- (32) 原口他『宇土城跡（西岡台）』（『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第1集） 1977年
- (33) 九州歴史資料館『九州の奈良・平安陶磁』 1977年
- (34) 青崎和憲『南宮島遺跡』始良町教育委員会 1977年
- (35) 新東晃一・中島哲郎・牛之浜修『村原遺跡（梶ノ原遺跡）』加世田市教育委員会 1977年
- (36) 九州縦貫自動車道工事に伴い県教育委員会が調査。報告書未刊。
- (37) 池畑耕一「鹿児島県出土の備前焼(1)」『瀬戸内考研』No.5 1977年
- (38) 間壁忠彦・間壁葎子「備前焼研究ノート(2)」『倉敷考古館研究集報』第2号 1966年
伊藤晃・上西節雄『備前』（『日本陶磁全集』）中央公論社 1977年
- (39) 岡山県立博物館にて比較した。栗野克己氏にお世話になった。謝意を表す。
- (40) 河本清・葛原克人「不老山古備前窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1972年



1. 西之園遺跡遠景 (西より)



2. 西之園遺跡近景 (南より)

図版 2



1. 調査地区全景 (東より)



2. 調査地区全景 (東より)



1. 縄文式土器散布状況（東より）



2. 縄文式土器散布状況（西より）

図版 4



1. 1号集石遺構 (西より)



2. 1号集石遺構 (南より)



1. 2号集石遺構 (南より)



2. 2号集石遺構 (西より)

図版 6



1. 列石 (西より)



2. 列石 (北より)



3. 土壇 (北より)



1. 建 物 (北より)



2. 建 物 (東より)

図版 8



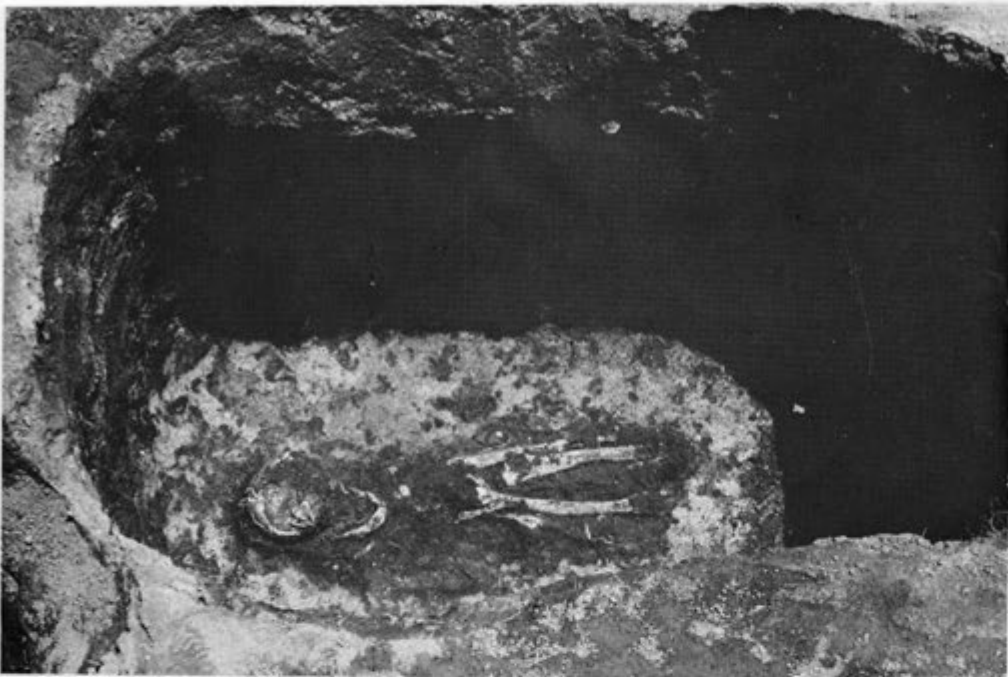
1. 墓壇群 (西より)



2. 1号墓壇 (東より)



1. 2号墓坑（西より）



2. 3号墓坑（西より）

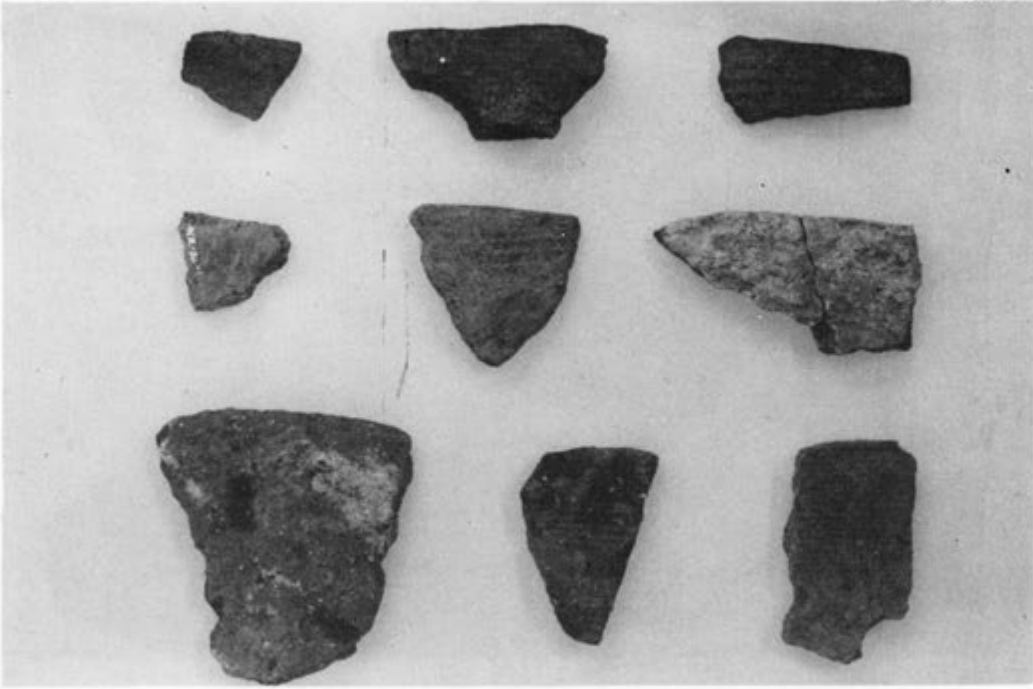
図版10



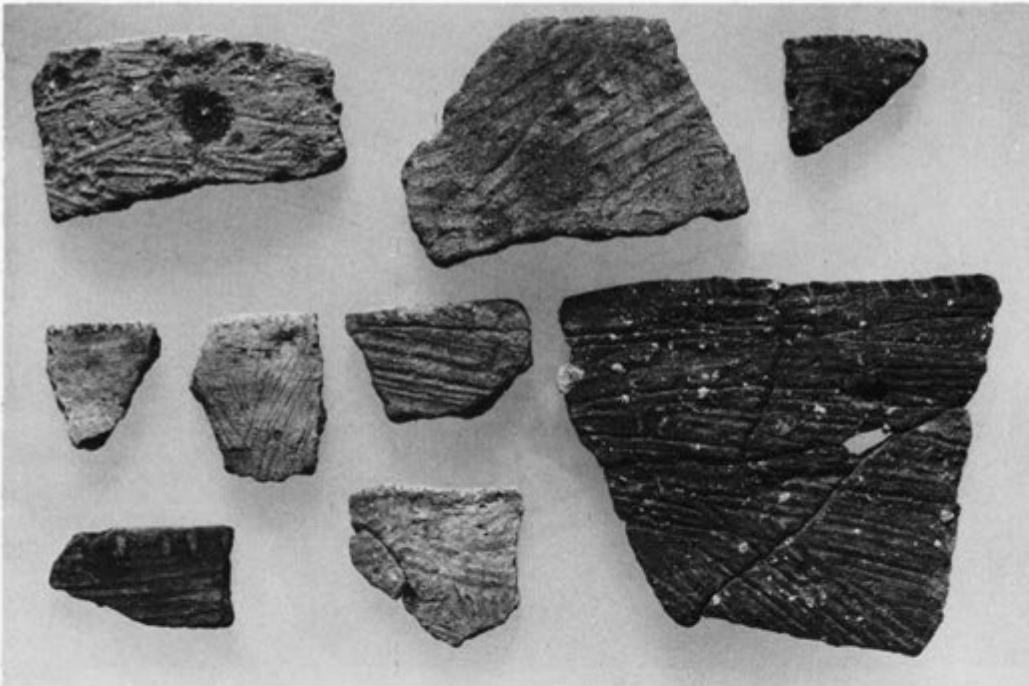
1. 4号墓壇（東より）



2. 1号墓壇の人骨（南より）

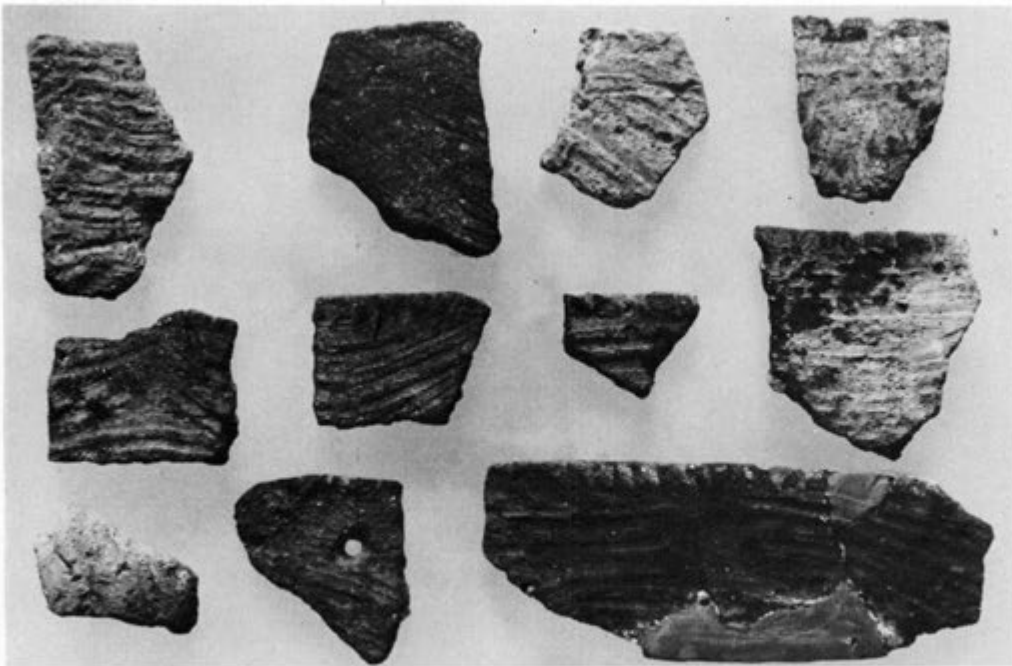


1. 縄文式土器 1 a₁類



2. 縄文式土器 1 a₂類

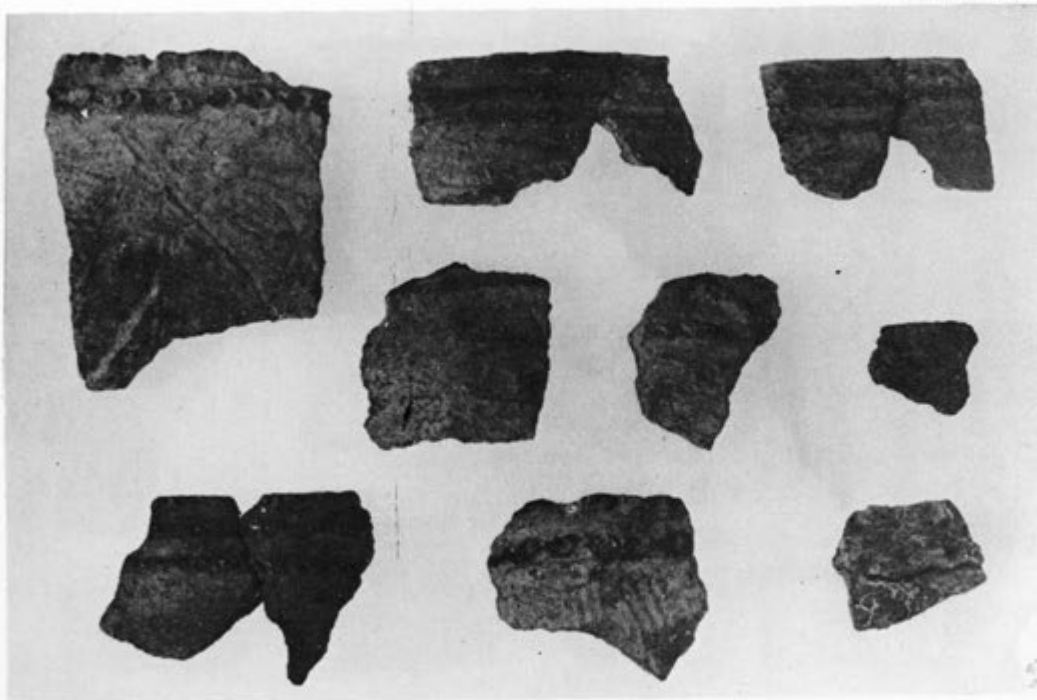
図版12



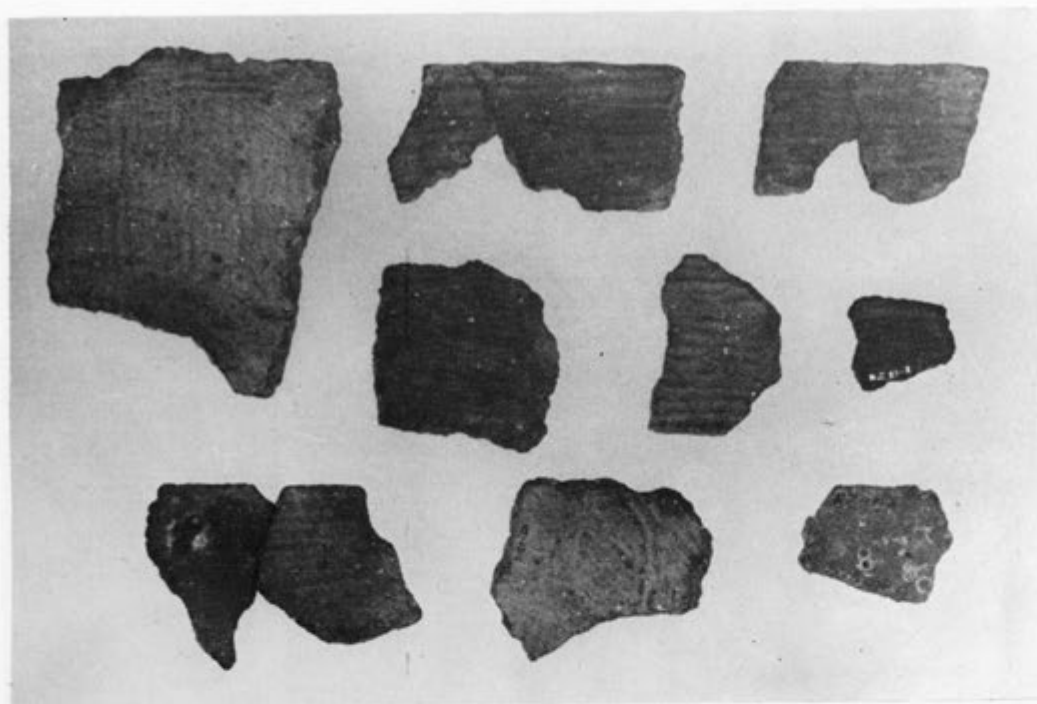
1. 縄文式土器 1 a₂類



2. 縄文式土器 1 b類



1. 縄文式土器 1 b類(表)

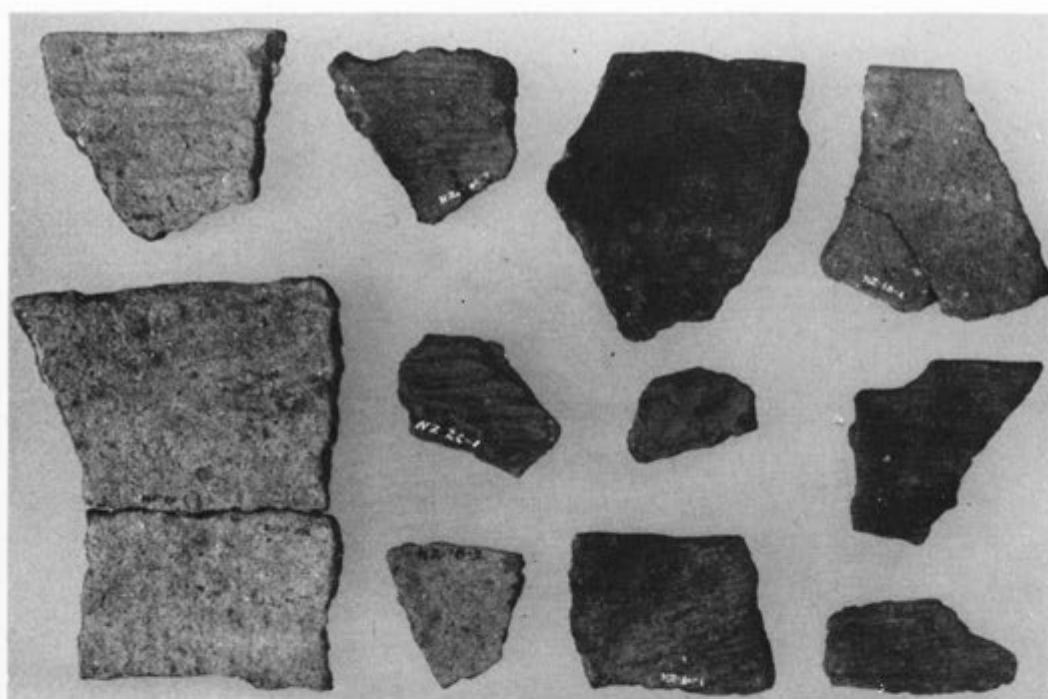


2. 縄文式土器 1 b類(裏)

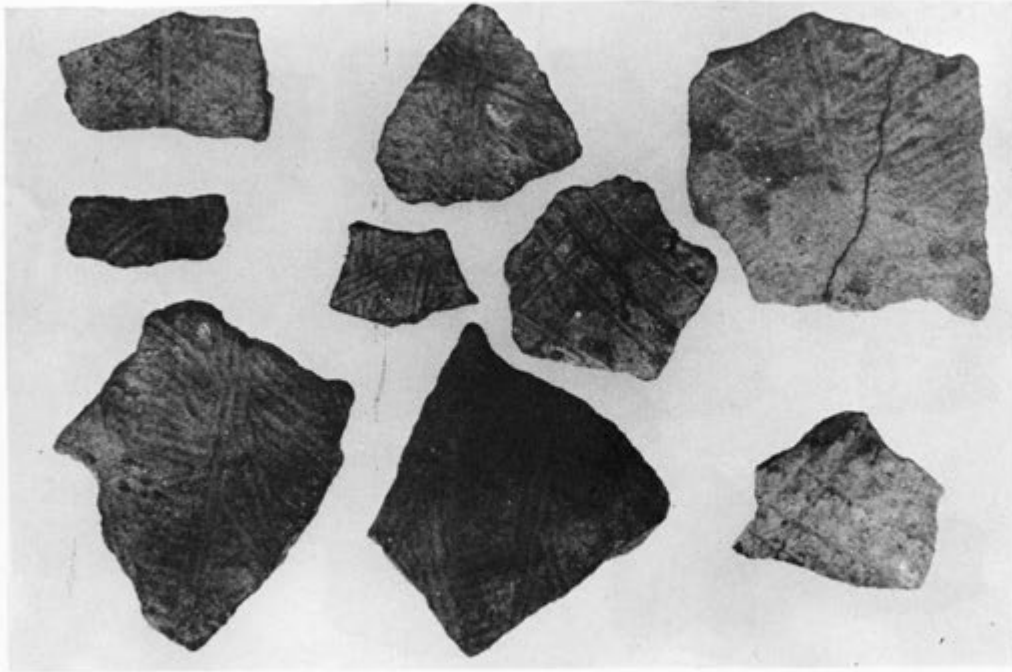
図版14



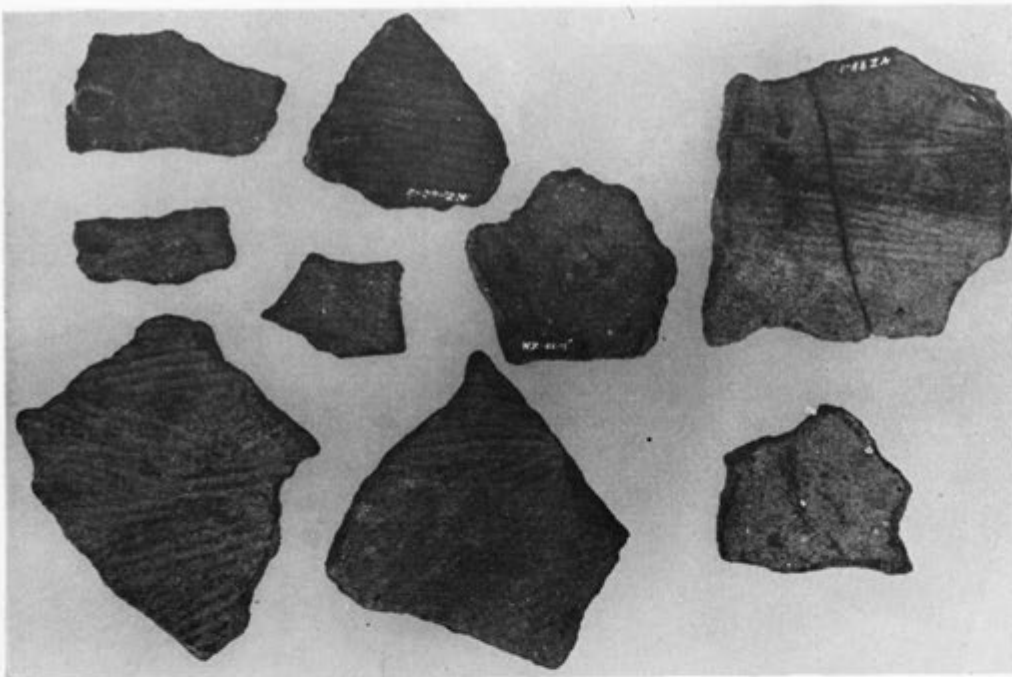
1. 縄文式土器 1b類(表)



2. 縄文式土器 1b類(裏)

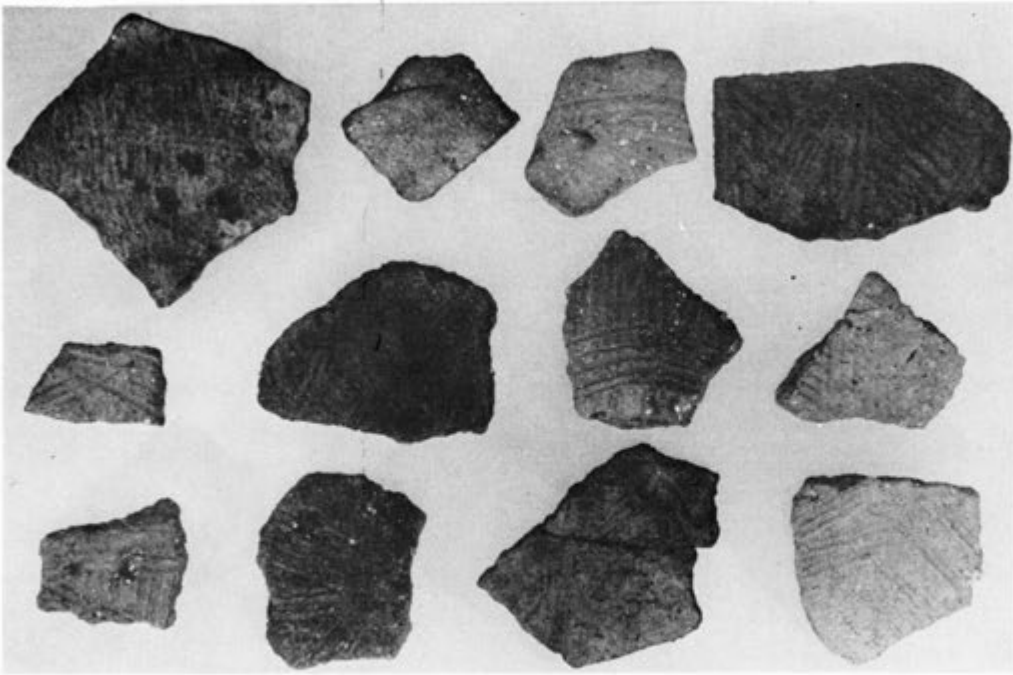


1. 縄文式土器 1類(表)

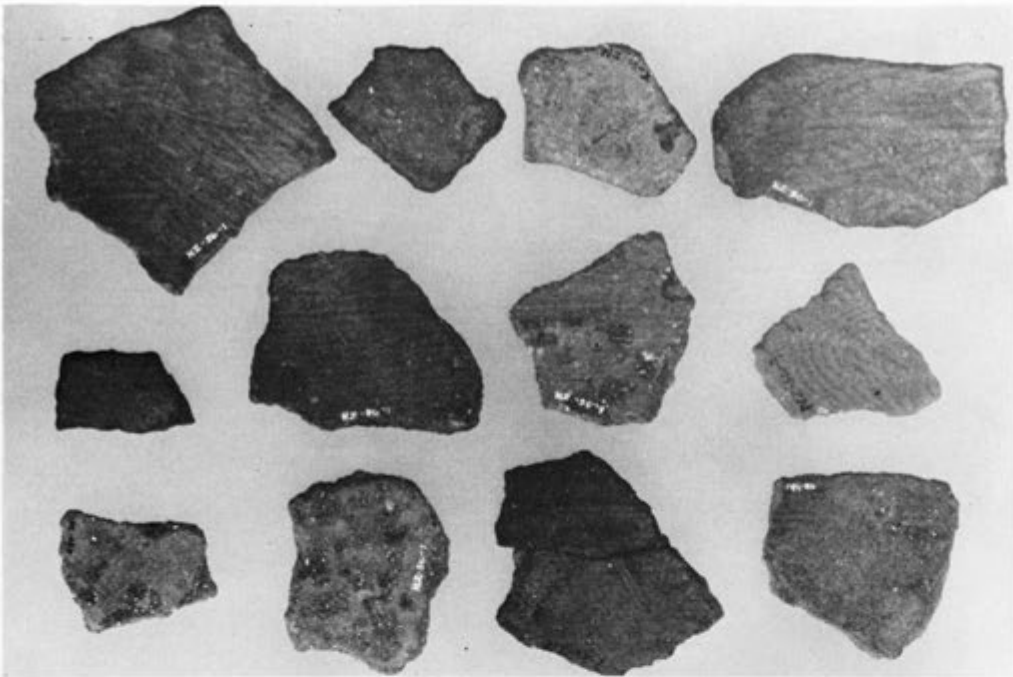


2. 縄文式土器 1類(裏)

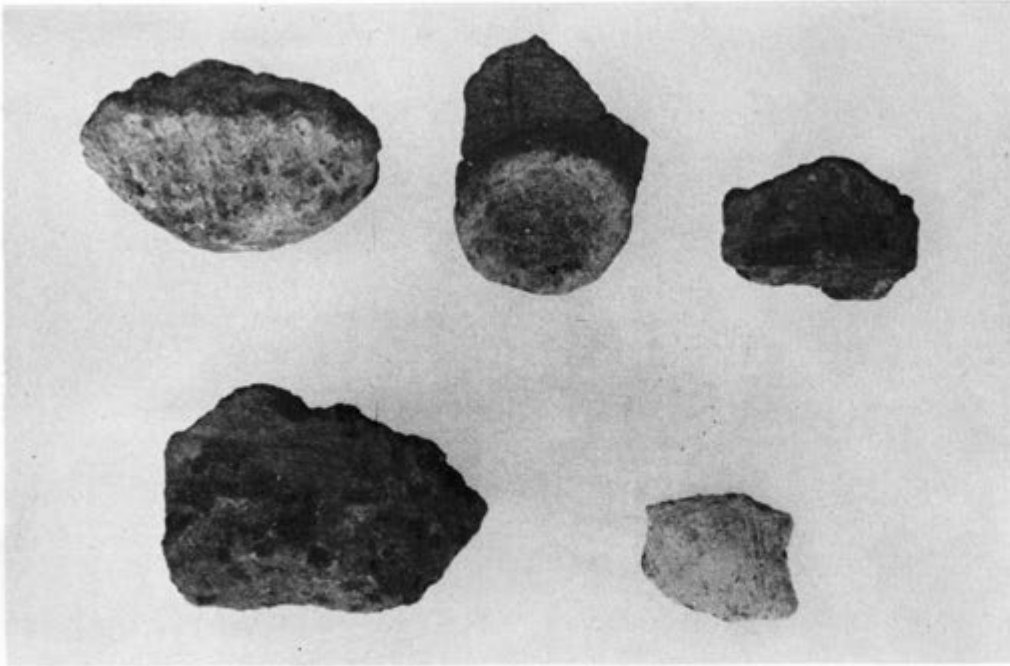
図版16



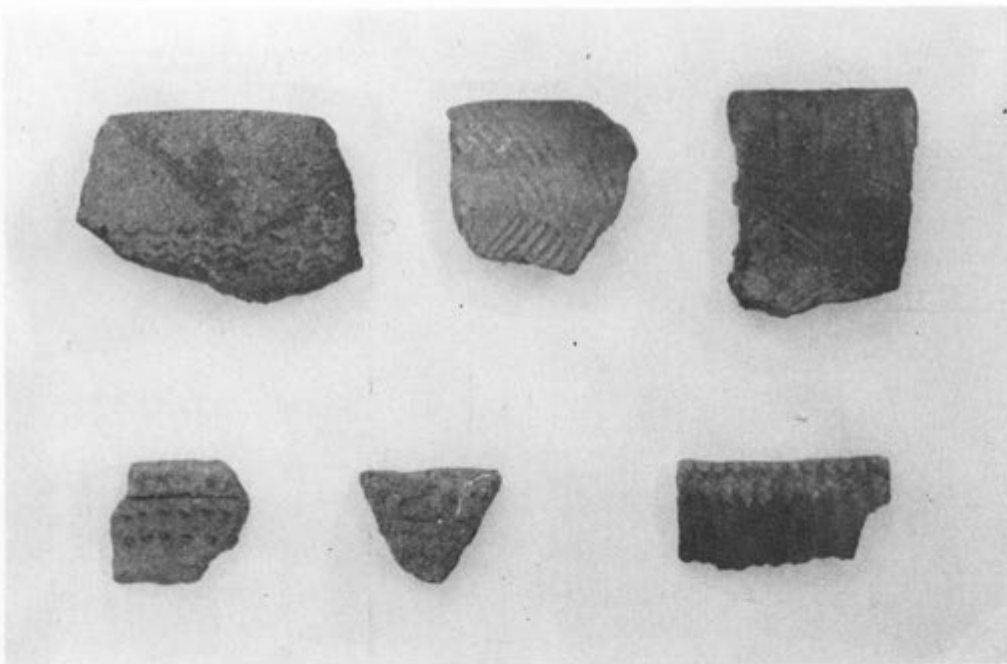
1. 縄文式土器 1類(表)



2. 縄文式土器 1類(裏)

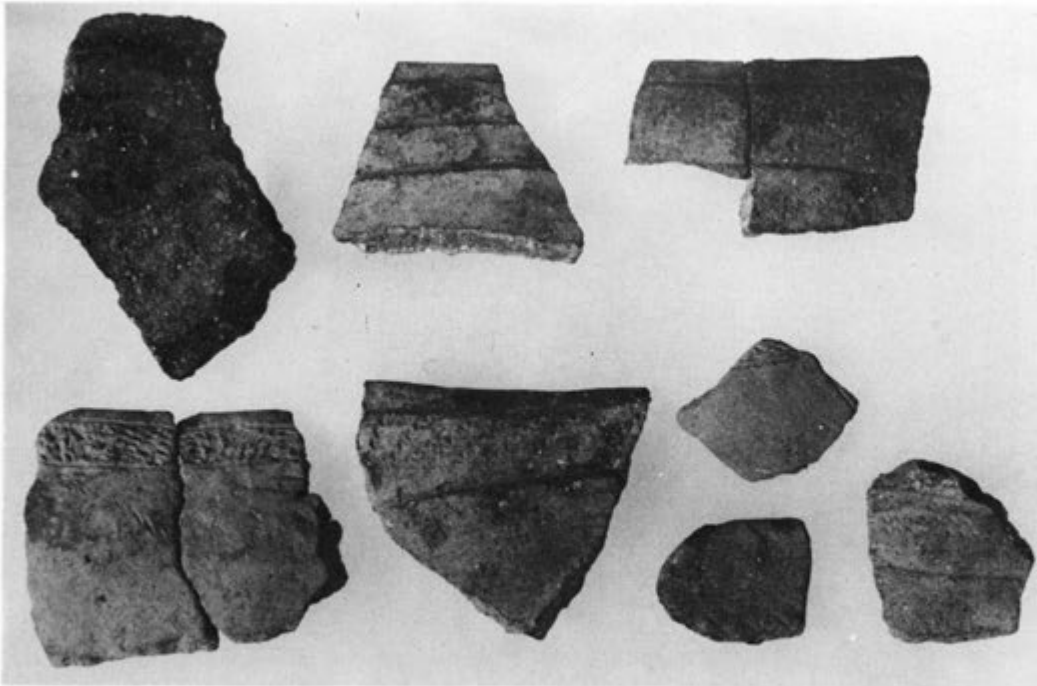


1. 縄文式土器 1類



2. 縄文式土器 2類～6類

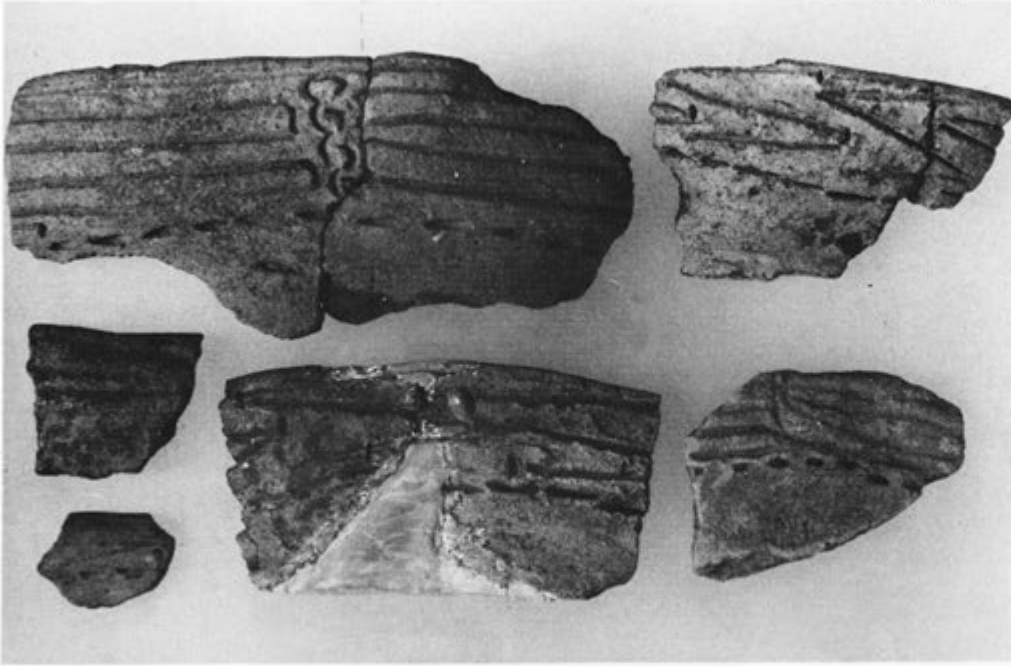
図版18



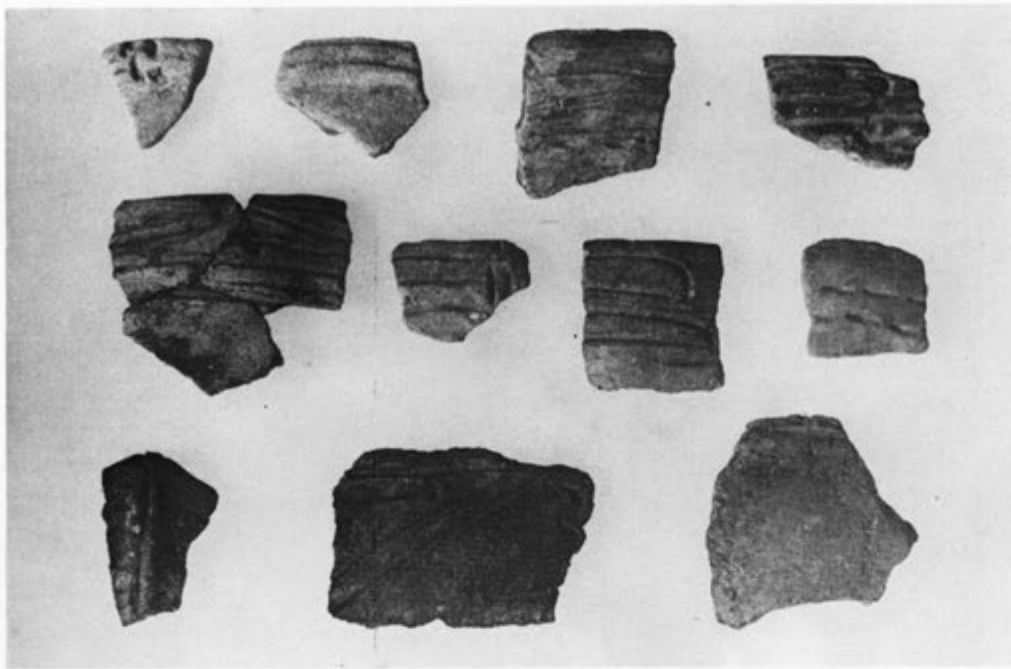
1. 縄文式土器 7類



2. 縄文式土器 7類

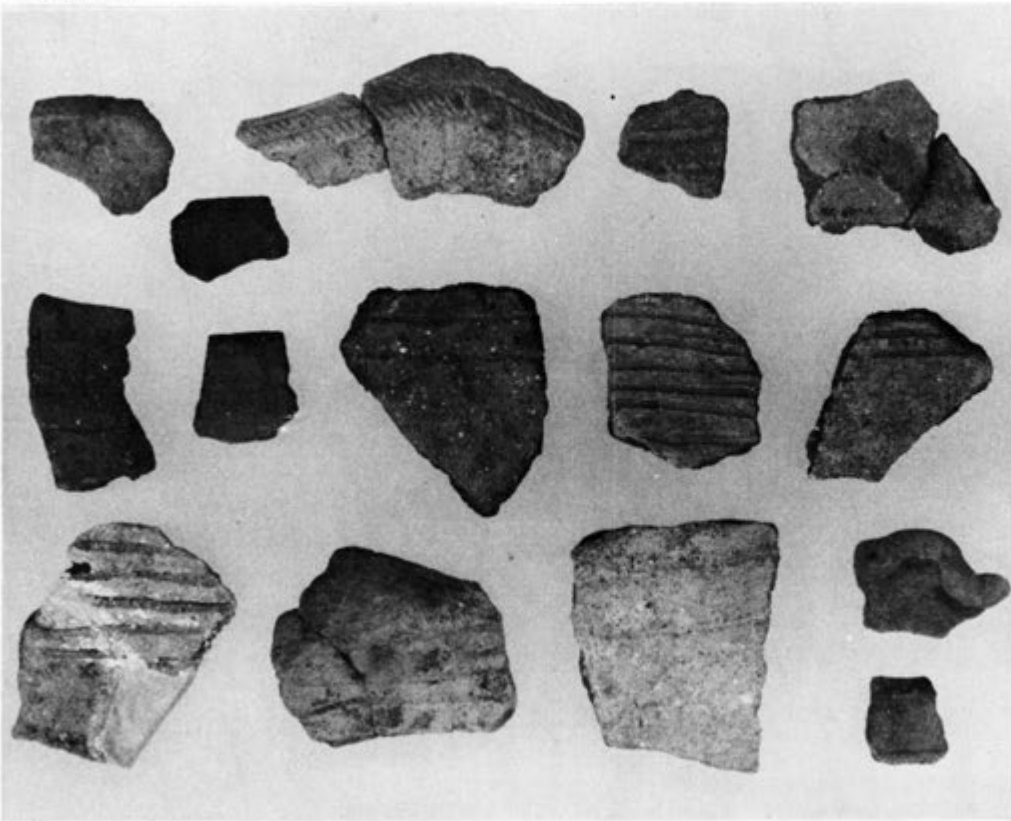


1. 縄文式土器 8類

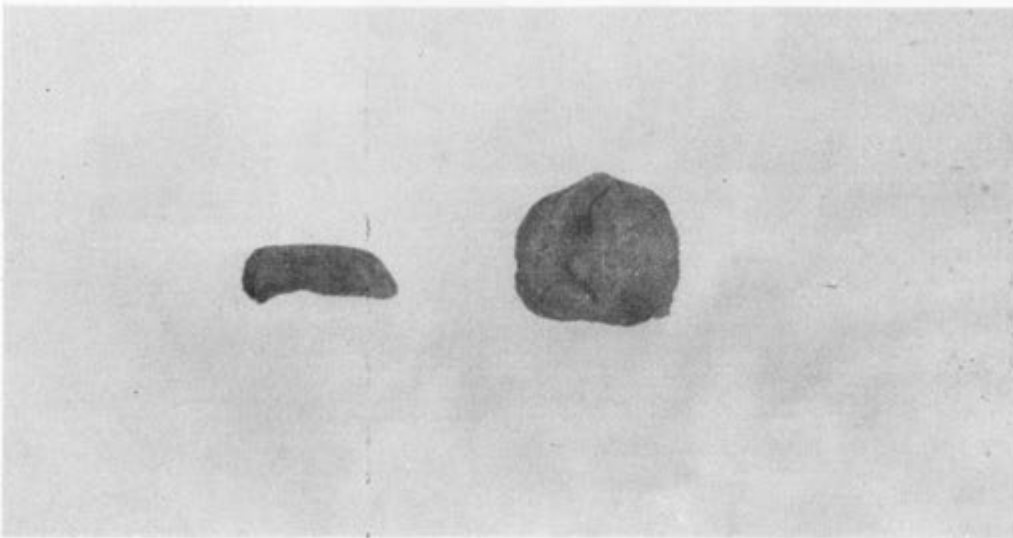


2. 縄文式土器 8類

図版20



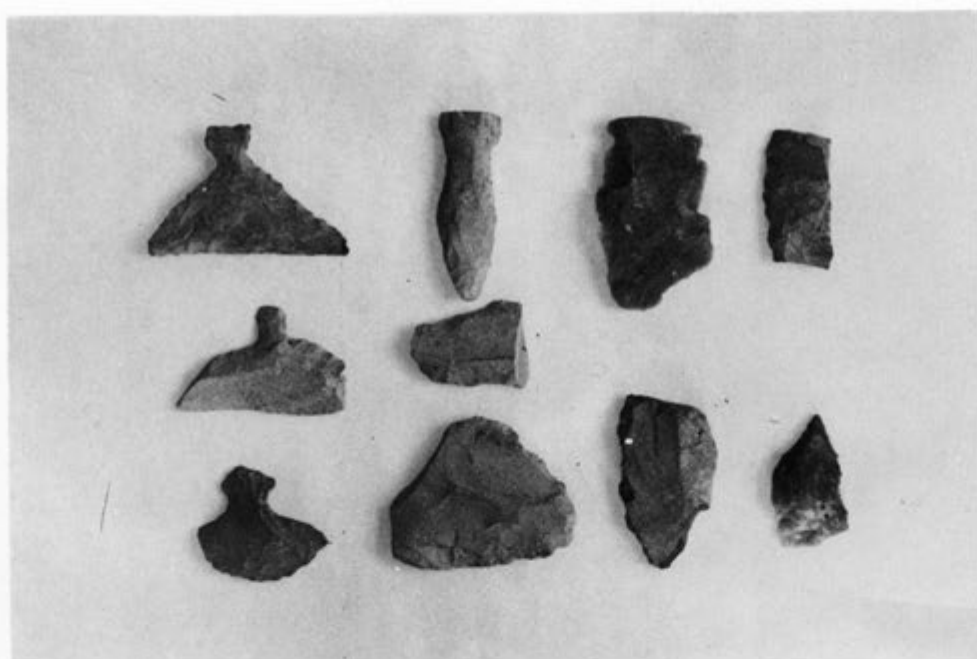
1. 縄文式土器 9類~12類



2. 土製品

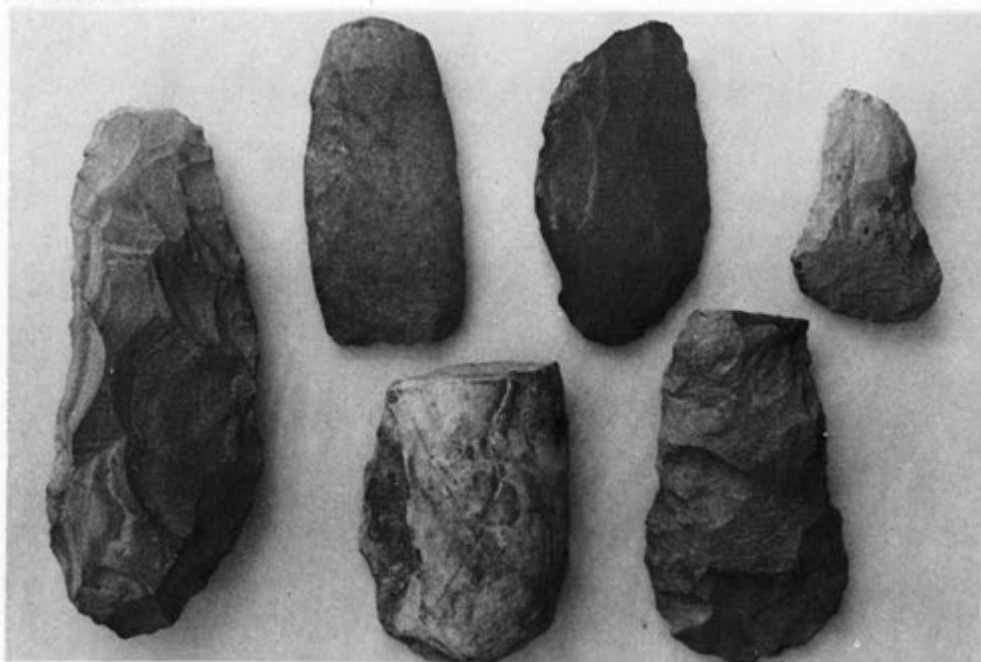


1. 石 鏃



2. 石 匙

图版22



1. 打製石斧 (表)



2. 打製石斧 (裏)

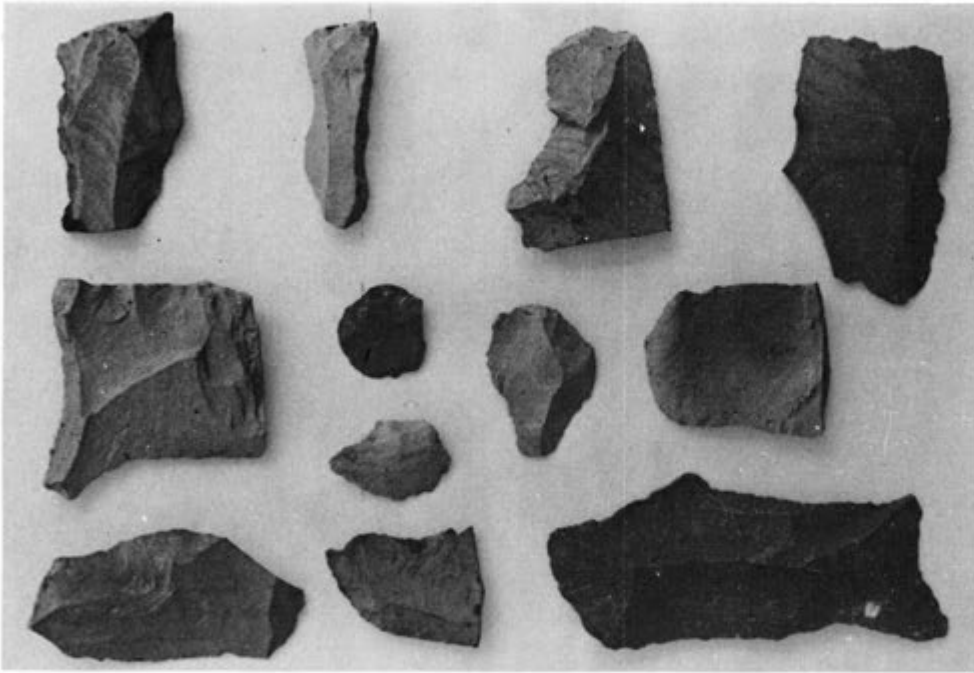


1. 磨製石斧 (表)

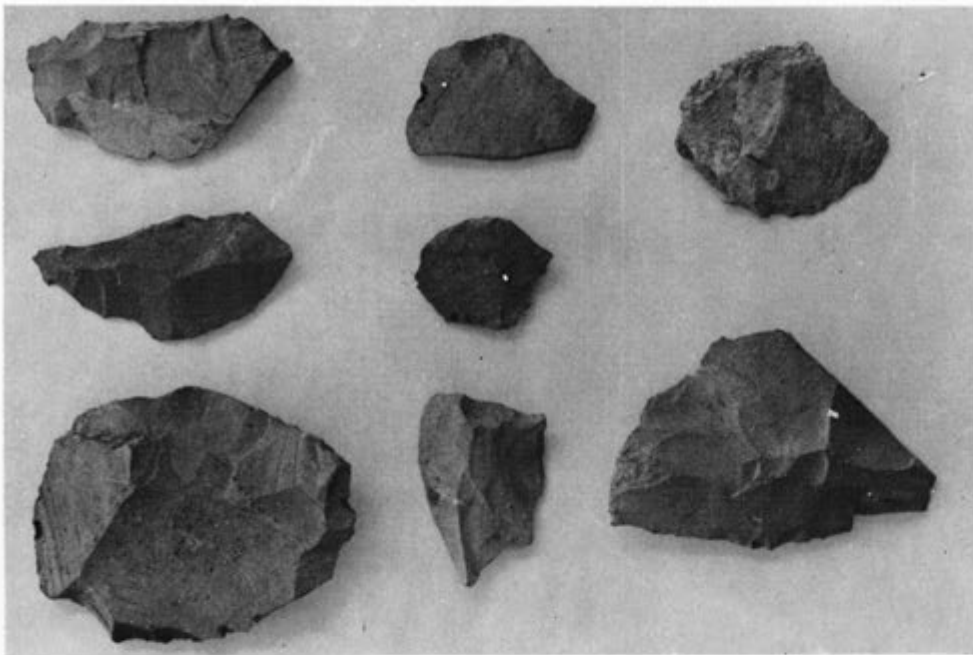


2. 磨製石斧 (裏)

图版24



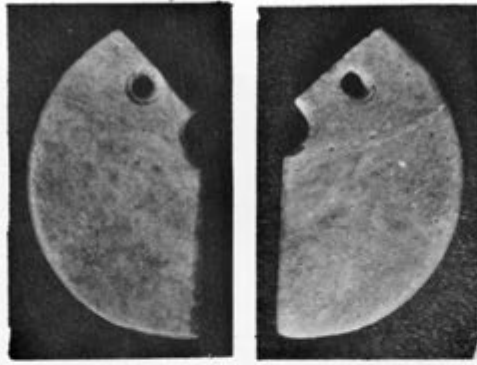
1. 剥片石器



2. 剥片石器



剥片石器と出土状況



1



2



3



4



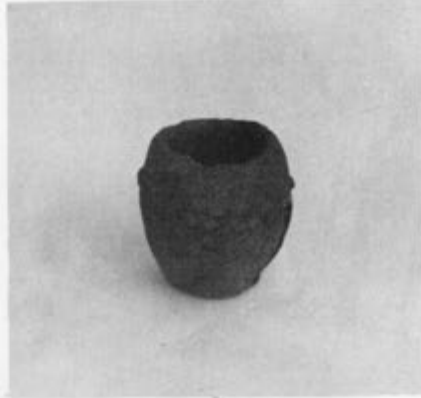
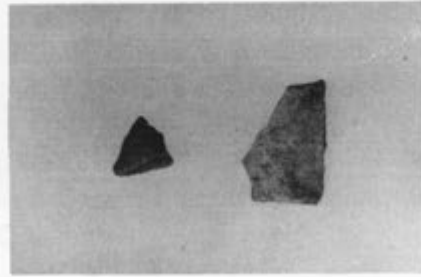
5



6

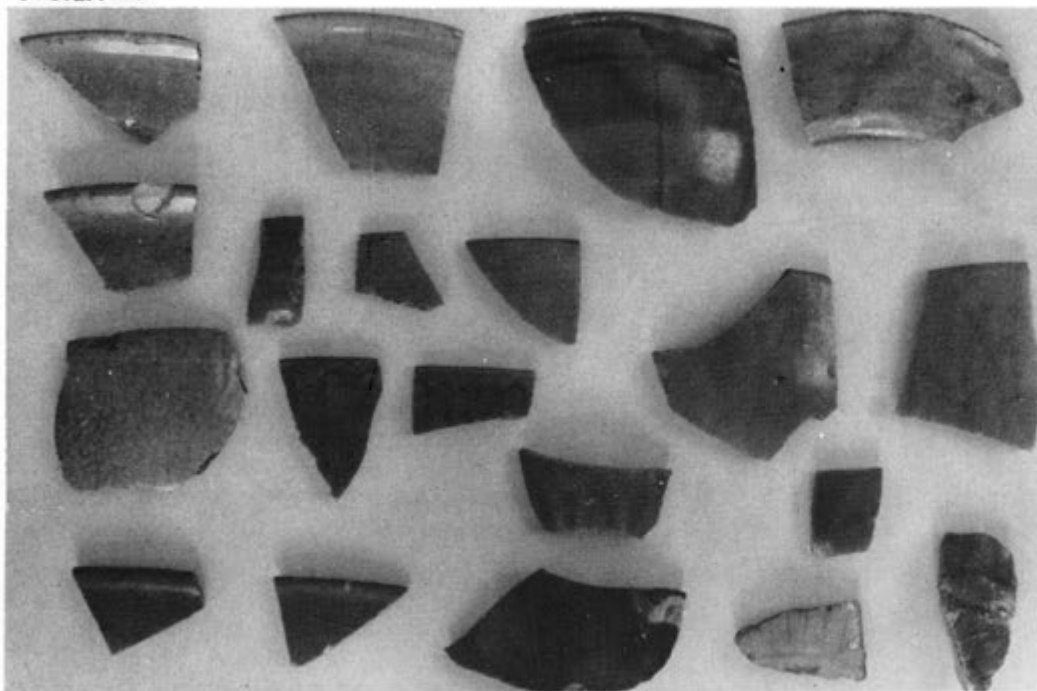
1. 笠沙町西之園遺跡
2. 枕崎市草垣島
3. 西之表市現和
4. 志布志町内倉
5. 金峰町上焼田遺跡
6. 金峰町上焼田遺跡

玦 状 耳 飾

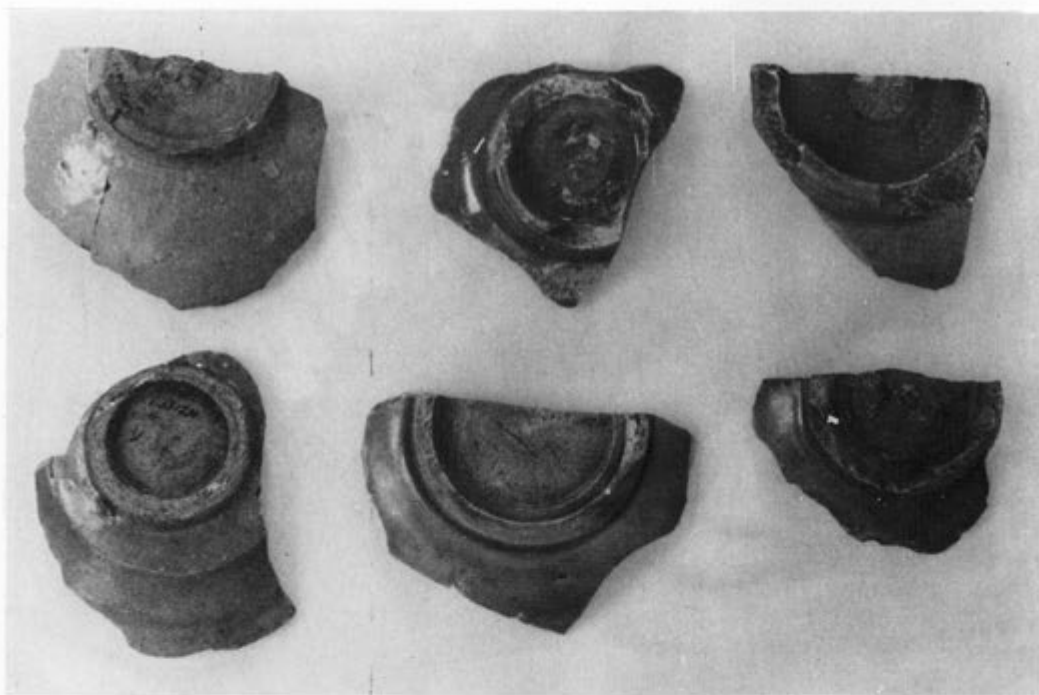


古墳時代の土器

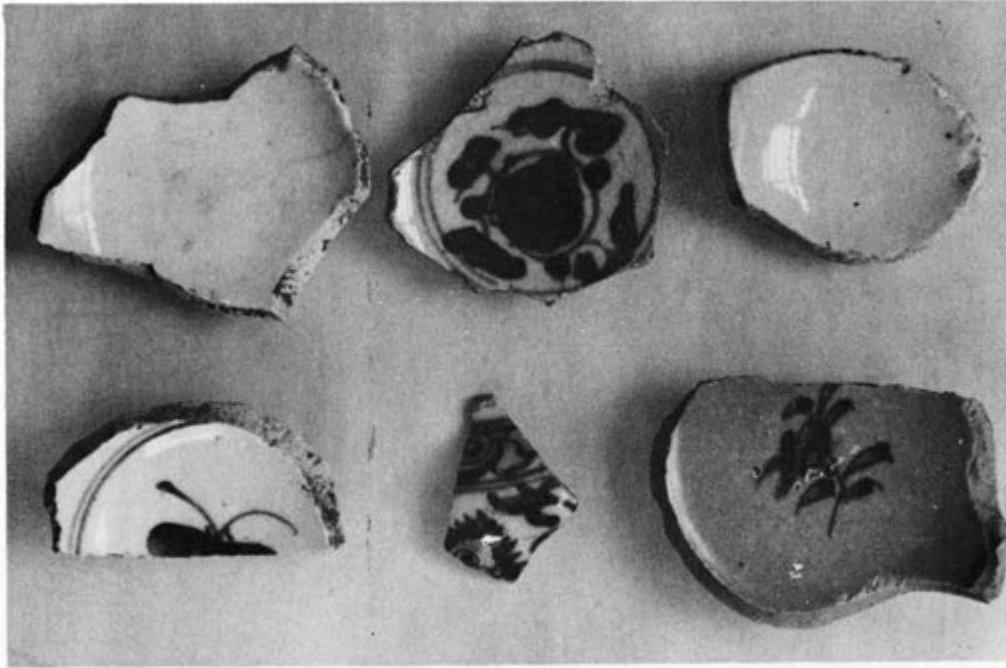
图版28



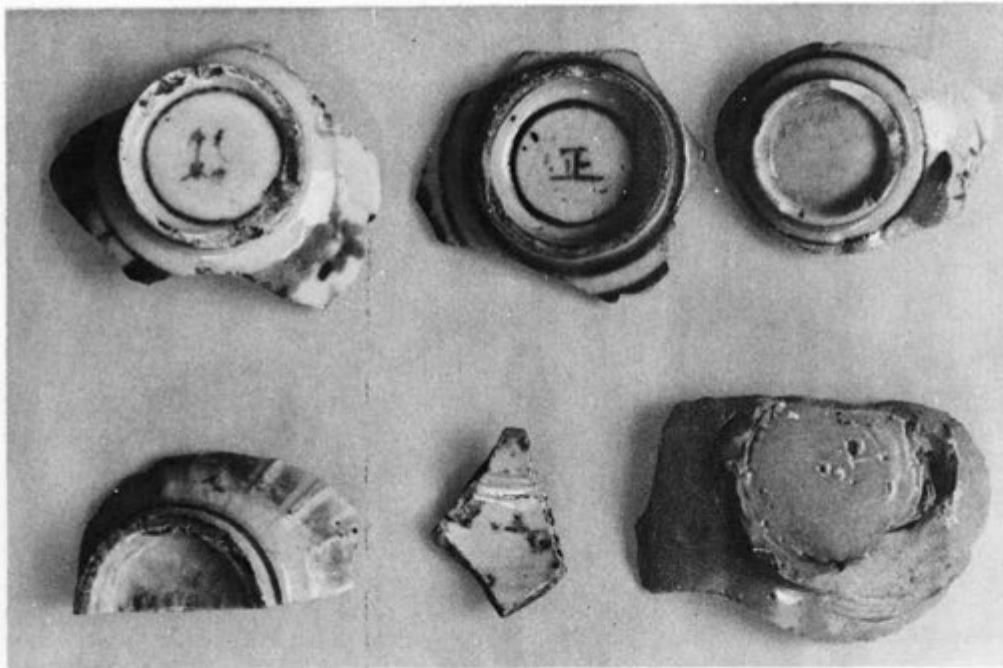
1. 磁器



2. 磁器底部

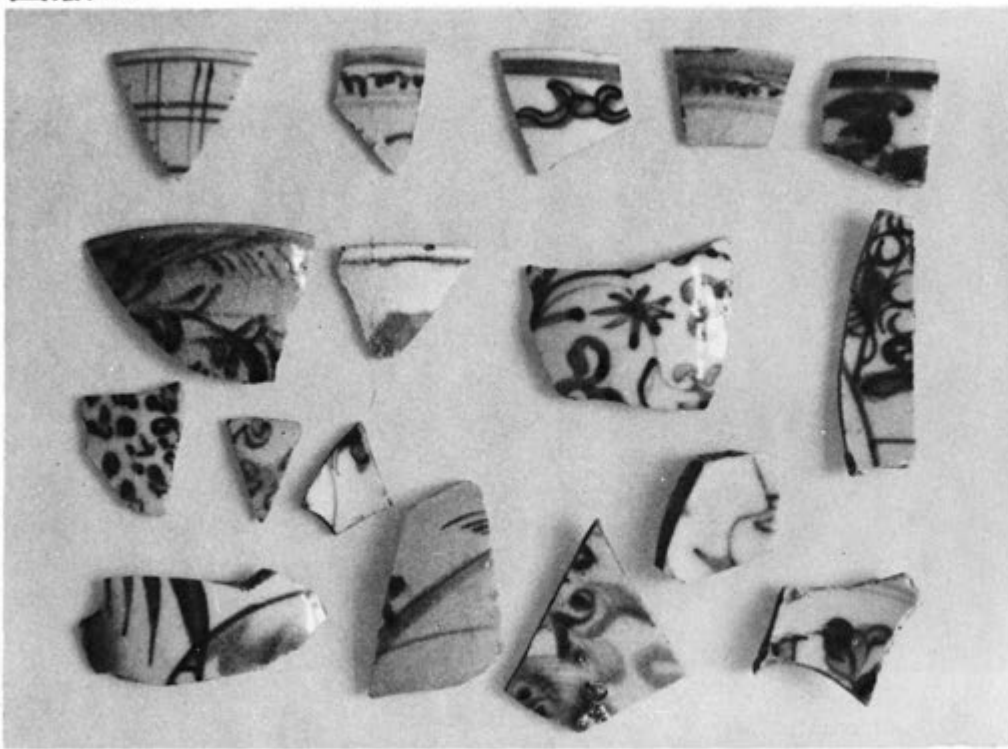


1. 磁器底部内面



2. 磁器底部

图版30



1. 磁器



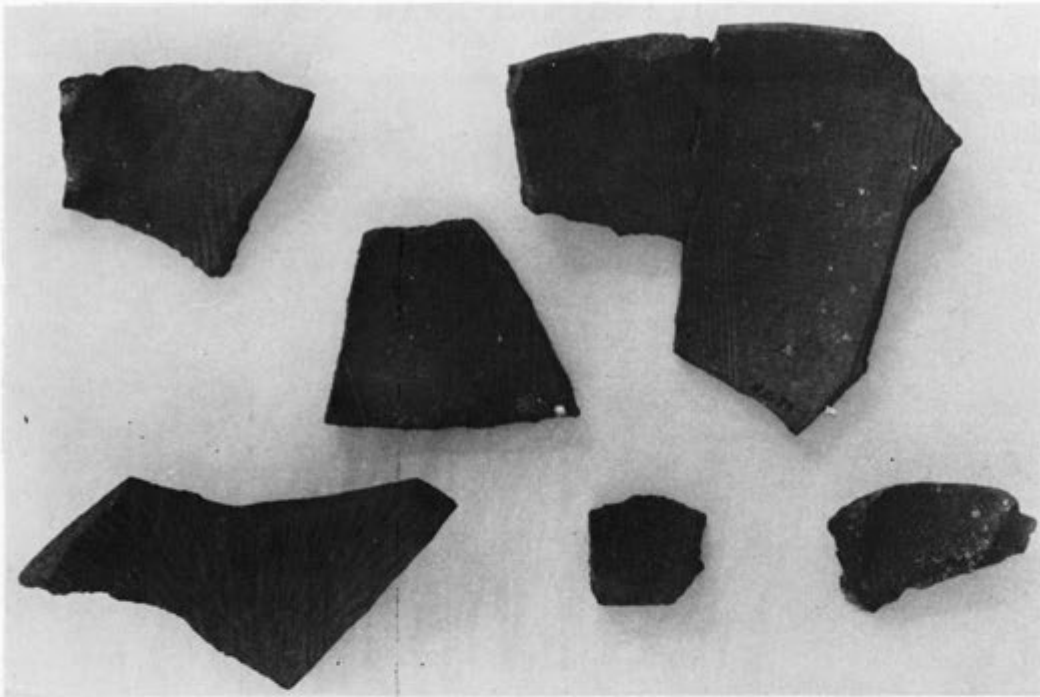
2. 磁器碗



3. 磁器碗

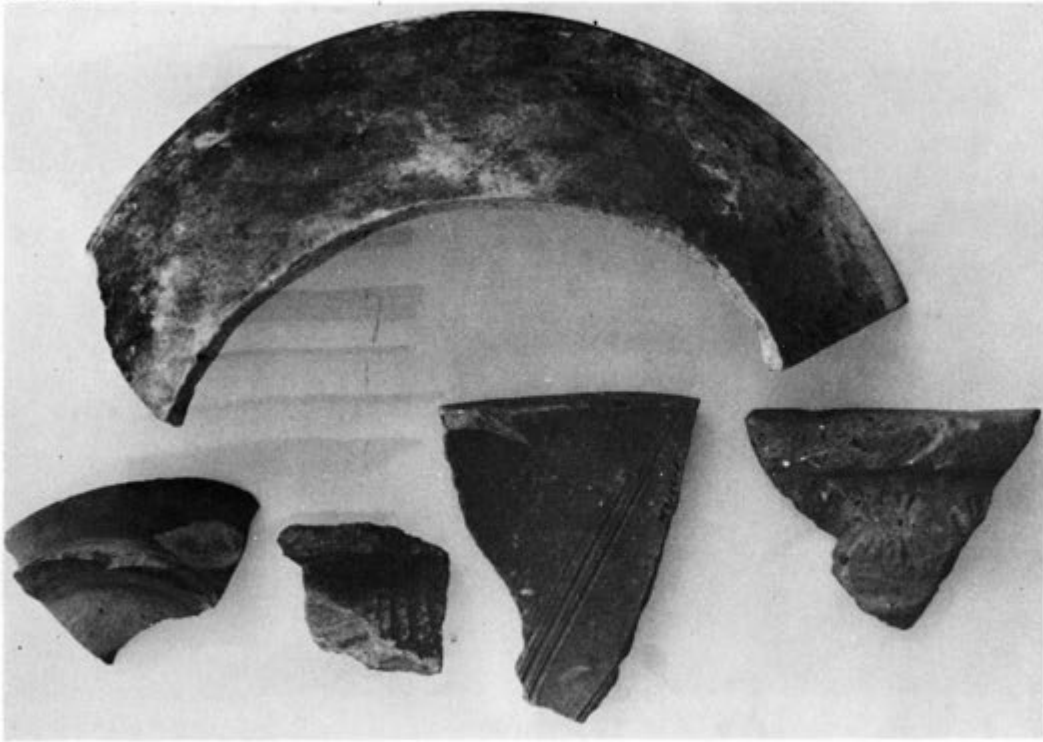


1. 陶器 (表)

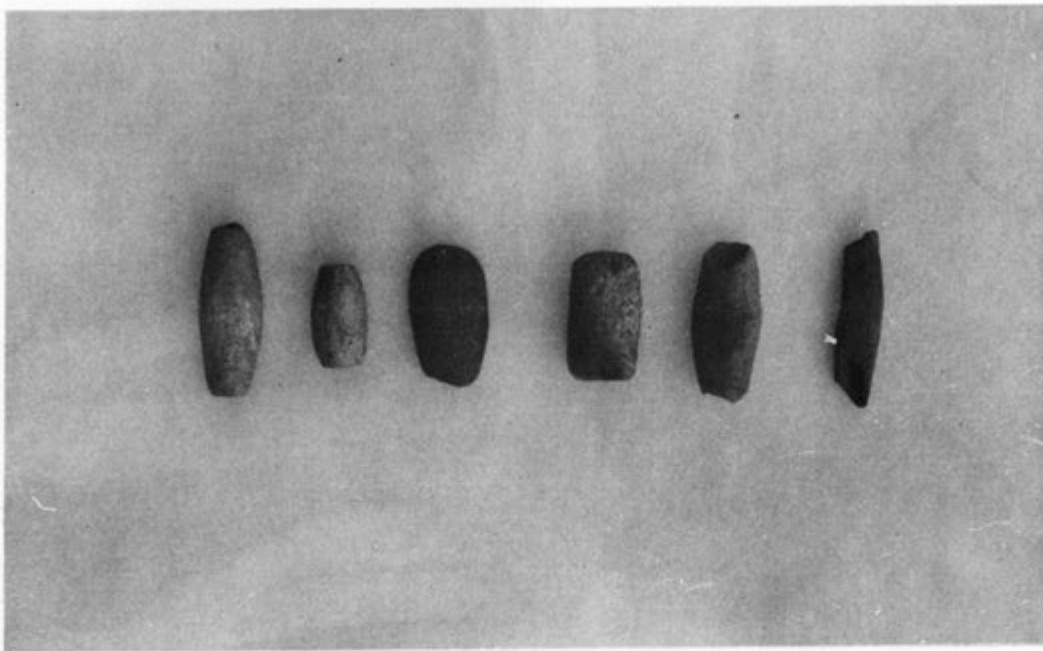


2. 陶器 (裏)

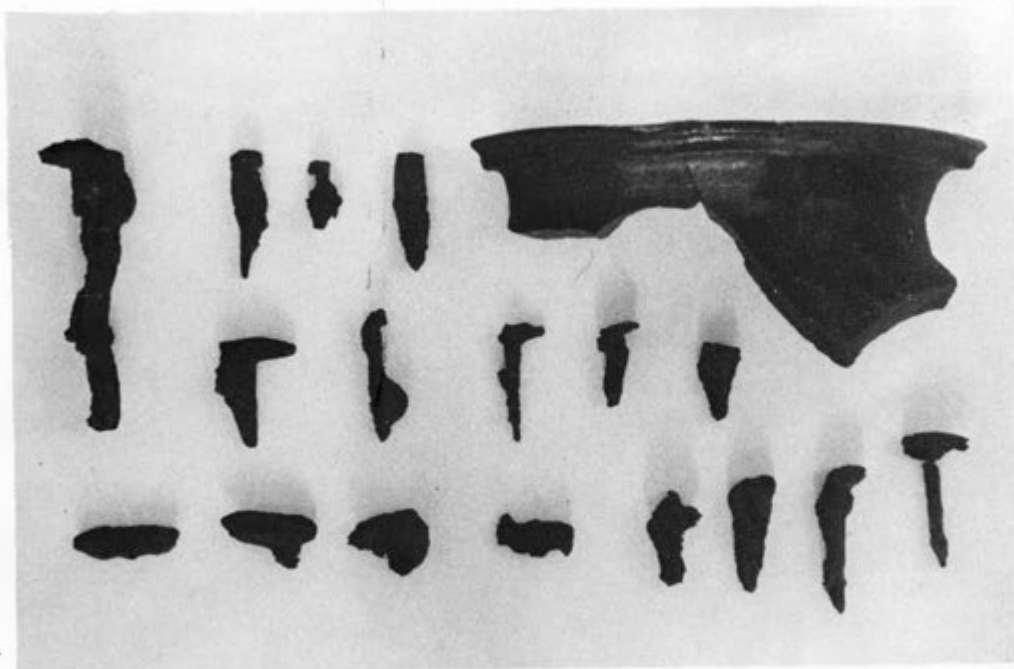
図版32



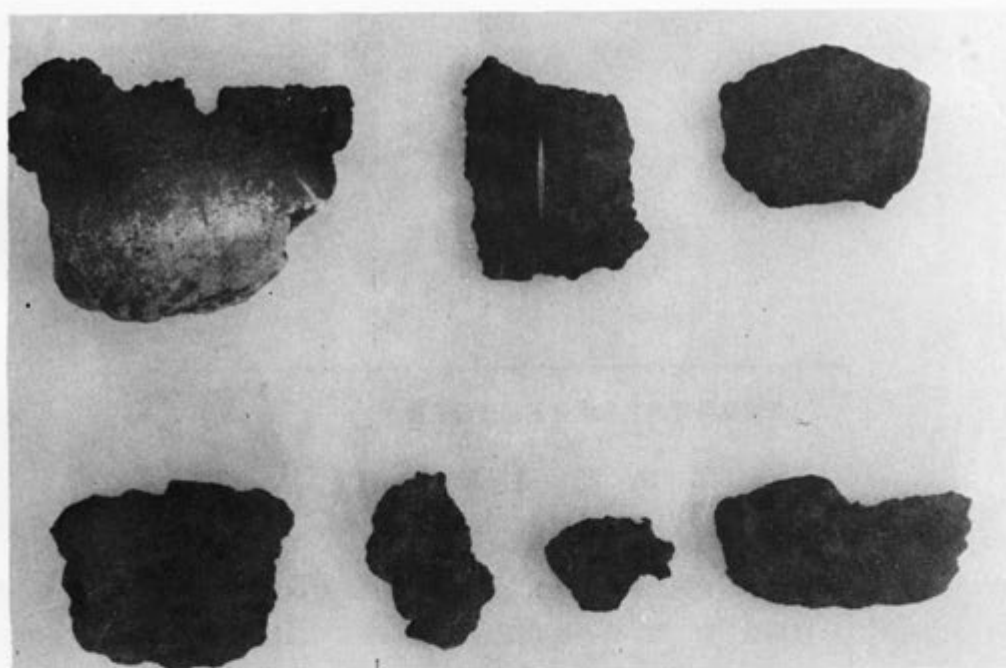
1. 土師器・須恵器・瓦質土器



2. 土 錘



1. 1号墓塚の土器と釘



2. ふいご口と鉄滓

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

西之菌遺跡

発行日 昭和53年2月28日

発行者 鹿児島県教育委員会 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 中央印刷(株) 鹿児島市春日町12番16号